

32173

災害復旧の記録

—昭和36年6月梅雨前線豪雨—



調査
No. 28

長野県

序によせて



時の経つのはまことに早いものだ。悪夢のようなあの集中豪雨のときから、はや満四年を経過した。もっとも不幸にして、被災された皆さんにとってはとても永く、そして苦しい期間の連続であったことであろう。

想いではいろいろあるが、あの日は朝から、私の耳に入ってくるニュースは、ものすごい豪雨がくるというものばかり、まことにかんばしくない。昼ごろになると長野市でも、沛然と降るかとおもうと、切ったように止む、知事室の窓からみる空は、墨のような雨雲が足早に動いている。「南

信地方はすごい雨だそうだ。」というニュースが入ってくる。夜になると長野市内の雨足の俄然はげしくなってきた。午後九時頃であったであろうか、このままではいけない、即刻必要なあらゆる手を打たなくてはと決意して部長会議を招集した。九時半頃には全部長が担当の資料を持って緊張した表情で集まった。水防の状況と今後の緊急対策、厚生救護、食糧資材の輸送対策、上流の水量調整等を相談し、現地担当の部長には直ちに出発をしてもらい、その夜はまんじりともせずあちこちから断片的に入ってくる被害ニュースによって、つぎつぎと応急対策を構じて過ぎていった。

翌日、私はできるだけ早く被災地に行って災害の状況を把握し、現地の人達をすこしでも慰めるべきであると考え、どこまでゆけるのか、途中道路はどうなっているのか被害が起きつつあるときなので状況がよくつかめないけれども、とにかく被害の中心地飯田市までは歩いてでも行ってやろうと決意して現地に向かった。

行ってみるとなるほど、聞きしにまさる悲惨な状態で、私には「ガンバッテ下さい。私も皆さんの先頭にたって力一杯やります。」と力づけて歩くのが精一杯であった。

あのとき、限られた時間ではあったが、可能なかぎり被害の状況をつかんだことは、その後上京してから中央との折衝に大きく役立つことができた。

被災地から県庁に帰って上京までの四十分ばかりの間に、「にぎりめし」を食べながら部課長に必要な事項を指示し、東京に向かった。その後十日間ばかりというものは、文字どおり「夜を日についで」応急、恒久対策にかけつりまわった。

当時の思い出はつきない。アメリカから帰った翌日の池田首相に総理官邸で、集団移住（その時はこんな言葉もまだなかった）復旧事業の早期完成、復旧の恒久改良化等陳情し深く同情をされ激励をうけたこと、災害対策知事会の会長として、他県知事とともにあち



こちと陳情して歩いたこと……………。

深夜、雑司ヶ谷の宿舎に県庁から電話が入る。「大鹿方面の生繭が輸送できないので、蛾が出てしまう。なんとかヘリコプターの手配を自衛隊に依頼してほしい」と、早速翌朝市ヶ谷の自衛隊に行って相談したところ、彼等の言うことに「天候が悪いのでヘリコプターが飛べない。」と、そこで「それでは最近の戦争は雨が降ればやらないのか。」とこちらも気がせいしているの頼みにいきながらつい口にてでしまう、などといったこともあった。

それにしても被災した皆さんは、肉親を失い、家や田畑を流された苦渋から、ほんとうに良く立直っていただいたものだと思う。また卒先活躍された国、県議会の皆さん、市町村関係者、消防団、自衛隊等の方々、県の職員、皆ほんとうに良くやっていただいた。ここにあらためて心から感謝を申しあげる。

復旧の途上、私は何回も、ときに直接現地に行って、ときにヘリコプターで空からみてきたけれども、仕事は順調に進んで、さすがのあばれ天竜も兩岸をガッチリと固められてしまったようだ。

あのときの犠牲となられた諸霊のご冥福を心からお祈りしてやまない。

再びあのような悲惨な災害は繰返してはならない。

昭和40年3月

長野県知事

西得権一

刊行のことば

「天竜くればしぶきに濡れる」

わが国の典型的な急流天竜川的情绪は、この伊那節の一節にみごとにうたいつくされています。しかし、詩趣ゆたかなこの天竜川も、流域一帯の特殊な地質構造のため、ひとたび異常降雨に見舞われると、たちまちぼう大な土砂を流出してそのたびごとに、大小の災害が発生し、いわば天竜川の生いたちは、災害の歴史であるといってもよい程で、「あばれ天竜」の名で知られております。

長野県としては稀有の大災害といわれた34年災の復旧工事に懸命の努力を注いでいた矢先、昭和36年6月23日から県下一帯に長雨をもたらした梅雨前線が、同25日以降、おりから接近した台風6号の刺激を受けてにわか活発化し、県下各地に予想外の豪雨をもたらす、特に天竜川水系は27日夜半から28日朝にかけて、連続降雨量は300-600ミリメートルという記録的な数字に達し、流域一帯の被害は、その規模において、また激甚さにおいて本県災害史上空前のものとなりました。

被災直後の航空写真を見ると、伊那谷をはさむ両側山岳地帯の、谷という谷、沢という沢ことごとくに、文字どおり凄惨な爪あとが鋭く刻まれ、また天竜本支川は至るところで溢水し、多数の人家や耕地が濁流に呑まれるという大惨状を呈しています。

かくして、伊那谷一帯の被害は全県下の90パーセントに及び、154名に上る犠牲者を筆頭に各般の分野にわたり、土木施設関係においては、実に160億円、関連事業助成事業を含めると180億円の巨額に達し、しかも伊那谷の狭い地帯に集中したため、従来の災害処理に対する概念を切換えなければならない場面にも、一再ならず遭遇したのであります。県、地元、建設業界、それに自衛隊の方々が臨機応変に異常の力を出し合って、難しい事態をよく克服し、応急措置もその後の復旧計画も今考えても、あの混乱の中で極めて組織だて適切に進められたと思うのであります。建設省当局の御好意により査定も円滑に行なわれ、又建設業界も受注態勢を確立して協力していただき、県も機構を整備して工事執行の一切の権限を建設事務所長に委任するなど、思い切った措置を構じてひたすら復旧へとばく進したのであります。

それから3年有余。

復旧途上懸念された被害もほとんどなく、順調に進捗してここに見ちがえるように見事に完成をみたことは、ひとえに被災地をはじめ広く県民の皆様方の強い復興への意欲は申すまでもなく、国、県、地元市町村の積極的な御援助と御協力、更には寝食を忘れて挺身された職員の方々の御努力、幾多の困難を乗り越えて、専心工事の遂行にあたられた県内外建設業者各位の御協力のたまものであり、ここに心から感謝の意を表する次第であります。また、被災直後はるばる全国各地から応援された建設省及び各府県派遣職員の日夜を分たぬ御尽力に負う所絶大なものがあつたことを特記し、併せて深甚なる謝意を表する次第であります。



さいわいこの災害の復旧に対しては、大巾な改良工事が併せて施工され、今後の治水対策に大きな効果が期待されるとともに、これを契機として天竜川水系治水計画の改訂が行なわれ、沿岸住民多年の宿願であった根本的な治水恒久対策が急速に進められつつあることはまことに御同慶にたえないところであります。またこの間、われわれは多くの貴重な体験や尊い教訓を学び、同時に将来における治水、防災対策に資する多くの指針を得られたことは、災害の多い本県にとって大きな意義をもつものと考え次第であります。

この意味において、復旧事業の完成を機会に災害発生の経過、被害の状況、応急対策、復旧事業等土木部関係を中心とした概要を取りまとめ、「36災の記録」として刊行を企図したものであるが、幾分でも皆様方の御参考になり、また記念として御覧願えれば幸であります。

昭和40年3月 長野県土木部長

小林武雄

序によせて……………長野県知事西沢権一郎
 刊行のことば……………長野県土木部長小林武雄
 表紙題字 長野県知事西沢権一郎

目 次

第一章 気 象

- 1-1 はじめに…………… 1
- 1-2 気象の概要…………… 4

第二章 被 害

- 2-1 被害の概要…………… 9
- 2-2 公共土木施設等の被害および復旧額の状況……………12
- 2-3 一般被害およびその他の被害……………13

第三章 水防と応急対策

- 3-1 水防本部の設置……………25
- 3-2 災害対策本部の設置……………25
- 3-3 水防活動の状況……………26
- 3-4 自衛隊の活動状況と応急対策……………28
- 3-5 救護活動……………34
- 3-6 災害救助の実施状況……………35
- 3-7 政府関係係官の現地視察および調査……………41
- 3-8 復旧工事のために……………41

第四章 復 旧

- 4-1 復旧の概況……………45
- 4-2 昭和36年公共土木施設災害復旧事業費と復旧の経過……………45
- 4-3 建設省直轄災害復旧工事……………50
- 4-4 県工事市町村工事関係……………53
- 4-5 特殊緊急砂防事業の概要……………94
- 4-6 飯田都市計画水害復興城東地区土地区画
 整理事業の概要…………… 101

第五章 集 団 移 住

- 5-1 集団移住対策事業の概要…………… 103
- 5-2 施行状況…………… 104

第六章 そ の 他

- 6-1 災害日誌の抜すい…………… 105
- 6-2 昭和36年～39年における関係者名簿…………… 109
- 6-3 図表の索引…………… 114

— 編集後記 —

第一章 氣 象

図一 長野県の水系概況



1-1 はじめに

昭和36年6月梅雨前線豪雨による災害と、復旧の記録のはじめに、長野県の河川の概況と、被害の中心になった天竜川の概況について、そのあらましを紹介しよう。

(1) 長野県水系の諸元

表-1 長野県内水系の諸元

水系	流域面積 Km ²	標準別占有面積%					傾斜別占有面積%					土地面積Km ² ()内は%					人工密度 人/Km ² 昭35国調より
		500m以下	500~1,000	1,000~1,500	1,500~2,000	2,000以上	50未満	50~150	150~300	300以上	田	畑	山林	原野	宅地		
千曲川	7,471	8	47	26	14	5	15	40	25	20	481.8 (6.5)	624.6 (8.4)	4806.2 (65.5)	140.4 (1.9)	103.5 (1.3)	1,353,584 (182)	
天竜川	3,714	4	35	44	12	5	10	35	30	25	168.5 (4.5)	182.8 (4.9)	2741.2 (74.0)	72.9 (1.9)	33.5 (0.9)	518,092 (139)	
木曾川	1,565	2	17	45	31	5	2	18	30	50	15.0 (10)	15.4 (1.0)	1385.6 (88.5)	123.7 (7.9)	2.7 (10.2)	67,615 (43)	
その他	829	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	42,214	
計	13,579	5	40	34	16	5	12	35	2	25	704.0 (5.1)	845.0 (6.2)	9568.7 (70.4)	380.4 (2.8)	143.1 (1.1)	1,981,505 (146)	
全国	369,660	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	92,006,862 (24.1)	

(2) 天龍川の概況

天龍川は、その水源を本州の中央部諏訪湖に発し、南に流れること215KM余で太平洋に注ぐ、わが国数々の大河川で、その概況は次のとおりである。

ア 流路延長および流域面積

表-2

種別	流路延長 KM	流域面積 KM ²	山地の割合
長野県内	118	3,714	85%
全流域	215	4,886	71%

イ 川幅

県内60~400m変化多し

ウ 平均河床勾配

(県内) 1/200

エ 流量

泰阜ダム地点 (流域2,980KM²)

60~140万Fhr.M³/sec

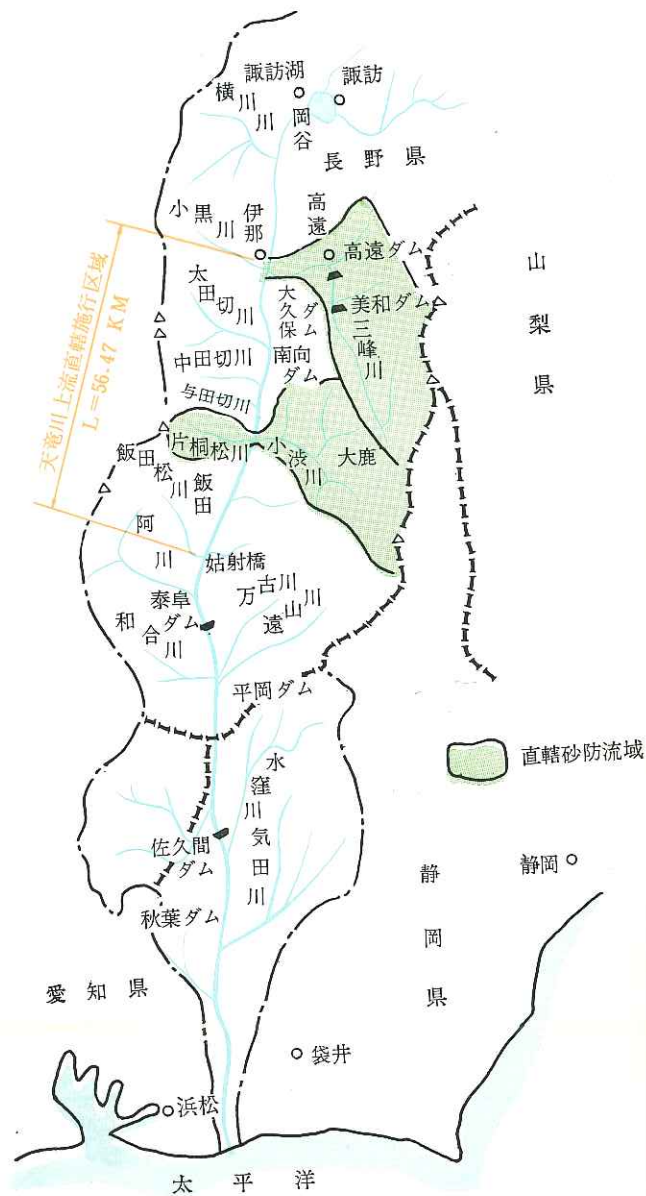
(20年間)

既往最高

ダム築造前 5,287M³/S (大12.7.18)

ダム築造後 3,500 " (昭20.10.5)

図-2 天龍川流域概況図



オ 地質の要

天龍川流域の特徴は中心から東よりに南北に伸びる中央構造線(諏訪湖より西日本を縦断している。)が走っており、これにより東側は外帯西側は内帯と大別され、その構造も変わっている。

流域内地質の概要は図-4のとおりである。

図-3

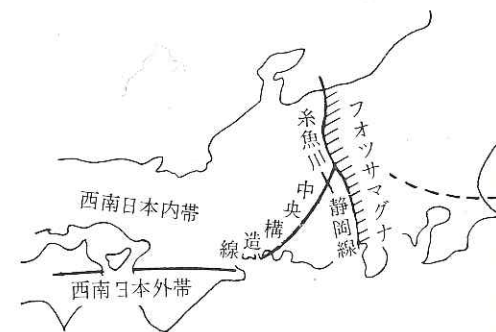
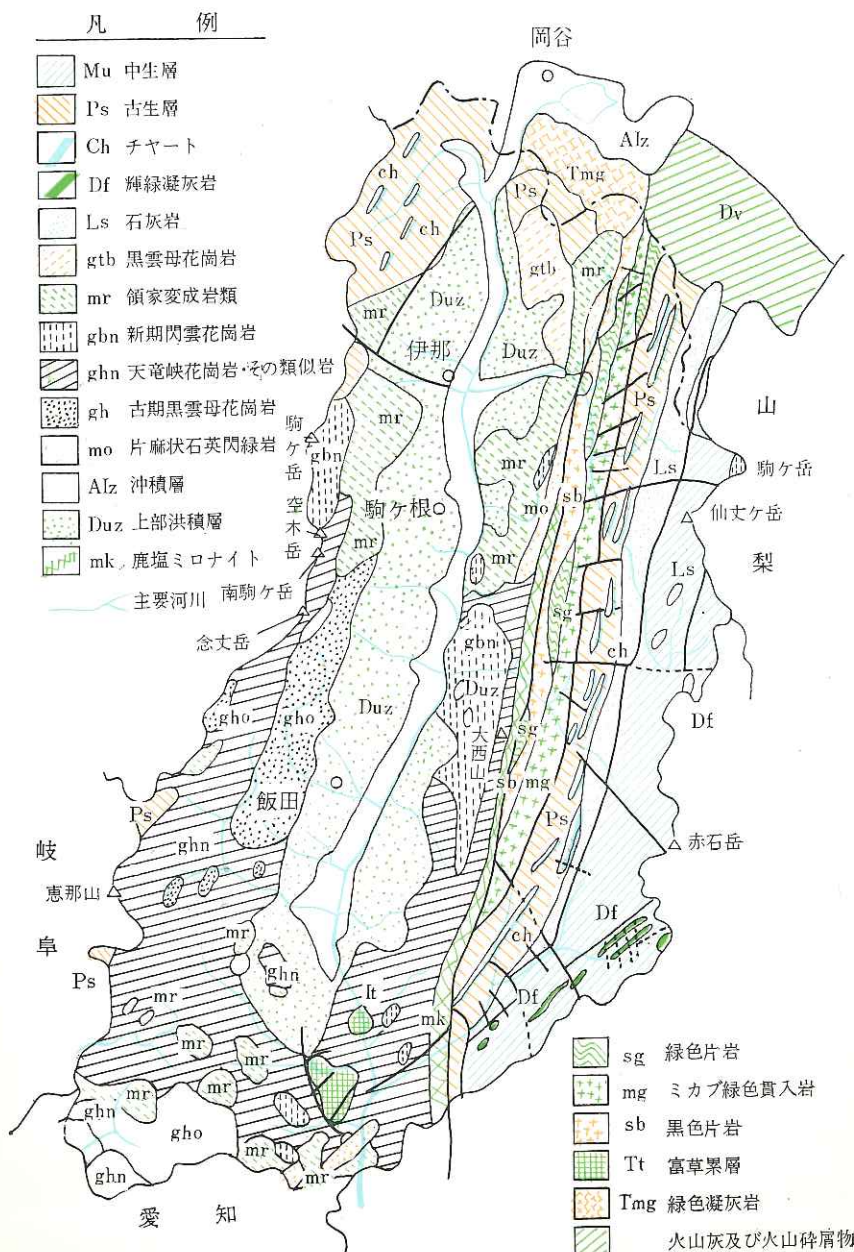


図-4 流域内地質概要図



1-2 気象の概要

昭和36年度は、梅雨前線の活動が弱く、6月にはいってからも雨らしい雨はほとんど降らなかった。県の北部は、特に雨量が少なく水不足は深刻なもので、各地から干害が伝えられていた。

23日ころから、本邦西方の高圧帯が急に衰えて、西日本の南方洋上は低圧部となり、関東の東方海上に高気圧の壁が形成された。このため、本州の上空に著しく湿った空気が南から多量に流れ込み、梅雨前線の活動を促した。久しぶりの雨は、千天の慈雨として喜ばれたが、このころ四国から紀伊半島にかけては、既にかかなりの大雨となり、早くも水害の発生が伝えられた。強い雨の区域は、25日、26日と次第に東へ移動し、近畿、東海地方にひろがった。そして、前線の北上に伴って中部内陸地帯へ波及し、長野県でも日雨量50~100mmを観測した。

26日夜四国南方洋上の低圧部にあった熱帯性低気圧の一つが、発達して台風第6号と命名された。この台風の北上によって刺激された梅雨前線は、ますます活発になり東海、中部地方に豪雨が降りだした。しかも、長野県南部を東西に走っていた梅雨前線は、関東東方洋上に根を張った高気圧のため、ほとんど動かず、27日には伊那谷を中心として、県南部は、記録的な集中豪雨に襲われた。これは、西方から近づいた気圧の谷の前面に著しく湿った南の空気が舌状に流れ込んだため、県南部の上空はちょうどこの空気の噴流の場にあたり、しかも、この気流は、きわめて不安定で、伊那谷一帯は、大積乱雲におおわれていた。このために、この地方では1時間40mm、10分間に14mmというような極端な集中豪雨が降った。

28日には気圧の谷が本州の東に抜け、梅雨前線は南に下がった。このため強雨域は、伊豆半島から関東南部に移り、県下の空模様は小康を得た。しかるに、気圧配置はその後もあまり変わらず、28日の夜になって新たな湿舌が前よりはやや東によって侵入した。このため、前線は再び北上して

図-5

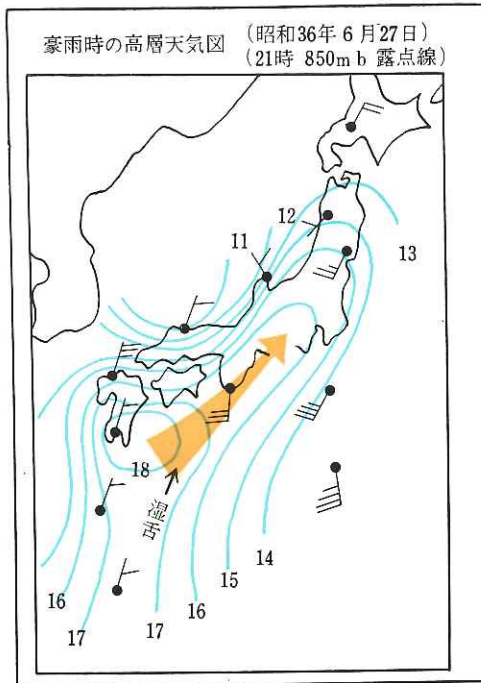


図-6

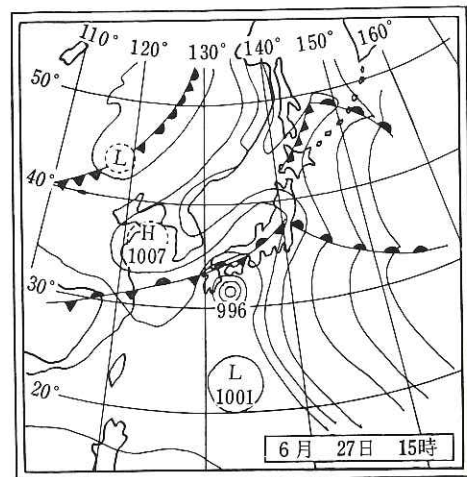
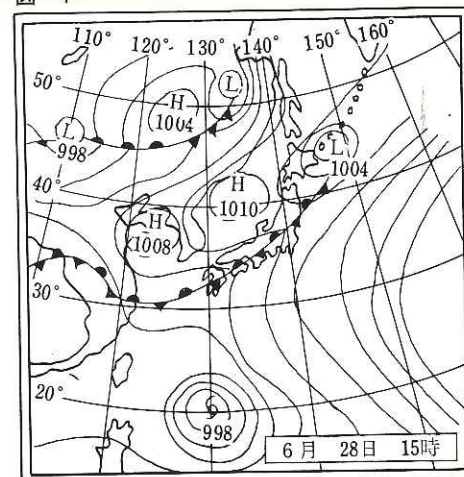


図-7



活発になり、29日の朝まで県の南東部に強雨を降らした。前線は、29日の日中にやや衰えて北上し、気圧がやや南に下がると同時に西に張り出しはじめ、西日本の南海上にあった低圧部は台湾近海に押しやられて約1週間続いた異常な気圧配置はようやく例年の梅雨末期の型に戻った。このため前線活動の中心は北に移動して強雨域が裏日本を西から東に移動し、6月30日から7月1日にかけて北陸に大雨を降らせた。

この約10日間の前線活動は、およそ半日くらいの周期で強弱をくり返した模様で、28日までは台風や熱帯性低気圧のこん跡が通った際に、また、29日以後は弱い気圧の谷が通った際に特に強められたものと思われる。

図-9

(参考)

過去における災害をおこした梅雨時の降雨量分布図

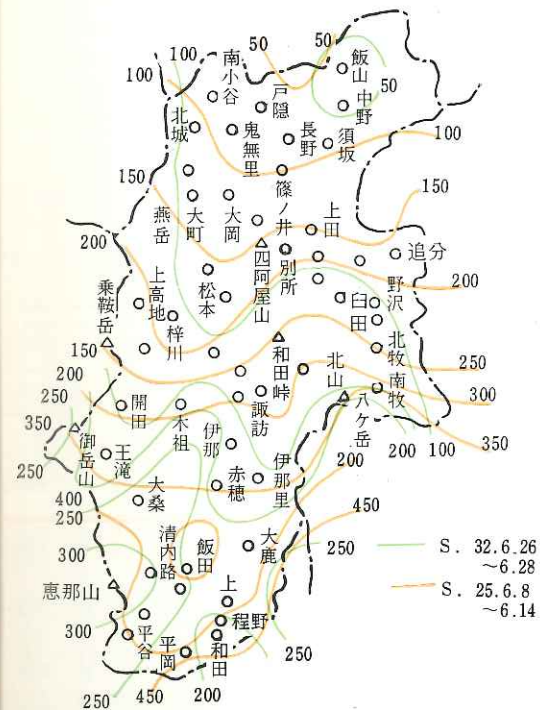
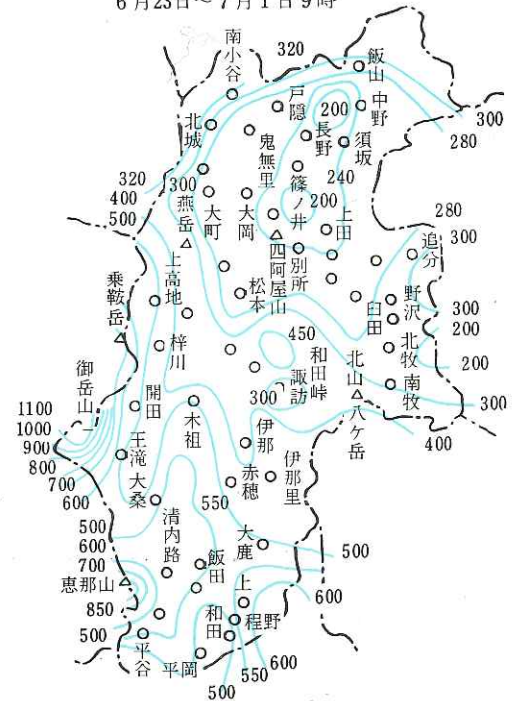


図-8

昭和36年梅雨前線豪雨連続降雨量分布図
6月23日~7月1日9時



(2) 降雨の状況

梅雨前線は、天竜川流域に異常豪雨をもたらしたが、その状況は、次のとおりである。

ア 主な地点の降雨量表

表-3

地点	降雨量			摘要
	連続	日最大	2日最大	
御岳山	1,404	226	413	時間最大40mm 平均6月の1か月雨量230mm
乗鞍岳	932	167	304	
飯田	602	325	397	
遠山	560	241	385	
大鹿	537	275	325	

イ 連続降雨量分布図 (図-8参照)

表-4 日 雨 量 調 書

水系	観測位置	既往最高		6 月 梅 雨 前 線 豪 雨														備 考	
		年月日	日雨量	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6		計
天竜	下伊那郡天竜村平岡	—	—	1	17	46	61	218	100	45	1	7	0	4	1	0	13	514	
//	下伊那郡平谷村	昭20 10.4	246.7	4	24	25	83	185	80	60	5	18	2	27	17	4	5	539	
//	下伊那郡大鹿村	—	—	4	27	24	44	285	50	44	24	9	1	3	30	0	2	537	
//	飯田市大平	昭15. 6.17	210.7	1	33	25	116	229	56	68	37	13	5	34	75	8	14	714	
//	下伊那郡遠山	—	—	2	16	34	43	241	144	51	0	14	—	2	3	1	9	560	
//	諏訪郡富士見町	—	—	11	34	15	40	154	113	33	24	—	1	4	43	22	11	505	
//	伊那市伊那	—	—	10	26	13	72	126	60	42	27	6	1	15	35	2	15	450	
//	上伊那郡長谷村伊那里	—	—	4	33	16	46	250	38	34	18	6	1	1	31	2	6	486	
//	飯田市飯田	—	—	4	29	21	72	325	53	28	33	14	1	2	17	1	2	602	

表-5 代表地点における過去の降雨量との比較

観測所名	災害年		昭和20年				昭和25年				昭和28年				
	月日	最大雨量	月日	日数	連続雨量	月日	最大雨量	月日	日数	連続雨量	月日	最大雨量	月日	日数	連続雨量
清内路	10.4	203.0	10.1 10.10	10	55.2	6.11	96.5	6.8 6.14	7	360.9	7.17	123.3	7.16 7.24	9	425.5
飯田	10.4	△43.2 105.3	10.1 10.11	11	417.8	6.10	80.0	6.6 6.14	9	358.5	7.19	△26.7 69.5	7.16 7.24	9	214.6
大鹿	10.4	184.2	10.2 10.11	10	368.3	6.13	102.7	6.8 6.14	7	381.6	7.19	96.0	7.16 7.23	8	308.0
伊那里	10.4	174.3	10.1 10.11	11	390.6	6.10	137.9	6.9 6.14	8	417.0	7.19	80.0	7.16 7.23	8	243.0

観測所名	災害年		昭和32年				昭和34年				昭和36年				
	月日	最大雨量	月日	日数	連続雨量	月日	最大雨量	月日	日数	連続雨量	月日	最大雨量	月日	日数	連続雨量
清内路	6.27	172.4	6.24 7.5	10	377.5	8.12	80.0	8.12 8.13	2	159.0	6.27	269	6.23 6.30	8	587
飯田	6.27	△32.8 178.6	6.24 7.5	10	361.8	8.12	△10.3 76.0	8.12 8.15	4	151.0	6.27	△40.0 325	6.23 6.30	8	565
大鹿	6.27	153.5	6.26 7.4	9	334.8	8.13	148.0	8.12 8.15	4	199.0	6.27	275	6.23 6.30	8	492
伊那里	6.27	106.5	6.26 7.5	10	238.6	8.13	63.0	8.12 8.14	2	87.0	6.27	127	6.23 6.30	8	376

(連続雨量) (△は時間最大雨量) (雨量単位mm)

エ 代表地点における過去の降雨量との比較

以上の表でわかるとおり、この地域に対しては、いかに降雨が異常であったか、またいかに多かったか(過去におけるこの水系の年平均降雨量(明34~昭25年までの50年間)が1.744ミリメートルである。)ということがわかるのである。

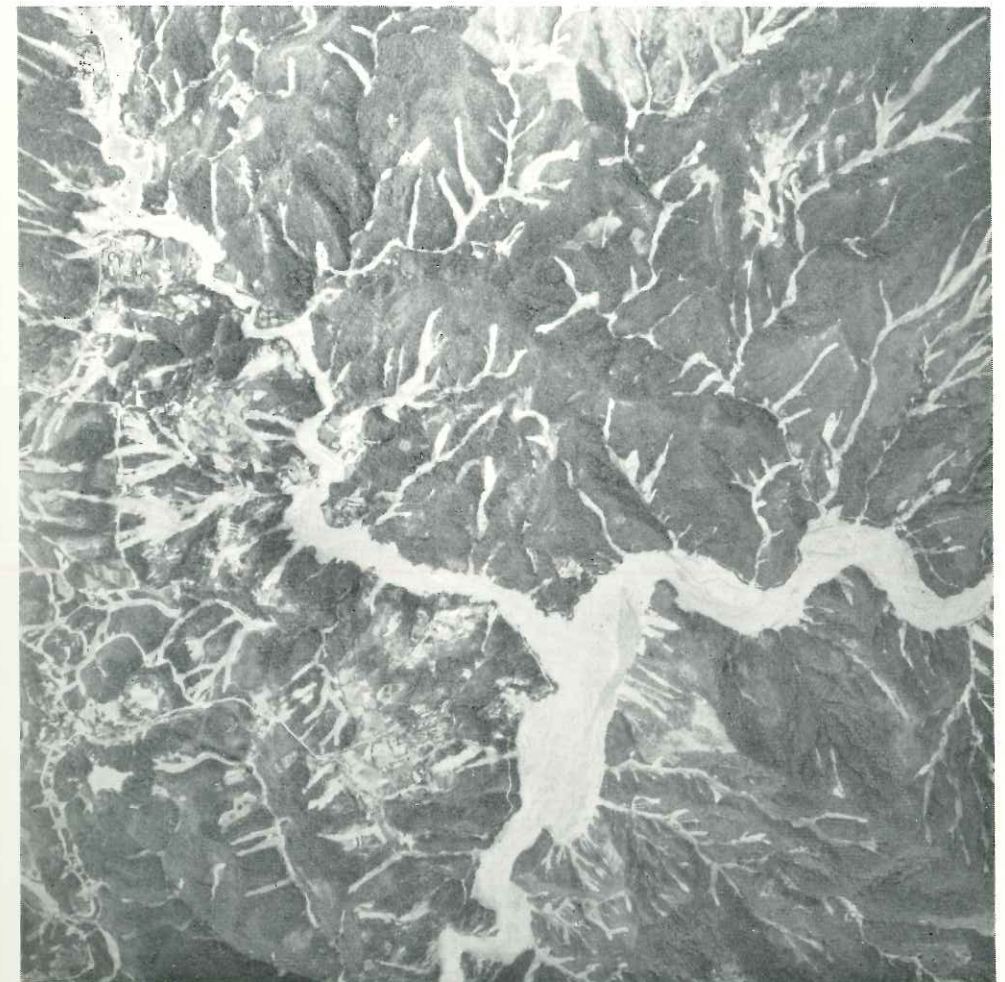
(3) 最高水位と洪水流量

洪水の出足が早く、急上昇したために、小渋川合流点より下流の量水標は、はんらん、流失等により観測不能となり、後日こん跡等によって推定せざるを得なかった。

表-6 最高水位と洪水流量

観測名	沢渡水位	竜ノ口水位	時又水位	泰 阜 ダ ム		摘 要
				水 位	流 量	
年次	m	m	m	m	m ³ /sec	
昭20	2.51	3.64	7.50	5.20	3,500	
24	2.12	3.27	4.54	欠	1,218	
25	2.42	4.00	5.91	4.85	2,662	
28	2.12	3.33	7.58	4.50	2,468	
32	2.12	3.68	6.60	4.30	2,705	
33	1.10	2.80	5.50	欠	1,424	
34	2.10	3.40	6.20	//	1,486	
36	2.48	4.00	10.00	5.40	3,623	
警戒水位	1.50	1.80	4.30			

(・印は推定値)



むざんに削りとられたツメあと(四徳川小渋川合流点附近) 白くみえるのは崩壊した沢、太いのは小渋川と四徳川



天竜川のはんらん状況（下伊那郡豊丘村高森町附近）

第二章 被 害

2-1 被害の概要

梅雨前線豪雨による災害は、本県にとって250年来のものともいわれ、その被害額は340億円余におよび県政史上未曾有の大被害であった。(正徳年間末の年(1,715年)6月18日に大災害があった。247年前)

すなわち、降雨が強くなりはじめた27日の午後3時すぎ小溪流のはんらんから被害が出はじめ、夕方までには、事態が最悪のものとなり、夜にはいって被害は激増した。

文字どおり恐怖と絶望に一時はぼう然自失という言葉そのもののような状況で人的被害、家屋被害も相次ぎその惨状は目をおおわしめるものがあった。

今回の災害の特徴は、記録的な豪雨によることはもちろんであるが

- 長期間降り続いた末に大雨となった。
 - 山腹の崩壊が著しく、流出土砂がぼう大なもので山津波を起こした。
 - 地質がゼイ弱であり(中央構造線による影響)水によって、侵蝕、崩壊を起こしやすい状態の部分が多かった。
 - 天竜川の支川は本川にほぼ直通に流れ込んでおり、しかも河床勾配が急であった。
- 等いろいろの理由があげられている。

ことに大鹿村大西山の大崩壊による土砂は、320万立方メートルと推定され、小渋川はせき止められて流路を変えて流れるという現象を生じ、天竜川本川も飯田市水神橋付近から川路までの約10キロメートル間に90万立方メートル余の土砂のたい積をみた。

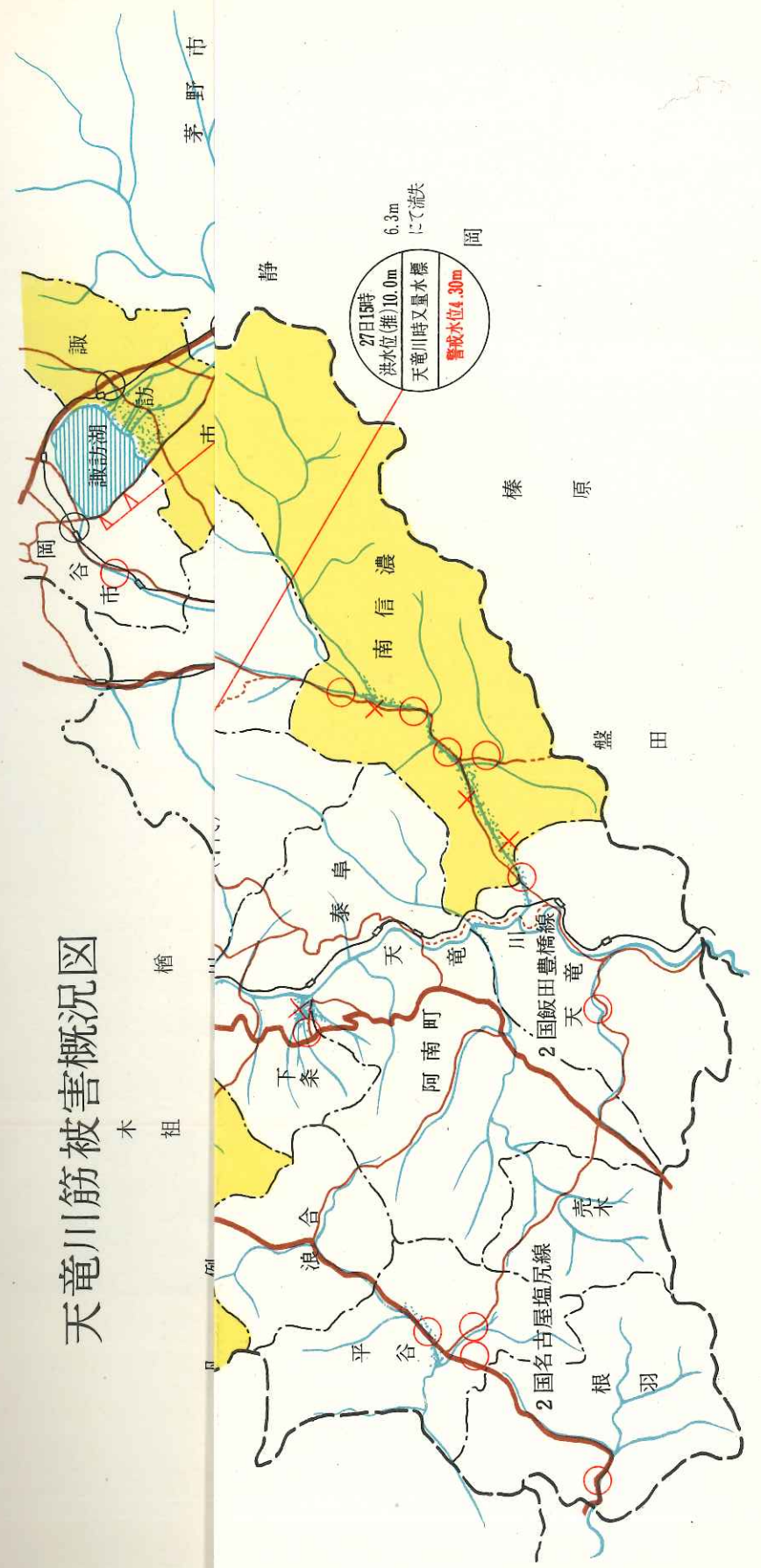
表7 昭和36年災害の府県別状況(復旧決定額)

順位	都道府県名	県工事		計	平均国庫負担率
		百万円	百万円		
1	長野	11,180	3,372	14,552	0.934
2	福井	8,983	582	9,565	0.958
3	北海道	6,003	3,549	9,552	0.844
4	兵庫	4,915	876	5,791	0.697
5	新潟	4,083	664	4,747	0.799
6	静岡	3,401	806	4,207	0.711
7	岐阜	3,455	282	3,737	0.804
8	三重	2,864	647	3,511	0.748
9	石川	2,329	603	2,932	0.804
10	大分	2,028	665	2,693	0.849

(災害統計より)



天竜川筋被害概況図



天竜川筋被害概況図

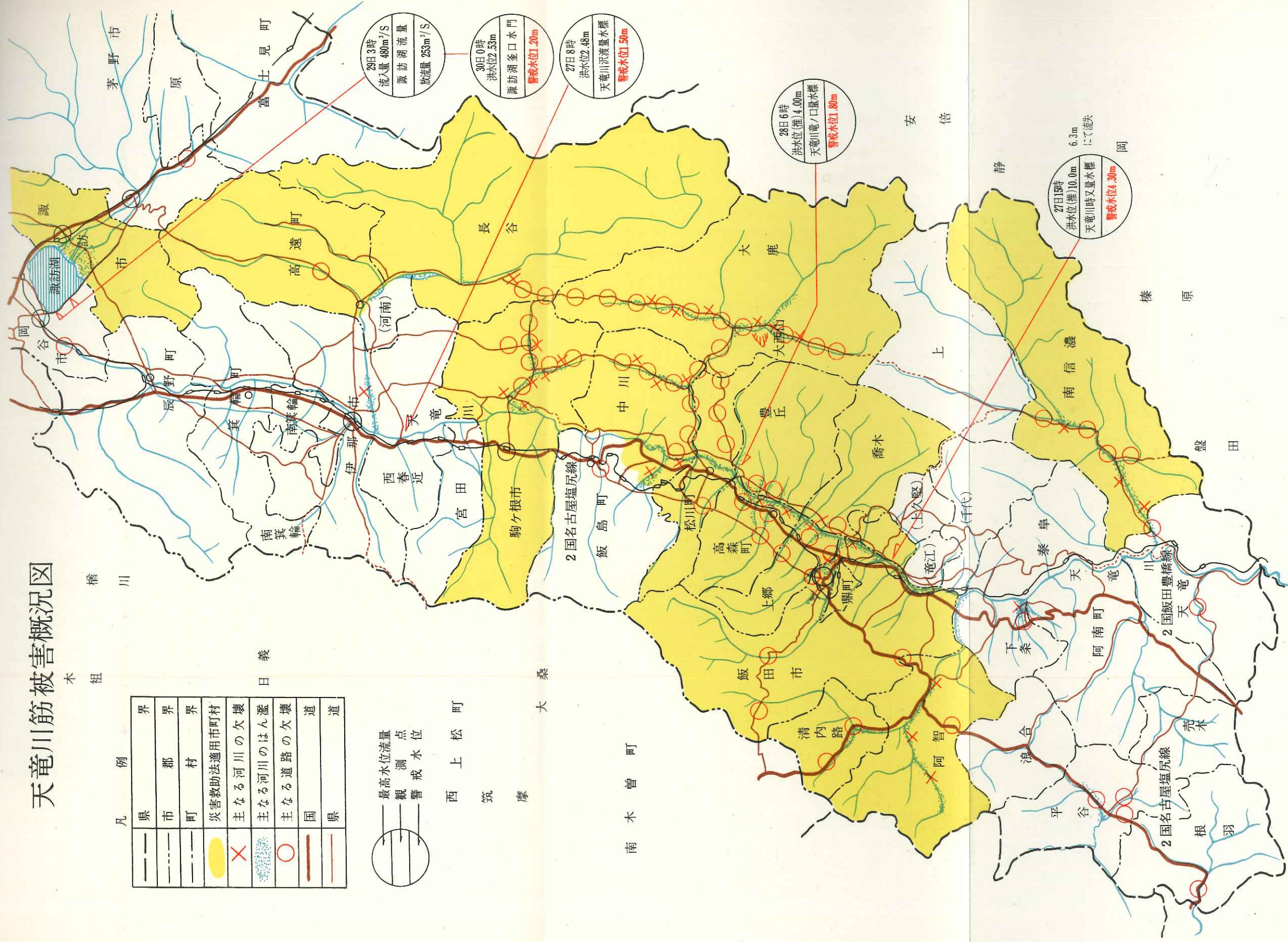
凡 例

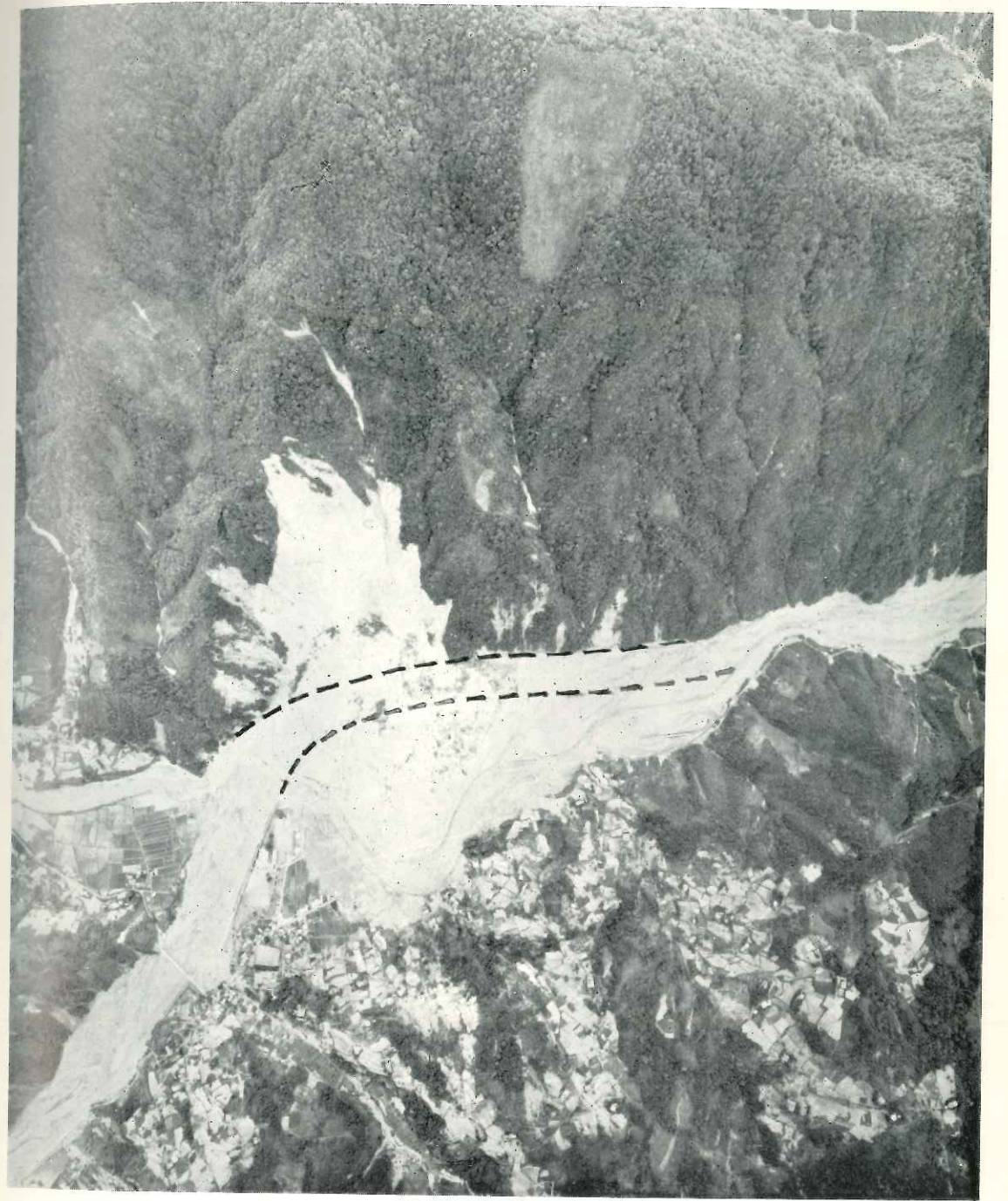
— — —	界
— · — · —	郡
— — —	村
■	災害救助法適用市町村
×	主なる河川の欠壊
■	主なる河川のはん濫
○	主なる道路の欠壊
— — —	国
— — —	県



西 上 松 町
 筑 摩 大 桑

南 木 曾 町





大災害の一因となつた大西山の大崩壊（大鹿村大西山）（崩壊土砂320万立方メートル）

2-2 公共土木施設等の被害および復旧額の状況

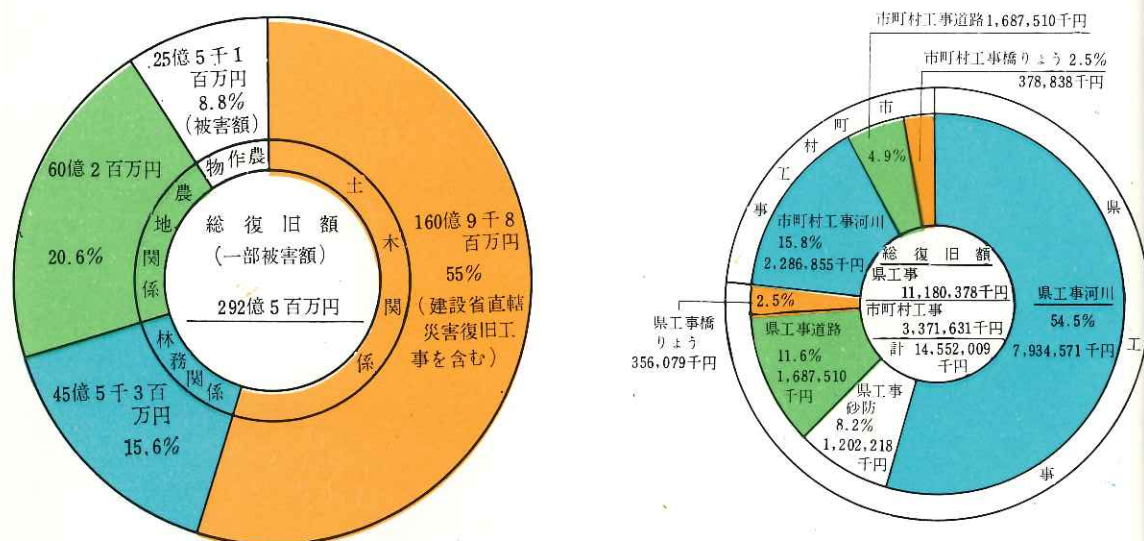
(1) 公共土木施設の被害および復旧額の状況

表-9 (単位: 百万円)

種別	被害額	国庫補助決定額		同左のうち上下伊那分	B/A	摘要
		A	B			
建設省直轄災害工事	1,546	1,546	1,428	92		
県工事	13,137	11,180	8,725	78		
市町村工事	3,978	3,371	2,872	85		
計	18,661	16,097	13,025	81		

(2) 昭和36年公共土木施設国庫負担災害所管別工種別復旧額表

表-10



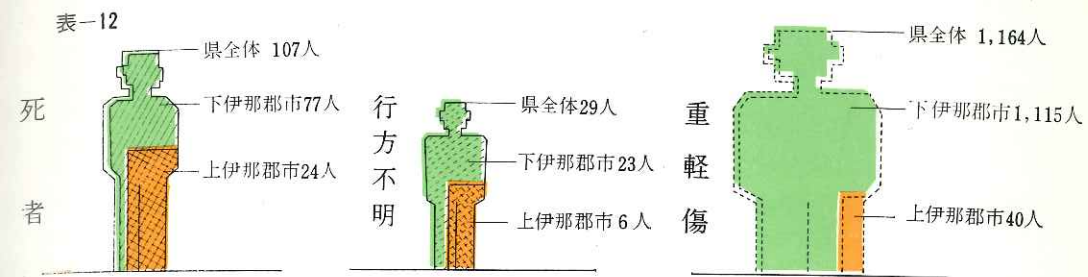
(3) 農林被害総計表

表-11 (単位: 千円)

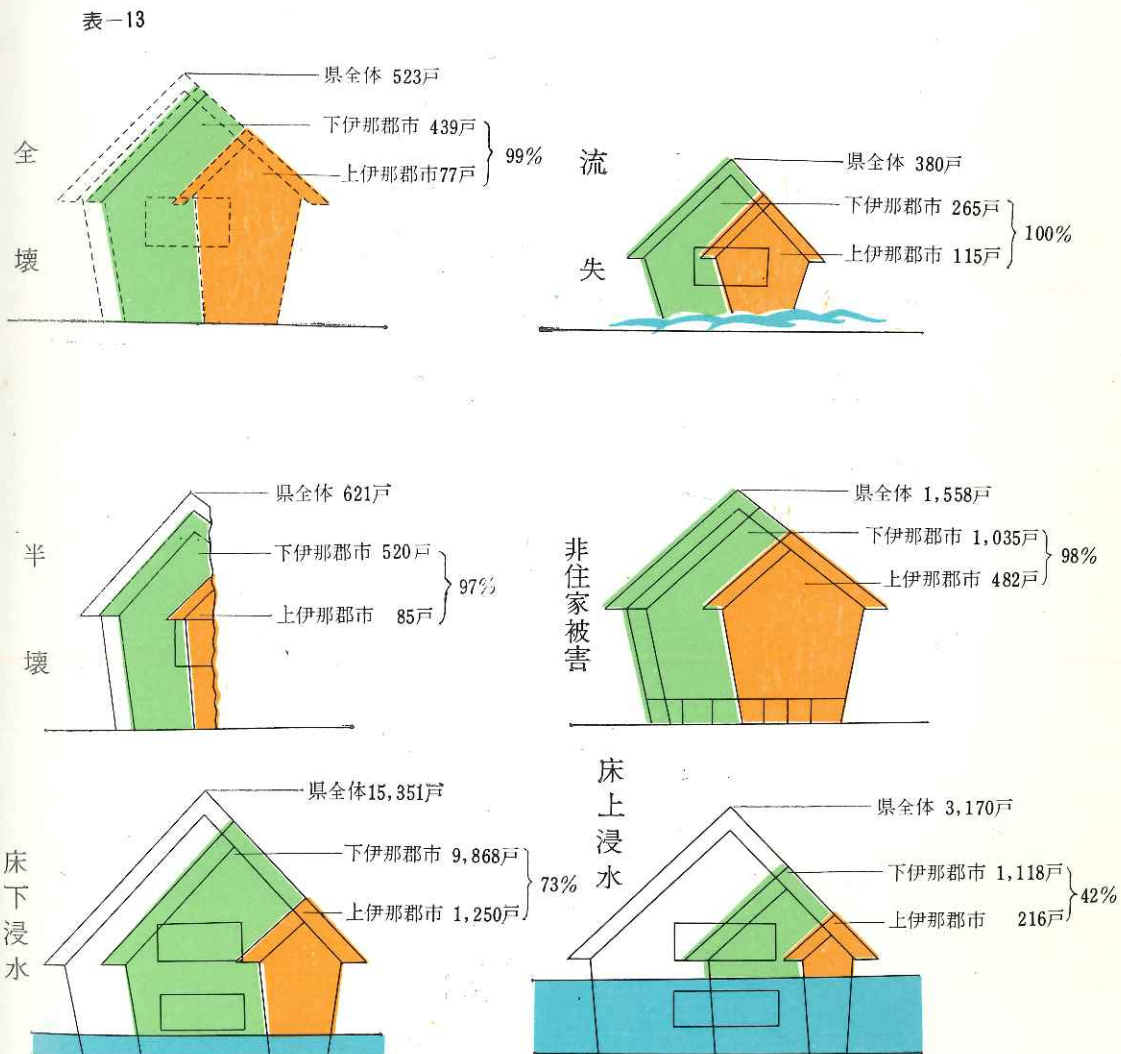
所管別	内訳	県全体復旧額または被害額	うち上・下伊那分	割合 A/B	摘要
林務関係	治林施設産物	山道等	2,210,144	61	被害額を示す。
			469,318	88	
			369,069	92	
			3,048,531	67	
農地関係	農業用施設	地設連	1,885,308	99	国庫補助災害復旧額
			3,183,501	81	
			147,798	82	
			5,216,607	87	
農作物	果樹	稲	688,316	53	被害額を示す。
		桑	141,301	56	
		他	146,510	78	
			346,847	43	
			1,322,974	52	
			2,551,349		

2-3 一般被害およびその他の被害

(1) 人的被害



(2) 家屋の被害



(3) 昭和36年直轄災害復旧内訳表

表-14

(単位千円)

工事事務所名	河 川		砂 防		ダ ム		計	
	か 所	金 額	か 所	金 額	か 所	金 額	か 所	金 額
千曲川工事	17	115,891	—	—	—	—	17	115,891
信濃川水系砂防	—	—	1	1,702	—	—	1	1,702
天竜川上流工事	42	1,373,797	3	31,734	1	23,000	46	1,428,531
計	59	1,489,688	4	33,436	1	23,000	64	1,546,124

(4) 鉄道の被害

静岡鉄道管理局管内の被害は、297件3億3千万円余におよび、中でも飯田線は下伊那を中心に大きな被害がでて185か所2億5千万円にのぼり、徹夜復旧に当たったが6月27日から7月15日まで19日間の長期にわたり不通となった。



川 路 駅 侵 水 状 況 (信毎提供)

(5) 飯田線被害総計表(県内分)

表-15

種 別	件 数	数 量
路盤欠壊流失	31	10,000m ³
土砂崩壊	29	2,000 //
線路侵水埋没	3	10,000 //
そ の 他	72	
計	135	

(6) その他の施設被害

表-16

単位千円

種 別	件 数	金 額
教育施設	45	128,044
観光施設		53,424
上下水道		51,378
水 産		186,534
畜 産		670,909
工 場	2,859	756,076



中 川 村 四 徳 分 校 の 惨 状 (信毎提供)



濁流がしぶきをあげる飯田松川（飯田市）



野底川のはんらん（飯田市内）信毎提供



被災直後の天竜川のはんらん状況（昭36.7.2.撮影）



天竜川の出水状況（飯田市時又附近）



濁流に洗われた市内（2級国道名古屋塩尻線飯田市北方）

侵水状況
（飯田市時又地籍）



濁流に洗われた道路（県道幸助飯田線飯田市白山町）

道路にあいた大穴
 (2級国道飯田豊橋線)
 飯田市長姫町



天竜川の支川はこのようにはん
 (豊丘村間沢川) 信



山津波と四徳川のはんらん(中川村 大草 後日集団移住によりこの地を離れた) 一信毎提供一

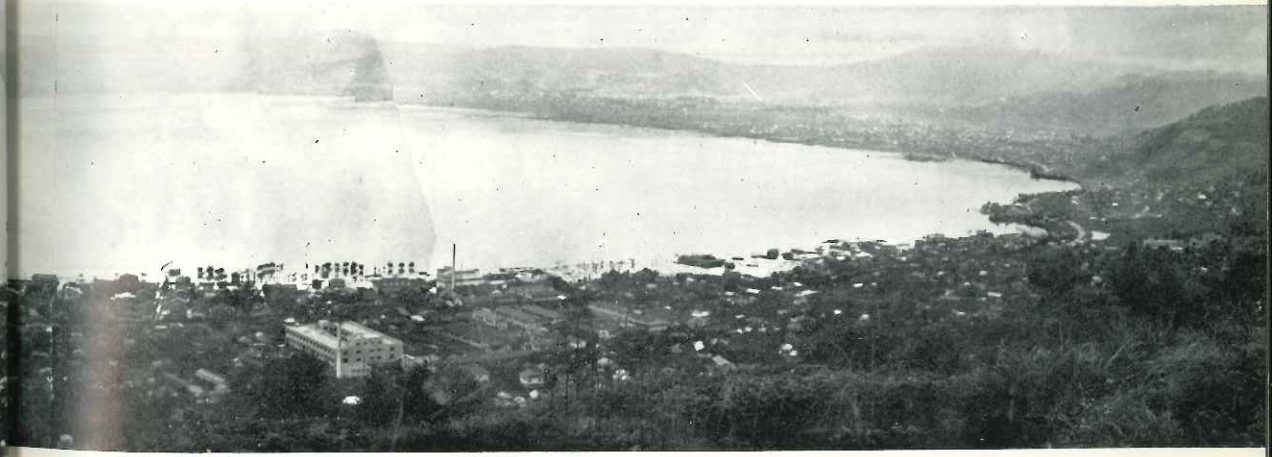


↑土石流に埋まつた民家
(駒ヶ根市中沢上割)



←三峰川のはんらん(伊那市中県)

水びたしとなつた諏訪市内→



諏訪湖のはんらん



山津波と四徳川のはんらん（中川村四徳）信毎提供



濁流に埋まる体育館（大鹿村鹿塩）

第三章 水防と応急対策

3-1 水防本部の設置

6月26日12時大雨情報が発令されるや、直ちに河川課内に水防本部を設置し、水防態勢に入ると共に水防無線をフルに活用して現地との連絡に当り、警戒態勢の指示水防資材の確保に、全力をあげ、また、各地区の水防団もそれぞれの部署において活躍を開始した。

3-2 災害対策本部の設置

各地における懸命の水防活動も空しく被害はますます激甚化の様相を呈し、水防本部へ入る情報は悪化するばかりとなったため、知事は27日21時に緊急部長会議を招集して災害対策本部を設置するとともに、災害の規模が相当広範にわたり、被害が激甚であると推定されたので、円滑な救助活動を実施するため、27日午前11時下伊那郡、飯田市へ唐沢社会部長、上伊那郡、駒ヶ根市へ平野農地経済部長、西筑摩郡へ中田林務部長が救助のため現地へ出発した。その後被害者の様相が深刻化し、諏訪地方にも被害が拡大したので緊急救助の必要性から次のとおり、現地災害救助対策本部が設置され、県本庁、出先機関を挙げて総合的な救助を実施することとした。

所 掌 区 分	責 任 者
下伊那郡、飯田市	笠原副知事、唐沢社会部長
上伊那郡、駒ヶ根市	平野農地経済部長
諏訪郡、諏訪市	橋詰出納長

そして、引続き、災害救助法の発動、自衛隊の派遣申請の依頼、あるいは水防資材の確保と、これの輸送等全县をあげて文字どおり不眠不休でこの大災害に対処した。27日夜に至り、電々公社の電話線長

野一飯田間が不通となるなど通信施設の被害が続出、県との連絡は、水防無線と警察無線が唯一の連絡機関となったので、これをフルに活用して情報のキャッチと、これに対する対策に当った。



深夜の災害救助対策会議——県災害対策本部——

3-3 水防活動の状況

天竜川水系においては、老若男女を問わず、力の限り水防作業に当たったが、大自然の猛威の前に堤防や道路は次々と破壊され各所に家屋田畑等の流失をみるに至った。

しかし、中には最後まで頑張り抜いた地籍も見られこれらに必要な水防資材は、比較的被害の少なかった東北信地方(千曲川水系)より続々と現地へ送り込まれた。これら水防活動に要した状況は次のとおりである。

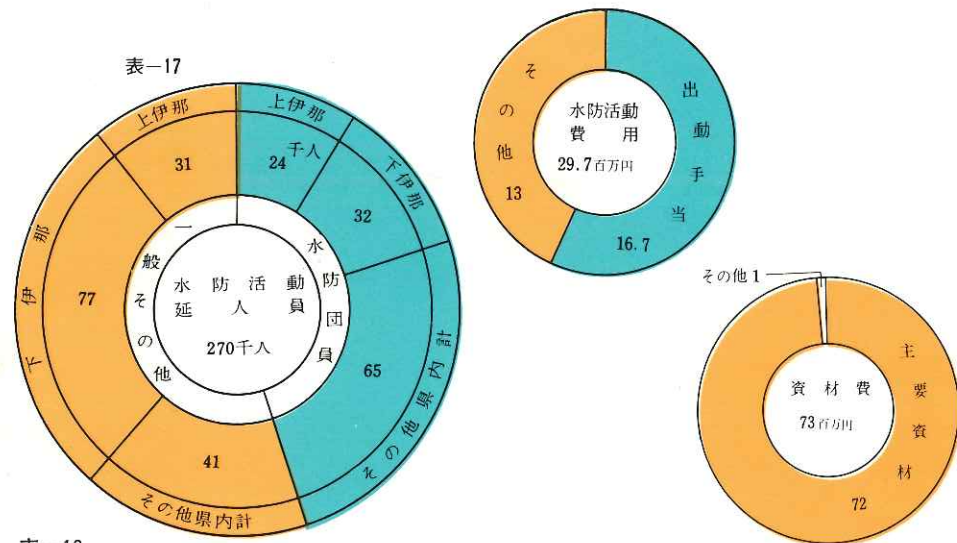


表-18

空 俵	な わ	む しろ	か ま す
172千俵	22千貫	9千枚	38千枚
竹	生 木	丸 太	板 類
70千本	20千本	71千本	600石
蛇 籠	鉄 線	置 石	麻 袋
17.8千本	79千kg	8千M ³	25千袋
た た み	く ぎ	か す が い	竹 蛇 籠
1,500枚	123kg	1,400丁	670本



必死の水防作業により氾濫をくいとめた犀川(犀川筋明科町光地籍)



水防作業に懸命の婦人会(下伊那那高森町地籍)

3-4 自衛隊の活動状況と応急対策

(1) 概 況

県は、6月27日午後11時、飯田市より事態が緊急化したために自衛隊の派遣申請の依頼を受けるや直ちに検討のうえ、緊急救助と、応急復旧のため、陸上自衛隊松本駐とん部隊に災害派遣を要請し、一方飯田方面への進入路について伊那、飯田に連絡をとったが天竜川に流入するいわゆる伊那の七谷および中小溪流が氾濫したため、全線はほとんどが欠壊箇所の連続で交通確保は相当の困難を伴うことが判明した。

そこで、翌28日には、さらに航空自衛隊にも派遣を依頼したが、なお降り続く雨のためと基地(霞ヶ浦)が悪天候のために飛行は困難とのことで、やむを得ず地上より偵さつをしながら松川町一豊丘村一喬木村一飯田市のルートを進路として確保することとした。

まず、飯田まで交通確保することを第一の目標に自衛隊(松本駐とん部隊)を中心として崩土の取除き、仮橋の架設あるいは破提箇所の締切等を行なうにむき突進し、これに必要な資材は民間からの貨物自動車も借りあげて輸送部隊を編成する。一方営林局からは貯木材の緊急払出を受けるなどをして後を追いつく。28日には伊那谷へ伊那谷へと復旧資材を積んだ緊急自動車は後をたたない状況となった。

28日夜、大鹿村より役場職員が飯田にたどりつき大西山の大崩壊など非害の激甚なことが報告されたため((註)大西山の大崩壊により建設省天竜川上流工事事務所小渋川出張所は吹飛ばされ職員も殉職し無電連絡等は絶っていた)。松川町に自衛隊と、物資輸送関係の本部をおき、飯田方面と、小渋川水系(中川村、大鹿村方面)との二方面に分かれて作業を進めることとなった。

この間、自衛隊第一管区からは給水中隊および第一工軍(工兵団)等のほか高田、宇都宮等からも続々派遣されることになり、県としては連絡道路の要所にはブルドーザーを待期させるなどして、道路の確保に当たった。



現地視察にヘリコプターで到着した中村建設大臣

(2) 自衛隊の活動状況

派遣延人員 42,508人

作業の内容 人命救助、行方不明者の発見、負傷者の救出、交通の確保、水防作業、給水、防疫、食糧、衣糧、医薬品の輸送

出動ヘリコプター 下伊那 169機(含米軍機民間機) 上伊那 15機

(3) 松川基地の職務分担表

本部	自衛隊
高尾囀託	派遣隊長 多田陸将補
総指揮 木村砂防課長	高級幕僚 大西一佐
土木関係主任 増田係長	第一ヘリコプター隊長 芝田一佐
物資輸送関係主任 藤田税務課長	第一施設大隊長 高村二佐
	建設大隊長 西村二佐
係員	庶務係4名、ヘリポート係11名、物資検収係2名、資材係3名、連絡係3名

表-19 陸上自衛隊の活動状況

地区名	作業内容	月日	摘要
上伊那	伊那市 三峯川、中割、南割の水防作業	6/29~6/30	県道開通5路線 橋りょう架設2橋 歩道開設
	飯島町 日曾利地籍水路復旧	6/30~7/2	
	中川村 四徳地区死体発掘道路復旧	6/29~7/9	
	駒ヶ根市 救助作業道路復旧水防作業給水電灯復旧資材運搬	6/30~7/8	
那	(朝霞駐とん部隊) 道路、橋りょう復旧作業ブルドーザー3台使用	7/1~7/16	
下伊那	松川町 水防作業、道路復旧	6/28~7/16	県道開通5路線 橋りょう架設2橋 寺沢川等の取付け 芦部川 道路開設
	大鹿村 資材運搬、橋りょう架設	//	
	南信濃村 救助作業、給水作業	//	
	清内路村 電灯引込	//	
	高森町 交通確保	//	
飯田市		//	

表-20 自衛隊の派遣人員

管内	7月1日	7月5日	延人員	摘要
	現	存		
上伊那	469	470	6,152	6月29日~7月13日 6月28日 7月16日
下伊那	2,634	2,963	36,356	
計	3,103	3,433	42,508	

表-21-1 自衛隊の派遣状況

			下伊那		上伊那	
			人	人	人	人
松本	普通科	13連隊	741		125	
高田	//	2連隊	343			
宇都宮	施設隊		232		344	
朝霞	重工兵	102建設大隊	320			
南古河	工兵	1施設大兵	225			
北古河	給水中隊		28			
練馬	通信隊ほか		417			
霞ヶ浦	第1ヘリコプター隊		55			
新町	普通科		273			
計			2,634		469	
合	計				3,103	



陸上自衛隊の道路応急工事
 (新宮川上流駒ヶ根地籍)



西沢知事等と打ち合わせをする自衛隊幹部 (松川町役場)

陸上自衛隊田部隊による道路応急工事
 (駒ヶ根市四徳線地籍)



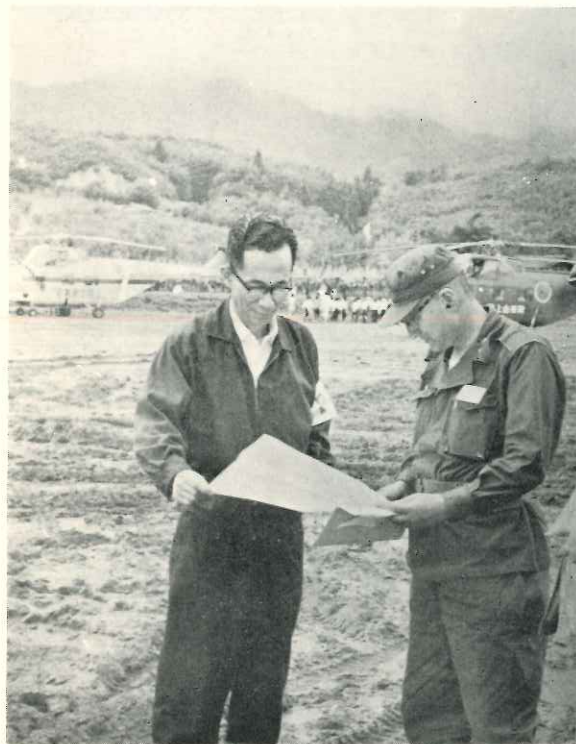
半壊の上伊那郡農協前に整列した自衛隊



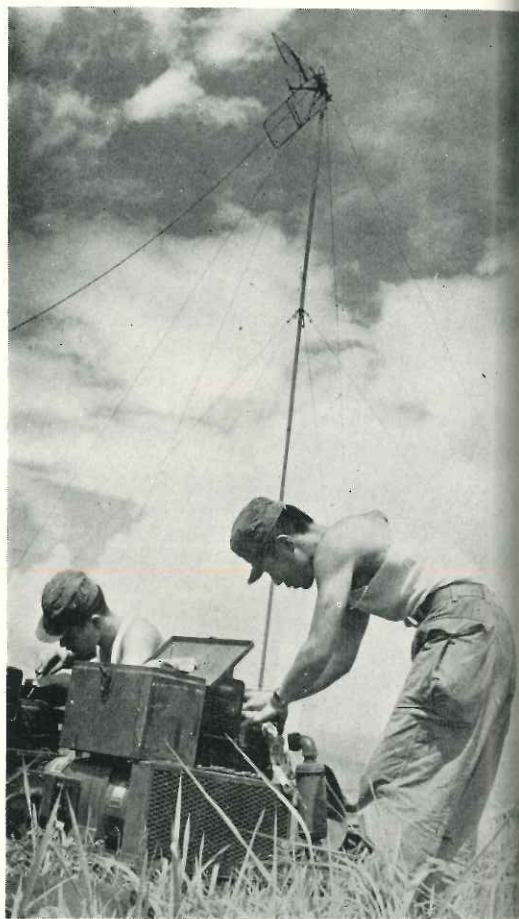
救援物資、人命救助に活躍した陸上自衛隊ヘリコプターの到着

表21-2 ヘリコプターによる救援実績

基地	飛行地域	実働機	延飛行回	空輸量 kg
上伊那	上伊那	20	105	25,986
下伊那	下伊那	最高22機 (7月3日)	572	104,116
//	上伊那			
計			677	148,487



米軍ヘリコプター隊長と打ち合わせを行う笠原副知事



(下伊那郡松川町)
災害情報を連絡に自衛隊の通信隊も活躍



浸水地帯の人々のために自衛隊が共同浴場を用意 (飯田市川路地籍)



消毒作業 (飯田市川路地籍)

3-5 救護活動

被害が広範囲でしかも激甚であるところから、衛生部保健所が中心となり自衛隊をはじめ、日赤救護班、NHK救護班等の活躍も目ざましく多くの人命を救うことができた。

すなわち、死者、行方不明136名、重軽傷者1,100名余に及びこれらの手当はもとより家屋の被害も多く、食糧飲料水衣料等のほか伝染病等の発生も心配されたため、これらの防疫にも力が注がれた。

(1) ヘリコプター隊の活躍

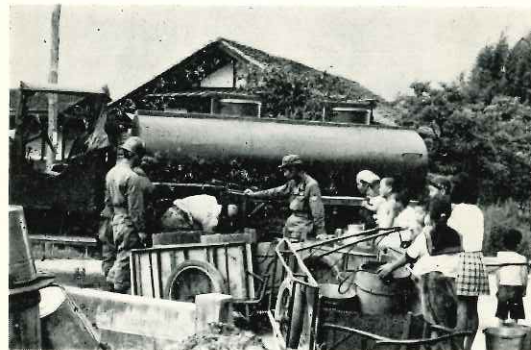
山間部に孤立した部落への食糧、衣料、医薬品、日用品の輸送および蕨等の搬出、防疫、給水等。

(2) 日赤救護班の活躍

下伊那地区……………豊科、長野、諏訪、下伊那赤十字病院等17救護班

上伊那地区……………日赤救護班および信大医療班等が救護活動に当たった。

(死体の処置、重軽傷者の手当、病人の治療等)医師延162人、看護婦312人、その他、人取扱患者6,941人

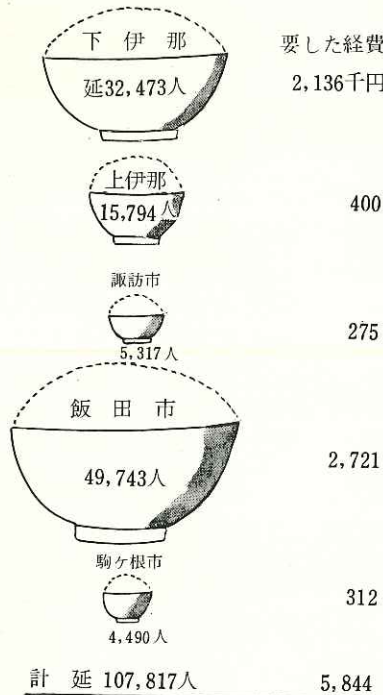


給水状況(下藤岡地区)



表-22 飲料水の供給

表-23 炊出し



3-6 災害救助の実施状況

(1) 災害救助法の発動

28日午前1時30分飯田市に災害救助法が発動され、続いて2時10分竜江村に以後高森町豊丘村上郷村松川町中川村と被害の拡大とともに適用市町村も増加し6月30日までに3市4町10箇村に及んだこのため県は直ちに救助物資を現地に急送するとともに、日赤その他を通じて続々と物資が現地へ送り込まれ、被災者に配布され、また、全国各地、さては海外からまでも暖かい、支援の手がさしのべられ、失意のどん底にあった住民の復興への意欲を燃えたたせ大きな力となった。



救援物資の積み



春蕨の積み(下伊那郡大鹿村)



懸命な排土作業(松川中学校基地)



表-24 災害救助法適用市町村一覧

郡市別	適用市町村数	市町村名
上伊那郡	1 町 2 村	高遠町, 中川村, 長谷村
下伊那郡	3 町 8 村	鼎町, 松川町, 高森町, 上郷村, 清内路村, 阿智村, 竜江村, 喬木村, 豊丘村, 大鹿村, 南信濃村
市	3 市	飯田市, 諏訪市, 駒ヶ根市

表-25 災害救助費内訳

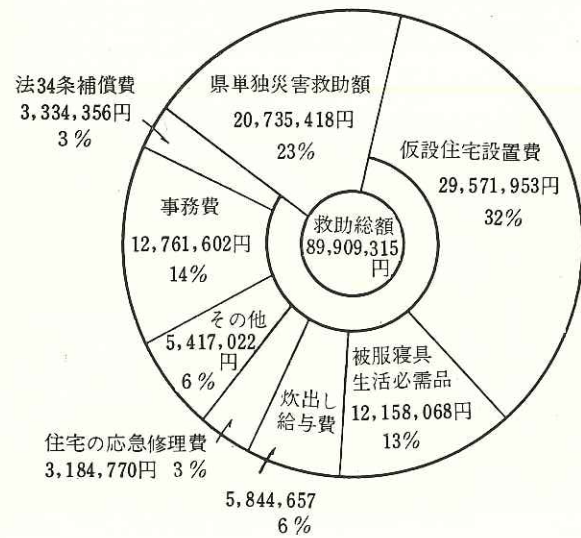


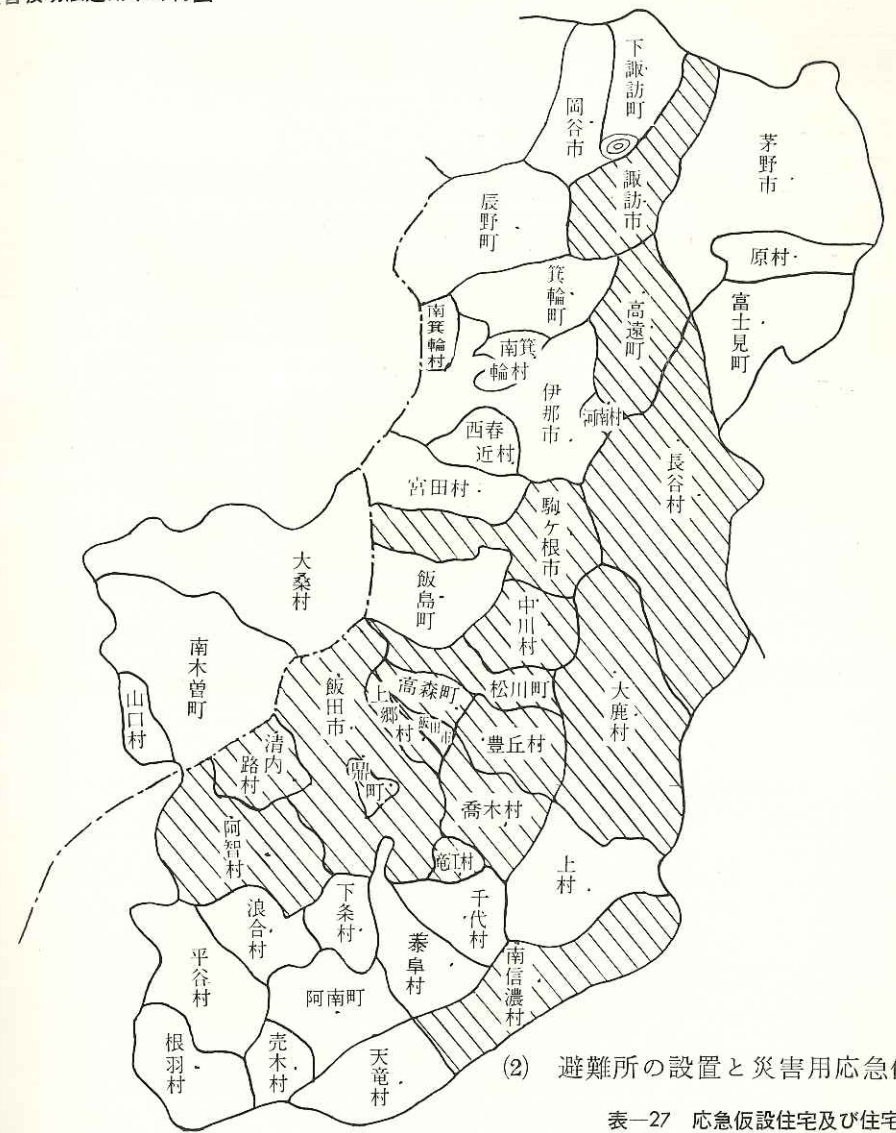
表-26

義えん金品の状況	
長野県寄託	14,983千円
郡市地区	5,275
N H K (長野, 松本)	114
信濃毎日新聞社	8,181
団体および個人	1,654
日赤関係	4,191
計	34,899

県に寄託された内訳

御下賜金	70
長野県人会	1,364
サンパウロロシアトル長野県人会	251
報道機関寄託	8,708
各府県その他	4,920
県	14,983

図-11 災害救助法適用市町村図



(2) 避難所の設置と災害用応急住宅の建設

表-27 応急仮設住宅及び住宅応急修理

住設置戸数	金額	修理戸数	金額
下伊那	155	81	1,492,777
上伊那	42	22	430,666
諏訪市	80	64	1,121,777
飯田市	20	7	139,550
駒ヶ根市	297	174	3,184,770
	円		円
	29,571,953		171,479

表-28 避難所の設置

郡市	設置数	延人員	支出金額	最も長い開設期間
下伊那	57	32,346	92,730	24
上伊那	15	6,056	21,825	10
諏訪市	36	49,743	37,850	18
飯田市	2	54,233	56,924	12
駒ヶ根市	110	92,635	171,479	
計			円	



立ちならんだ応急仮設住宅 (駒ヶ根市)

表-29 (6) 災害救助法発令市町村の被害状況

市町村名	罹災総数 戸数 世帯数 人員	人的被害		住宅の被害				非住家 の被害	災害救助 法適用 月日						
		死者	重傷	全壊 戸数 世帯数 人員	流出	半壊	床上浸水			床下浸水					
											軽傷	人員	人員	人員	人員
											行方不明	人員	人員	人員	人員
飯田市	6,151 6,357 26,029	11 5	19 314	218 265 1,155	62 65 254	245 264 1,211	399 418 1,813	5,227 5,345 21,580	489	6.28 1.30					
竜江村	275 275 1,227	1	—	9 9 43	—	13 13 54	98 98 431	155 155 698	21	// 2.10					
高森町	565 565 2,456	9 2	17	23 23 118	42 42 202	43 43 210	97 97 475	360 360 1,440	—	// 7.10					
上郷村	266 279 1,204	—	5	3 3 12	26 29 131	16 16 60	80 81 400	141 150 601	2	// 8.10					
豊丘村	462 477 2,295	2	4 18	18 18 69	25 25 115	25 25 107	84 89 402	310 320 1,600	352	// 8.10					
松川町	1,077 1,122 5,561	7	6 35	30 30 135	29 29 113	23 23 118	6 6 29	989 1,034 5,159	79	// 9.30					
中川村	295 297 1,375	14 4	5 3	27 27 130	70 71 335	34 35 187	37 37 186	127 127 519	115	// 12.40					
鼎町	1,607 1,685 7,538	—	1 2	5 5 13	2 2 6	44 50 206	56 58 244	1,500 1,570 7,067	10	// 17.00					
清内路村	176 177 1,160	1	3 15	12 13 56	6 6 22	15 15 65	23 23 116	120 120 900	8	// 18.20					
駒ヶ根市	191 195 563	2 3	1 3	34 34 152	31 31 132	33 35 192	4 4 15	15 15 67	137	// 18.50					
諏訪市	2,601 2,676 10,421	—	—	—	—	—	1,555 1,630 6,204	1,046 1,046 4,217	—	6.29 8.00					
大鹿村	506 522 2,166	34 21	42 600	66 69 290	51 53 163	45 47 204	47 52 234	297 301 1,220	14	// 8.00					
喬木村	381 391 2,048	2	3 3	14 14 61	5 5 25	17 17 87	45 45 223	300 300 1,650	10	// 13.30					
長谷村	153 157 897	3	2	9 9 43	9 13 183	12 12 109	78 78 367	45 45 190	6	// 14.30					
阿智村	237 237 966	1 1	1 2	14 14 48	4 4 13	6 6 24	83 83 349	130 130 530	—	// 15.00					
南信濃村	142 142 638	—	13	12 12 50	5 5 32	—	54 54 224	71 71 332	4	6.30 13.30					
高遠町	201 201 977	3	—	4 4 20	—	2 2 11	46 46 201	149 149 742	—	// 21.30					
計	15,217 14,669 67,521	90 38	109 1,008	498 549 2,395	367 380 1,726	575 603 2,845	2,792 2,899 11,915	10,982 11,238 48,512	1,247						



埋没した民家を掘返し復旧に立ちあがった（上伊那郡飯島町）



泥水で埋つた家の中の排土作業（下伊那郡竜江村）



現地視察をして被災者から状況説明を受ける
西沢知事および中村県議会議長
(飯田市地先)



県議会本会議において災害状況を説明



水害現地を視察する西沢知事，中村県議
議長
(上郷村地先野底川)

3-7 政府関係係官の現地視察および調査

被害の激甚さを聞いて建設省では直ちに査定官を現地調査に派遣され、さらに事態の非常なる様子に山本技監、また、中村建設大臣も現地に來られるなど陣頭に立つて対策と指導に当られた。

- 6.29 建設省河川局防災課，宮下査定官，砂防課本田係長調査のため來県，諏訪—伊那—飯田—県庁
- 7.3 田中係長（砂防課説明）
- 7.1 山本建設技監視察のため來県（岡崎技官外）（夜宮下，査定官と打合せ。）篠ノ井廻り—諏訪—伊那—飯田—
- 7.4 土木部長，竹花技幹説明のため随行
- 7.4 中村建設大臣，畑谷防災課長，糞輪二級国道課長，尚住宅建設課長，秘書官二名來県（夜，山本技監と打合せ）
- 7.6 副知事，土木部長，道路課長，竹花技幹説明随行 議長，自民党県連会長木内代議士出迎
- 7.8 建設省防災課調査定官，舟津課長補佐，災害復旧工法指導のため來県，
- 8～13飯田管内 随行 河川課 川久保災害復旧係長
- 7.19 13～17伊那 // 道路課 山崎補修係長
- 17～18諏訪 //
- 7.8 建設省 矢野砂防課長，防災課飯真土木専門官 大蔵省 上田監査官調査のため來県
- 7.11 （伊那，飯田管内） 随行 道路課竹花技幹，砂防課，松林砂防係長

国会関係 6.30～7.1 小酒井参院災害対策委員長，下平衆院議員來県，唐木専門調査員随行

3-8 復旧工事のために

降雨が始まるとともに水防活動に、被害の報告に、あるいは被災者の救助にと、県内をあげて大自然との闘いに不眠不休の努力が展開されたのであるが、それに引続いて直ちに復旧工事に取組まねばならなかつた。



復旧計画の測量に活躍する土木部職員

とくに、土木部としては河川、道路等の公共物の管理をしているため、緊急にこれの復旧をしなければならず、そのため東北信地方の水防態勢の見とおしがつくや、29日にはこれらの地方より南信地方の状況に詳しい技術職員15名を取あえず第一陣として現地へ送



復旧工事の設計に頑張る職員

り込み、連日速夜の奮闘に疲労していた現地職員を助け、被害の調査に、応急工事の復旧のために活躍を開始した。

しかし県内の技術職員には限度があり、短時日の間に大なる復旧工事の設計の樹立、また、それらの工事の監督を完全にすることは不可能に近いものと考えられたため、建設省にお願いし、また各県にも依頼をして技職員の応援を受け、また機動力を持たせるためにジープ等も借用し、あるいは民間の技術陣（測量会社コンサルタンツ）や、河川協会等よりの技術職員の応援を受けるなどして一日も早く復旧できるよう査定設計や、実施設計の樹立に一丸となって取組んだ。

昼夜を分たず、精根を傾けて頑張った職員の中には、疲労のために倒れる者も出るなど筆舌につきせぬ努力が続けられた。

一方、教育委員会としては、異例の処置として高等学校の土木科の生徒を実習ということで測量、製図等の補助として従事させるなど協力がなされ、さしもの大災害も、これらのひとつの献身的な作業のお蔭で復旧の方面にたづなを向けることができた。

表-30 公共土木施設災害復旧事業査定および検査官氏名

(1) 緊急査定 昭和36年8月3日~8月16日 (検査官氏名順序不同)

査定官	事務官	検査官	検査官	検査官	検査官	検査官
関 周 三	松 原 肇	舟 津 常 一	武 藤 徳 一	岩 田 隆	古 川 安 正	堀 籠 仁 三 郎

(2) 第一次本査定 昭和36年10月8日~10月21日

関 周 三	小 寺 勉	金 子 泰 助	山 里 尚 英	笠 井 重 行	糸 林 芳 彦	内 田 恵 之 助

(3) 第二次本査定 昭和36年12月12日~12月26日

関 周 三	藤 倉 茂	舟 津 常 一	堀 籠 仁 三 郎	島 田 潤 一	岡 島 成 夫	山 内 経 禧

なお、職員の応援状況は次のとおりである。

表-30-2 応援を受けた職員(県外)

所 属	職 員 数	期 間	摘 要	所 属	職 員 数	期 間	摘 要
北陸地建	技 官 5 連 転 手 1	7/6~8/5	飯 田 へ	栃 木 県	2	9/11~12/10	飯 田 へ
東北 //	技 官 5	7/3~8/5	伊 那 へ	東 京 都	2	9/18~12/17	飯 田 へ
関東 //	技 官 5	7/4~8/5	飯 田 へ	群 馬 県	2	9/19~12/20	飯 田 へ
山形県	技 師 3	7/4~8/5	伊 那 へ	福 島 県	2	10/1~12/20	飯 田 へ
宮城県	技 師 3	7/3~8/5	飯 田 へ	富 山 県	技 師 2	10/1~12/20	飯 田 へ
新潟県	技 師 2	7/4~8/5	飯 田 へ	宮 城 県	2	10/16~12/20	飯 田 へ
鹿児島県	技 師 2 技 師 補 1	7/4~8/5	飯 田 へ	佐 賀 県	1	10/20~12/20	飯 田 へ
秋田県	技 師 3	7/4~8/5	伊 那 へ		66人	延 3,465人	
千葉県	技 師 2	9/16~11/15	伊 那 へ				
埼玉県	技 師 4	9/15~12/20	飯 田 へ				
茨城県	技 師 2	9/25~12/20	飯 田 へ				
石川県	技 師 1	10/1~12/20	飯 田 へ				
熊本県	技 師 3	10/21~12/20	飯 田 へ				
長崎県	技 師 8	10/24~11/23	飯 田 へ				

摘 要 所 課 名	飯 田		伊 那		計		備 考
	人 員	日 数	人 員	日 数	人 員	日 数	
白 田 建 設 事 務 所	5	365	3	101	8	466	
岩 村 田 同	5	139	3	185	8	324	
上 田 同	6	260	—	—	6	260	
諏 訪 同	3	129	—	—	3	129	
伊 那 同	—	—	—	—	—	—	
飯 田 同	—	—	—	—	—	—	
福 島 同	—	—	—	—	—	—	
松 本 同	11	543	12	518	23	1,061	
豊 科 同	2	51	3	148	5	199	
大 町 同	8	429	1	10	9	439	
篠 ノ 井 同	2	61	—	—	2	61	
屋 代 同	2	91	1	48	3	139	
須 坂 同	2	90	1	48	3	138	
中 野 同	6	236	1	46	7	282	
長 野 同	9	326	1	10	10	336	
飯 山 同	1	19	1	43	2	62	
犀 川 砂 防 事 務 所	2	173	1	43	3	216	
土 尻 川 同	2	88	—	—	2	88	
姫 川 同	1	5	1	42	2	47	
奈良井川改良事務所	—	—	2	59	2	59	
企 画 調 査 課	5	116	3	100	8	216	
監 理 課	7	106	4	66	11	172	
道 路 課	9	328	5	283	14	611	
河 川 課	7	483	6	219	13	702	
砂 防 課	7	239	5	356	12	595	
都 市 計 画 課	1	43	1	48	2	91	
そ の 他 の 課	7	120	4	97	11	217	
県 外 応 援	43	2,149	23	1,316	66	3,465	
計	153	6,589	82	3,786	235	10,375	

表-31 昭和36年災害応援職員一覧(建設省関係)

所 属	氏 名	所 属	氏 名	県 名	氏 名	県 名	氏 名	県 名	氏 名
北陸地方建設局	山内 経禧	〃	齊藤 清志	〃	橋本 久広	〃	沖村 行正	山形県	阪本 操
〃	若林 清栄	〃	馬場 秋男	東京都	小峯 太平	宮城県	佐々木 邦俊	〃	齊藤 光夫
〃	勝山 守	〃	高橋 成	〃	滝沢 英夫	〃	佐藤 喜久治	〃	三浦 孝治
〃	梅本 明男	関東地方建設局	黒沢 幸一	〃	伊達 允紀	熊本県	加来 英器	宮城県	菅原 郁郎
〃	山下 隆久	〃	深井 晃	〃	北沢 亨一	〃	福永 力	〃	関川 重憲
〃	福島 和友	〃	大場 健司	千葉県	土屋 章	〃	入江 船一	〃	鈴木 長孝
東北地方建設局	寺島 正志	〃	兒島 敏勝	〃	土屋 和義	佐賀県	土井 末年	秩田県	川島 吉雄
〃	岩瀬 敏秋	〃	黒河内 春雄	茨城県	仲村 雅俊	長崎県	宮田 牧人	〃	伊藤 善一
				〃	小池 仁	〃	堤 勝敏	〃	中川 実
				群馬県	戸塚 尚	〃	小島井 清	新潟県	谷 滝夫
				〃	稲葉 信雄	〃	静岡 敏之	〃	川又 敏郎
				福島県	佐藤 昭	〃	広岡 照人	〃	足立 富一
				〃	広川 継男	〃	牛島 悦夫	鹿児島県	久保田 幸夫
				石川県	宮下 源和	〃	徳永 実	〃	大山 登
				富山県	吉井 敏英	〃	重松 洋	〃	本村 利雄

表-32 昭和36年災害応援職員一覧(他府県関係)

県 名	氏 名	県 名	氏 名
栃 木 県	栗原 実雄	〃	数度 孝夫
〃	郡司 平八郎	埼 玉 県	深田 稔
〃	田辺 英昭	〃	小林 博

第四章 復 旧

4-1 復旧の概況

被災後、直ちに水防から応急工事へ、さらにそのまま本工事へと復旧作業は進んだのであるが、その間にはいろいろの問題が山積され、これらをひとつずつ乗越えて、とにかく今日の姿にまで持って来ることができた。

すなわち、

① 設計樹立のための技術者不足の問題（県および市町村とも）

② 復旧に用いる資材の確保と単価の問題

これには、農林被害もあり、砂、砂利、石材、木材、セメントについての絶対量の問題およびこれの輸送の問題、ことに飯田線の輸送能力の限界をどうカバーするか等（当時セメントは全国的に不足していた。）

③ 労務者の問題

限られた地域に大きな工事が発注されるための労働力の不足、これを件なう賃金のアップと機械化等の問題

④ 道路改良、舗装工事、河川改修工事など一般公共事業との調整

⑤ 復旧の予算と国の補助率等国との交渉

⑥ 集団移住に関連する問題

⑦ 耕地、林務等との調整

⑧ 大規模、復旧事業、河川災害関連事業、災害復旧助成事業等をどうするか、これらの復旧の根本となる洪水量をどうするか等、次から次へと問題が生じ国の査定に入る前に慎重に打合せが行なわれた。

特にセメントと、労働力の不足は深刻なもので県も工場や、隣接県を飛び廻って交渉し、協力を願うなどした結果この大事業を乗切ることができた。

4-2 昭和36年公共土木施設災害復旧事業費と復旧の経過

(1) 昭和36年公共土木施設災害復旧事業査定別総計表

表-33

単位 千円

工種別	原決定	県 工 事		市 町 村 工 事		計	
	38年再調査	か所数	金額	か所数	金額	か所数	金額
	39年再調査						
河 川	//	1,362	7,934,571	553	2,286,855	1,915	10,221,426
	//	1,365	9,569,544	505	1,523,310	1,870	11,092,854
	//	1,365	9,565,386	504	1,500,103	1,869	11,065,489
砂 防	//	176	1,202,218	—	—	176	1,202,218
	//	179	1,394,573	—	—	179	1,394,573
	//	179	1,401,882	—	—	179	1,401,882
道 路	//	684	1,687,150	1,126	713,938	1,810	2,401,448
	//	682	1,879,739	1,113	797,033	1,795	2,676,772
	//	637	1,924,541	1,106	783,623	1,743	2,780,164
梨 梁	//	108	356,079	263	370,838	371	726,917
	//	108	399,489	268	420,667	376	820,156
	//	102	368,377	265	409,612	367	777,989
計	//	2,330	11,180,378	1,942	3,371,631	4,272	14,552,009
	//	2,334	13,243,345	1,886	2,741,010	4,220	15,984,355
	//	2,283	13,260,186	1,875	2,693,338	4,158	15,953,524

(2) 昭和36年公共土木施設災害復旧事業年度別進捗状況表 S.40.2現在

表-34

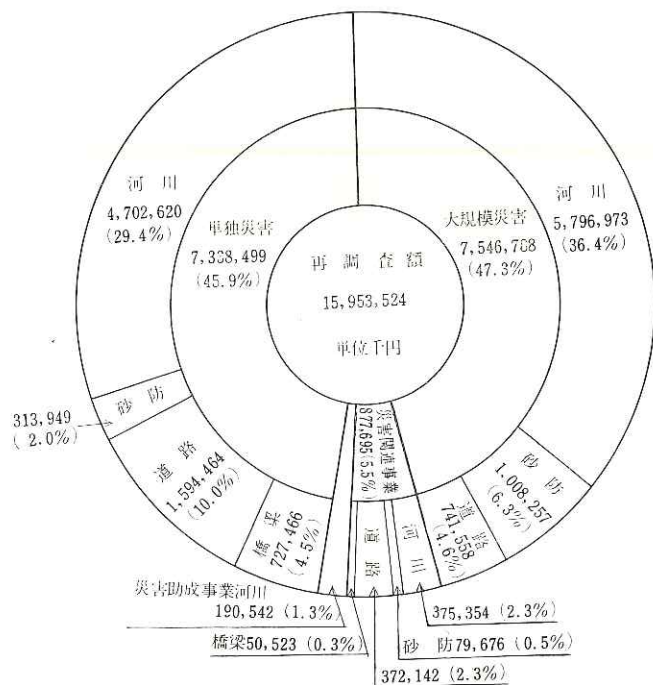
単位 千円

	原決定額(A)	36年度施行		37年度施行			38年度施行			39年度施行		
		実施額	進捗率	実施額	単年進捗率	累計進捗率	実施額	単年進捗率	累計進捗率	実施額	単年進捗率	累計進捗率
県工事	11,180,378	3,816,971	34.1	4,381,139	39.2	73.3	—	—	—	—	—	—
	13,243,345	—	—	—	—	—	3,192,446	24.1	86.0	—	—	—
	13,260,186	—	—	—	—	—	—	—	—	1,869,630	14.1	100.0
河川	7,934,571	2,741,738	34.6	3,263,335	41.1	75.7	—	—	—	—	—	—
	9,569,544	—	—	—	—	—	2,462,049	25.7	88.4	—	—	—
	9,565,386	—	—	—	—	—	—	—	—	1,152,325	12.1	100.5
砂防	1,202,218	428,988	35.7	572,594	47.6	83.3	—	—	—	—	—	—
	1,394,573	—	—	—	—	—	300,021	21.5	93.3	—	—	—
	1,401,882	—	—	—	—	—	—	—	—	98,452	7.0	99.9
道路	1,687,510	520,856	30.9	383,177	22.7	53.6	—	—	—	—	—	—
	1,879,739	—	—	—	—	—	381,049	20.3	68.3	—	—	—
	1,924,541	—	—	—	—	—	—	—	—	589,512	30.6	97.4
橋りょう	356,079	125,389	35.2	162,033	45.5	80.7	—	—	—	—	—	—
	399,489	—	—	—	—	—	49,327	12.4	84.3	—	—	—
	368,377	—	—	—	—	—	—	—	—	29,341	8.0	99.4
市町村工事	3,371,631	722,747	21.4	1,009,795	30.0	51.4	—	—	—	—	—	—
	2,741,010	—	—	—	—	—	687,231	25.1	88.3	—	—	—
	2,693,338	—	—	—	—	—	—	—	—	273,565	10.2	100.0
合計	14,552,009	4,539,718	31.1	5,390,934	37.0	68.2	—	—	—	—	—	—
	15,984,355	—	—	—	—	—	3,879,670	24.3	86.4	—	—	—
	15,953,524	—	—	—	—	—	—	—	—	2,143,195	13.4	100.0

註 $F = \frac{D}{A}$ $G = \frac{E}{A}$ $H = \frac{D+F}{A}$ $J = \frac{I}{B}$ $K = \frac{D+F+I}{B}$ $M = \frac{L}{C}$

(3) 昭和36年公共土木施設災害復旧事業別災害比較表

表-35



(4) 昭和36年度災害林務農地年度別進捗状況表

表-36

単位 千円

所管	内訳	復旧額	36年度		37年度			38年度			39年度		
			実施額	進捗率	実施額	進捗率	累計進捗率	実施額	進捗率	累計進捗率	実施額	進捗率	累計進捗率
林務	治山 林道 計	73,124 629,395 702,519	9,785	14	43,337	59	73	19,263	26	99	739	1	100
			165,592	26	162,328	26	52	200,517	32	84	100,958	16	100
			175,377	25	205,655	29	54	219,780	31	85	101,697	15	100
農地	農地 農業用施設 閑連 計	1,735,937 3,979,305 206,087 5,921,329	469,949	27	852,493	49	76	285,896	16	92	127,599	8	100
			1,058,285	27	1,630,657	41	63	763,243	19	87	527,120	13	100
			60,037	29	91,387	44	73	43,017	21	94	11,646	6	100
			1,588,271	27	2,574,537	42	69	1,092,156	18	87	666,365	13	100

(5) 昭和36年公共土木施設災害復旧事業災害別工種別各年度別進捗状況表

表-37

災害別	工種	決定額		比率	進捗率 %						摘要		
		場所	金額		36年	37年		38年		39年			
						単年	累年	単年	累年	単年		累年	
単独災害	河川	1,792	4,702,620	29.4	29.5	34.7	63.7	24.9	88.6	11.4	100.0		
	砂防	168	313,949	2.0	30.8	41.1	71.9	21.3	93.2	6.8	//		
	道路	1,733	1,594,464	10.0	27.9	22.5	50.4	24.9	75.3	24.6	//		
	橋りょう	362	727,466	4.5	30.5	43.8	74.3	12.3	86.6	13.4	//		
	計	4,055	7,338,499	45.9	29.5	33.5	63.0	24.1	17.1	12.8	//		
大規模災害	河川	42	5,796,973	36.4	26.1	38.2	64.3	25.8	90.1	9.9	100.0		
	砂防	9	1,008,257	6.3	14.5	34.8	47.3	14.2	61.5	38.5	//		
	道路	6	741,558	4.6	1.4	5.1	6.5	24.6	31.1	68.9	//		
	計	57	7,546,788	47.3	22.4	34.7	57.1	24.1	81.2	18.8	//		
災害関連	河川	32	375,354	2.3	46.9	38.7	85.6	8.4	94.0	6.0	100.0		
	砂防	2	79,676	0.5	70.2	19.9	90.1	6.5	96.6	3.4	//		
	道路	4	372,142	2.3	67.2	32.8	100.0	—	—	—	//		
	橋りょう	5	50,523	0.3	—	100.0	100.0	—	—	—	//		
	計	43	877,695	5.5	53.2	38.9	92.1	4.7	96.8	3.2	//		
災害助成	河川	3	190,542	1.3	22.6	23.2	45.8	17.1	62.9	37.1	100.0		
	計	3	190,542	1.3	26.6	23.2	45.8	17.1	62.9	37.1	//		
計			4,158	15,953,524	100.0	13.1	37.0	68.2	24.1	86.7	13.3	100.0	

(6) 昭和36年災害復旧事業(助成関連を含む)に使用した計画洪水量

表-38

番号	河川名	事業名	流域面積	河川勾配	比流量	含砂率	計画流量	地点
1	新宮川上流	一定災	29.1	1/25	14.0	15	407	百々目木川合流
2	" 下流	"	57.7	1/45	12.5	15	720	天竜川合流
3	百々目木川	"	15.4	1/20	14.0	15	216	新室川合流
4	四徳川上流	"	21.9	1/20	20.0	15	438	桑原滝
5	" 下流	"	31.0	1/20	18.0	15	558	小渋川合流
6	前沢川	助成	19.0	1/20	14.0	10	266	天竜川合流
7	久米川	一定災	33.8	1/125~1/100	6.0	15	210	"
8	新川	"	7.0	1/166~1/58	8.9	15	65	"
9	毛賀沢川	関連	6.5	1/100~1/67	8.8	15	57	"
10	野底川	一定災	22.3	1/50~1/33	9.8	15	220	松川合流
11	土曾川	"	6.8	1/100/~1/33	13.6	15	93	天竜川合流
12	南大島川	"	8.0	1/239~1/29	13.0	15	104	"
13	大島川	"	16.6	1/40~1/25	10.5	15	175	"
14	田沢川	"	8.3	1/154~1/22	12.8	15	106	"
15	大沢川	助成	7.8	1/50~1/25	14.0	15	109	"
16	小川川	"	34.8	1/112~1/55	5.5	15	190	"
17	加賀須川	一定災	21.5	1/105~1/73	5.6	15	120	"
18	蛇川	関連	32.4	1/163~1/55	9.0	15	292	"
19	芦部川	"	15.6	1/52~1/12	10.9	15	157	"
20	寺沢川(豊丘)	関連	8.2	1/62	13.0	15	106	天竜川合流
21	間沢川	一定災	17.0	1/45~1/28	10.5	15	178	"
22	寺沢川(松川)	"	5.8	1/50~1/20	10.0	20	58	"
23	鹿塩川	"	92.1	1/56~1/28	9.7	25	900	小渋川合流
24	塩川	"	31.0	1/36~1/29	9.7	25	360	鹿塩川合流
25	青木川	"	45.3	1/65~1/40	9.7	25	450	小渋川合流
26	王竜寺	助成	6.0	1/25~1/10	14.8	15	99	飯田松川合流
27	片桐松川	関連	30.2	1/30~1/35	14.4	30	436.5	天竜川合流
28	板橋川	一定災	45.0	1/37	8.9	-	400.0	千曲川合流

新宮川の復旧状況

新宮川 駒ヶ根市中沢4号

工事費 78,612千円

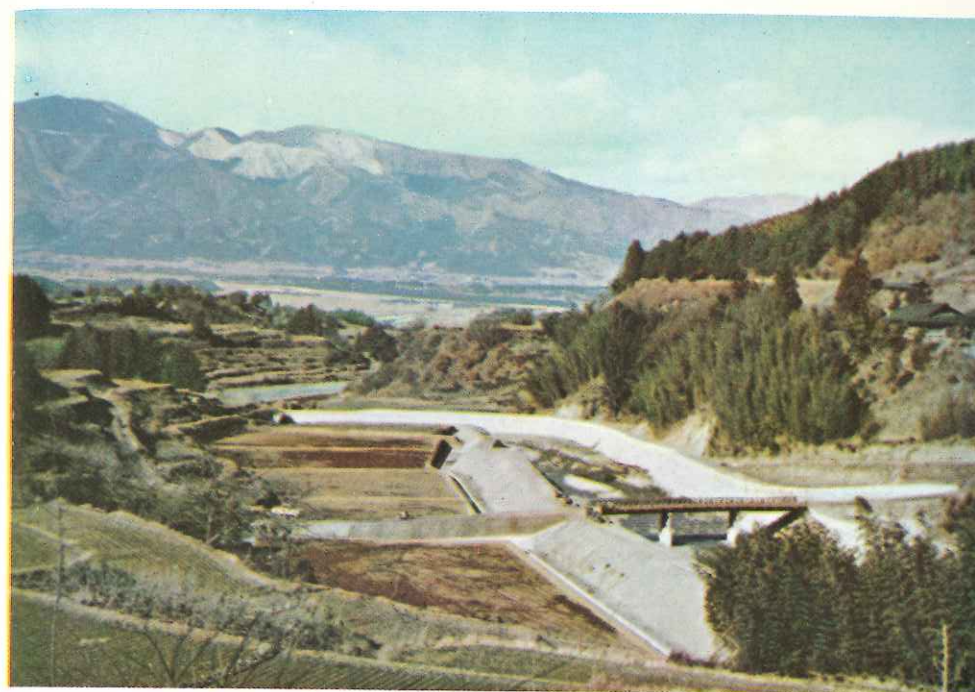
流路工 長815m

法長6.4m

落差工 3基

帯工 10基

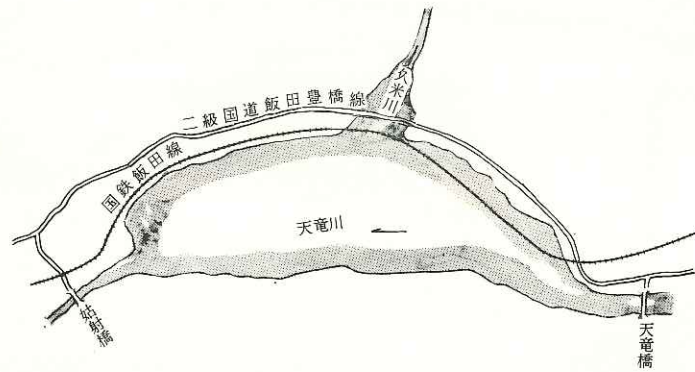
谷止工 1基



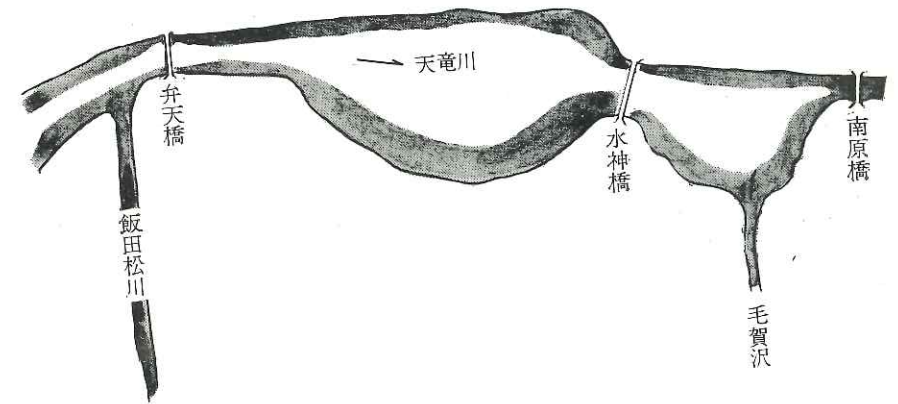
4-3 建設省直轄
災害復旧工事



天竜川筋飯田市川路，竜江地区被災当時



天竜川筋飯田市松尾
下久堅地区 被災当時



復旧なった同地区

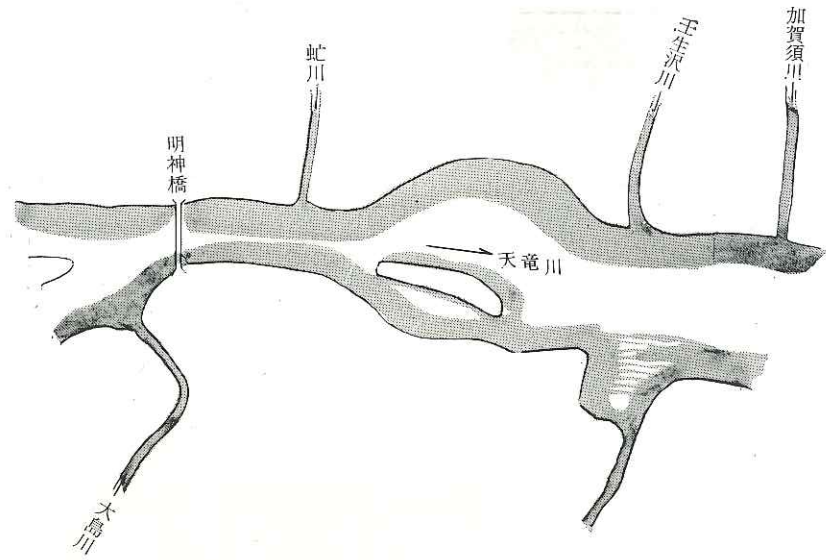


復旧なった同地区

天竜川筋高森町下市田
地区 被災当時



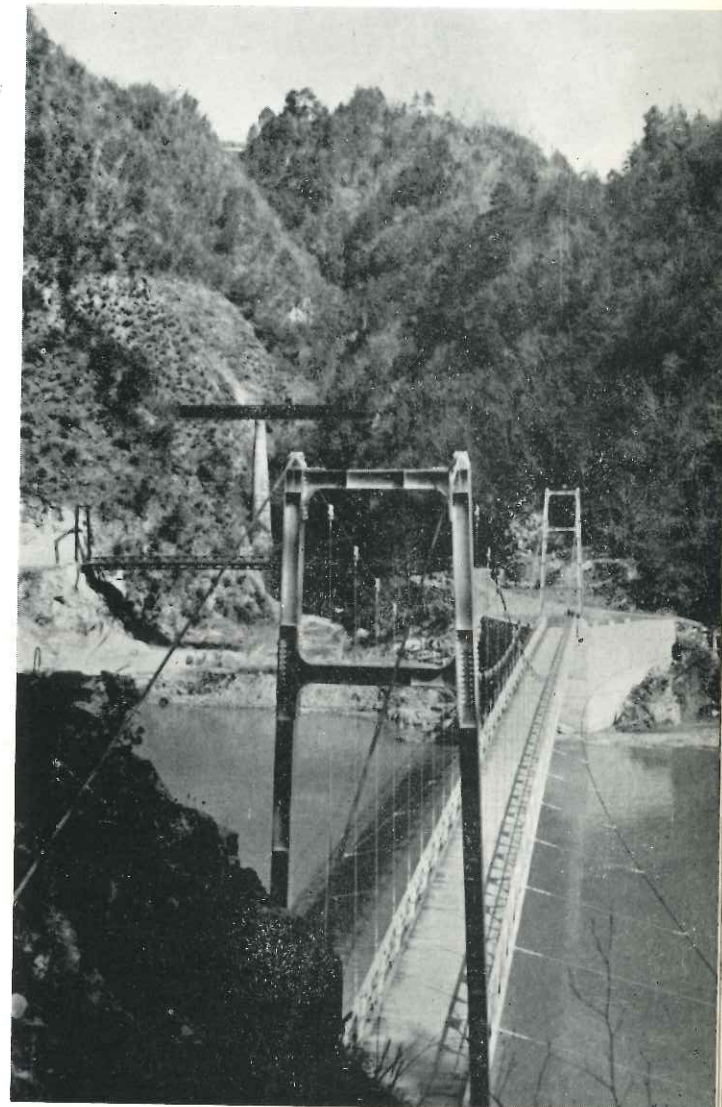
天竜川右岸
下伊那郡高森町下市田
築堤工
長 630m
決定工費 123,619千円



復旧なった同地区



4-4 県工事市町村工事関係

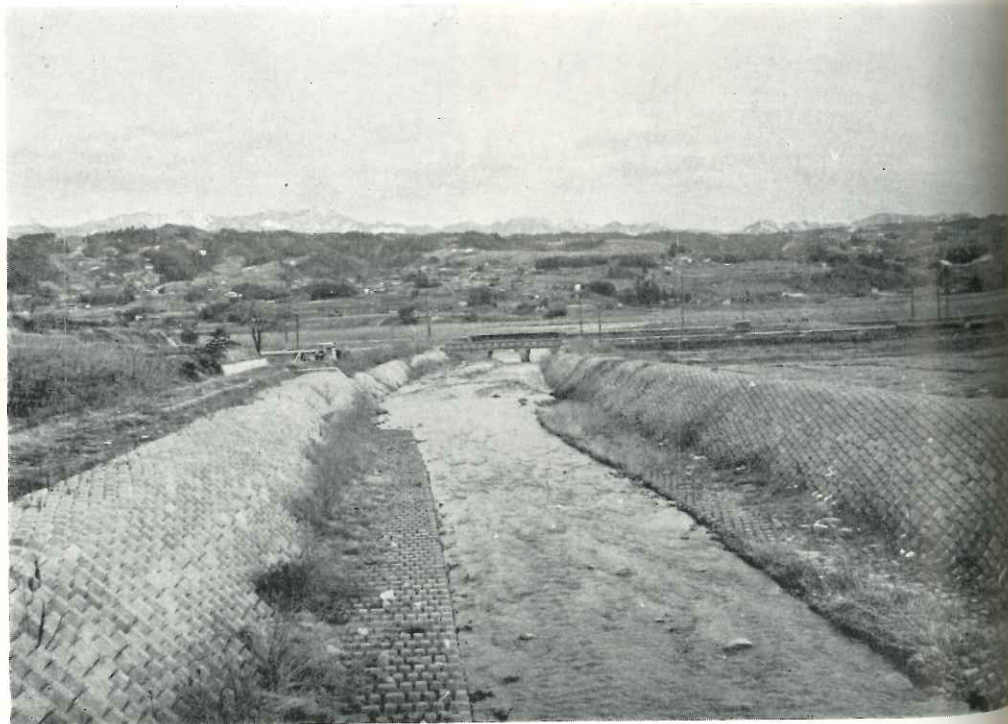


下伊那郡阿南町竜田橋
工事費 3,619千円
橋長 76.0m
幅員 2.0m



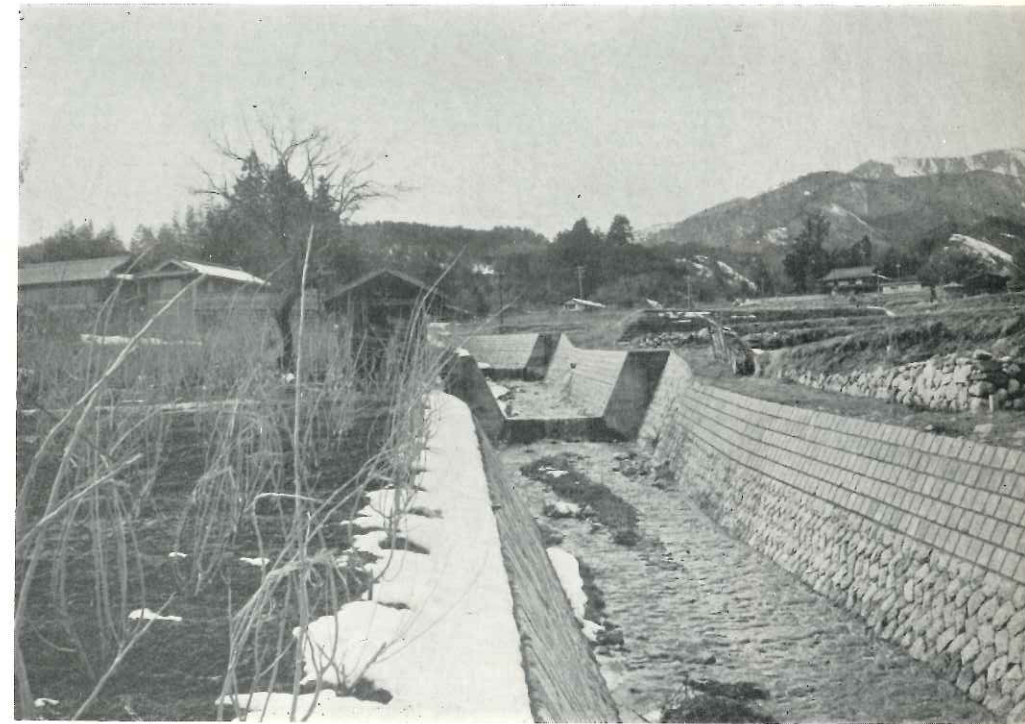
久米川 飯田市上川路
工事費 74,489千円
長 2,029m
床止工 2基

しゅん工



米川 飯田市米川
工事費 81,137千円
流路工 2,310m 法 長 2.9~3.2m
落差工 49基 帯 工 102基

しゅん工





天竜川支久米川小支茂都計川
飯田市下中村

工事費 237,037千円
流路工 長 4,734m
法長 2.4~3.9m
落差工 40基
帯工 82基
堰堤工 1基

しゅん工



天竜川支松川支野底川

野底川は飯田市の北方法橋山(1664.0m)に源を発し、飯田市(右岸)、上郷村(左岸)間を流れて、松川へ合流する河川である。

この流域面積は20.68km²、流路延長11.8km、平均勾配1/16という急流河川で本災害に際しては最も被害の大きかつた川の一つである。

上流から押し出した石や流木は沿岸の至る所ではらんし、家屋の流失、田畑の埋没等その惨状は目をおおうものがあつた。



野底川筋 飯田市小伝馬橋附近被災状況

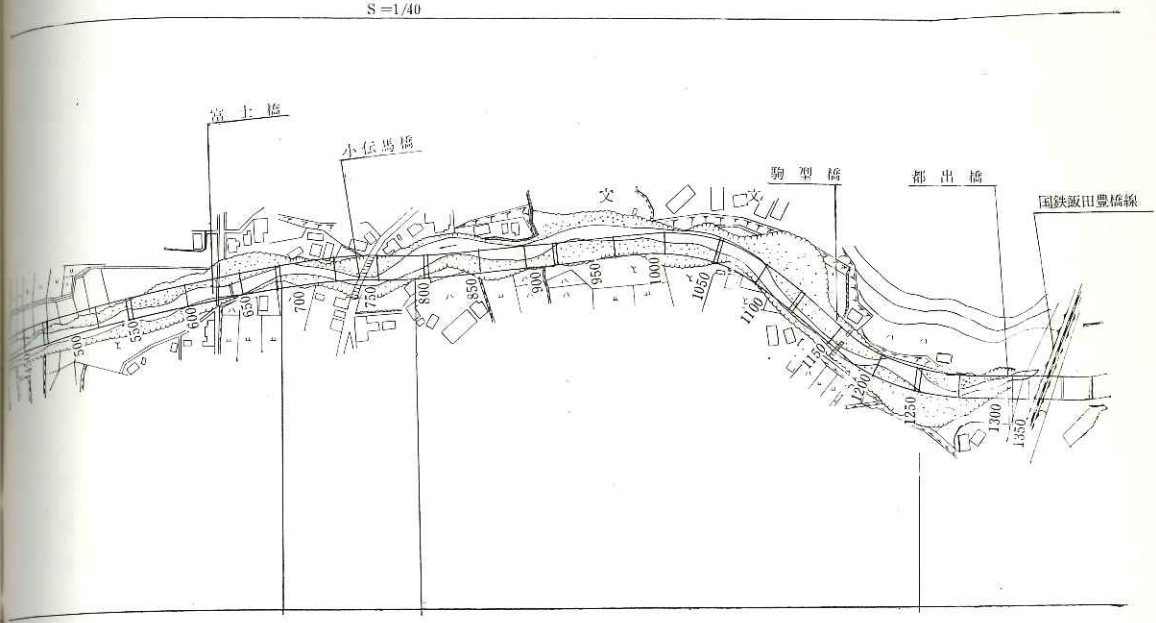
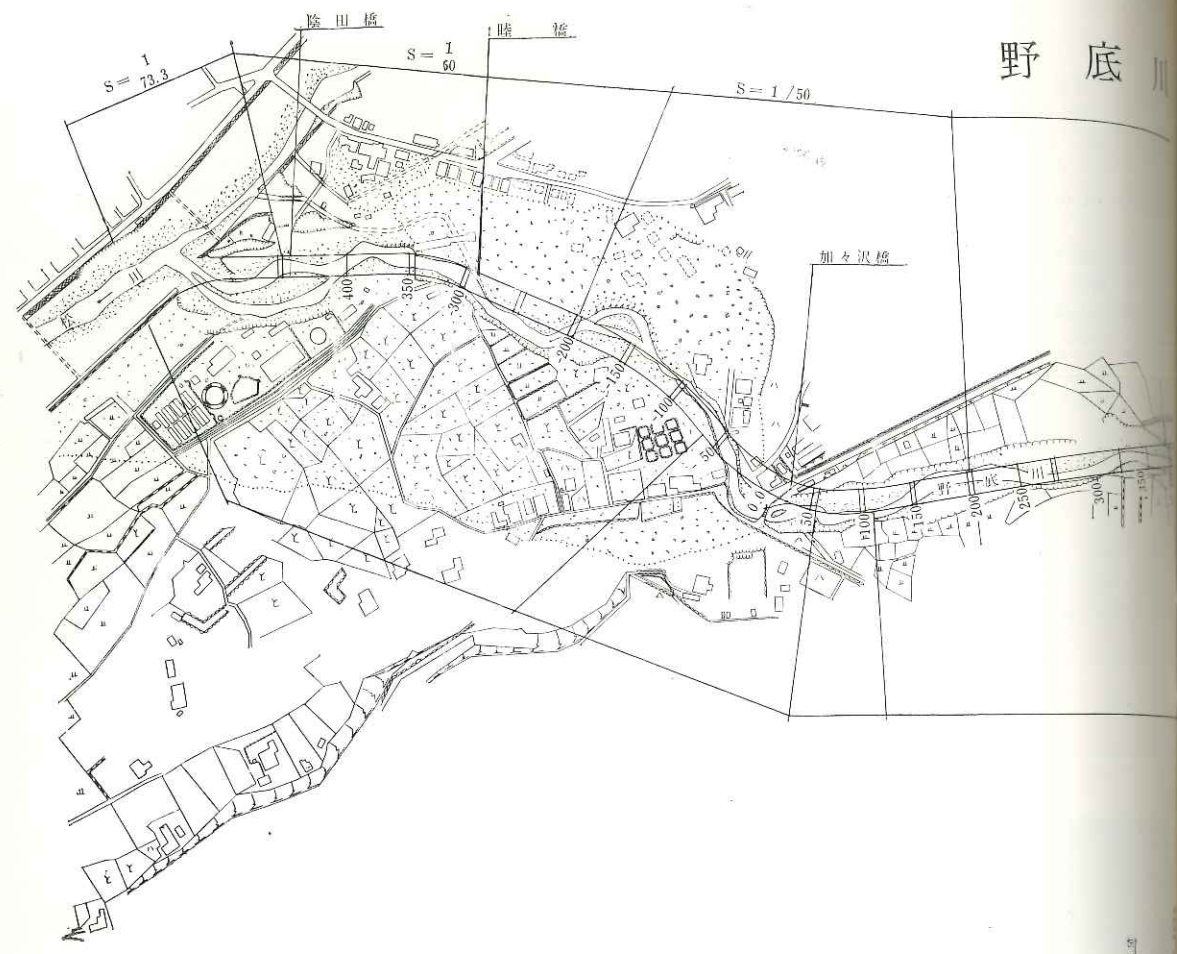


復旧なった同地区

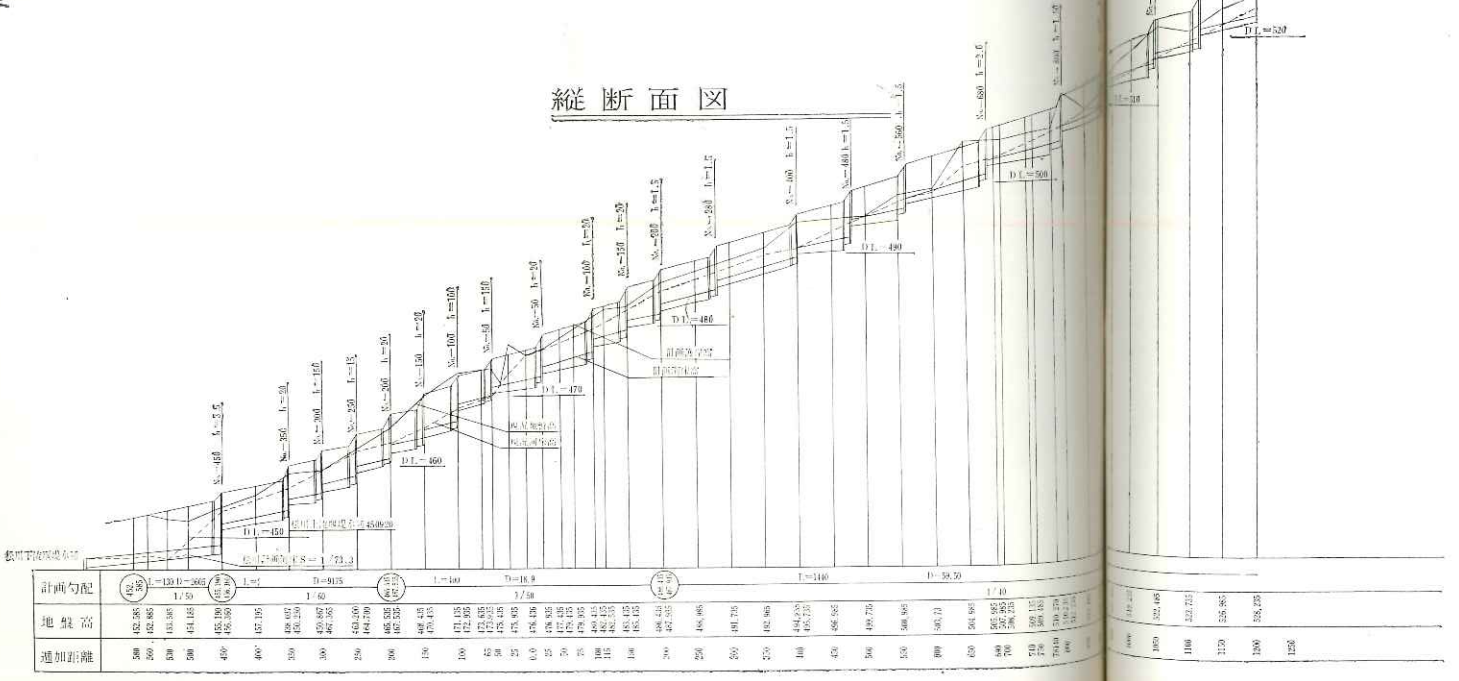
野底川 飯田市野底

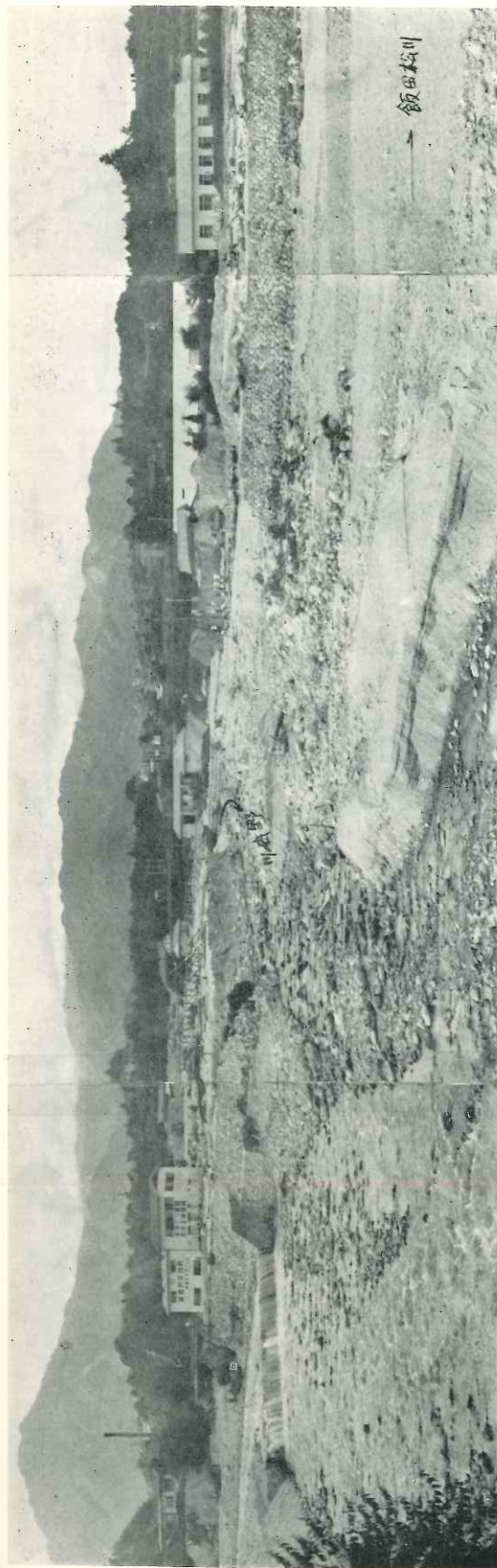
工事費 472,238千円
法長 9.34~3.57
流路工長 4,220.0m
落差工 34基
堰堤工 2基
帯工 67基
道路橋 13橋
鉄道橋 1橋

野底川 平面図

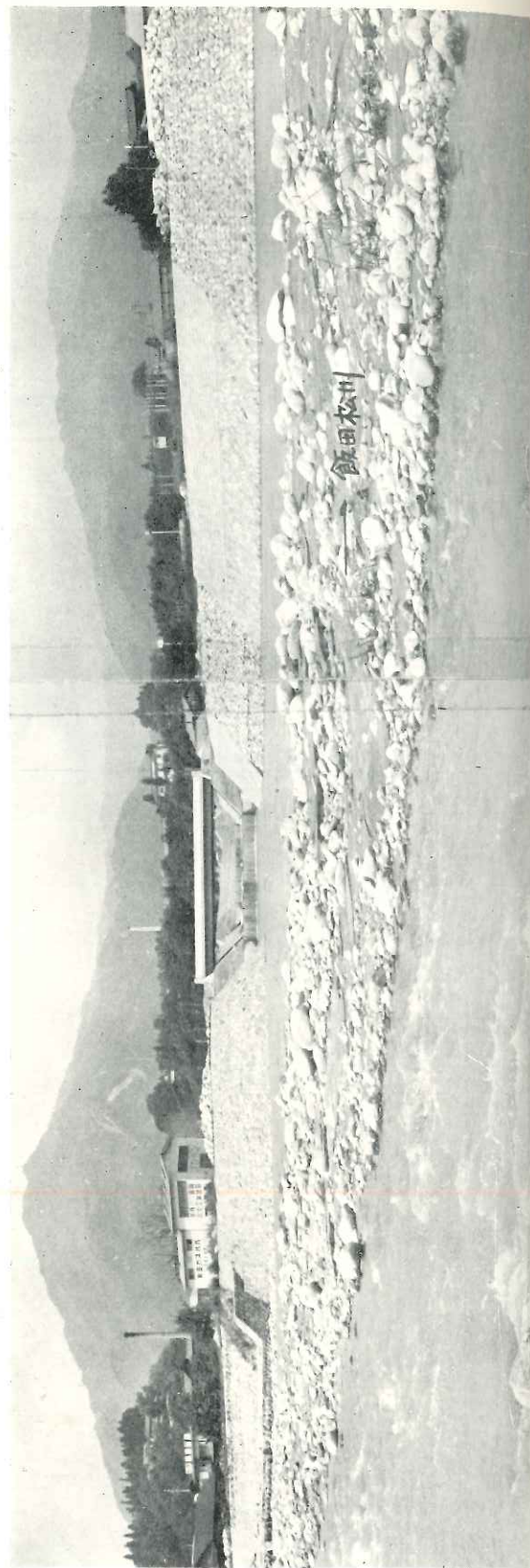


縦断面図





野底川松川合流点附近被災状況



近附同大たなな旧復



王竜寺川 飯田市愛宕町

工事費	250,715千円
助成費	202,926千円
災害費	47,789千円
流路工	L=4270m
落差工	41基
帯工	20基
橋りよう	54基

工ゆんし





谷川 飯田市東中央通り

工事費 28,934千円
 災害費 15,240千円
 関連費 13,634千円
 延長932m 法長2.24m
 落差工 3基
 帯工 12基
 橋りよう 1ヶ所

しゅん工



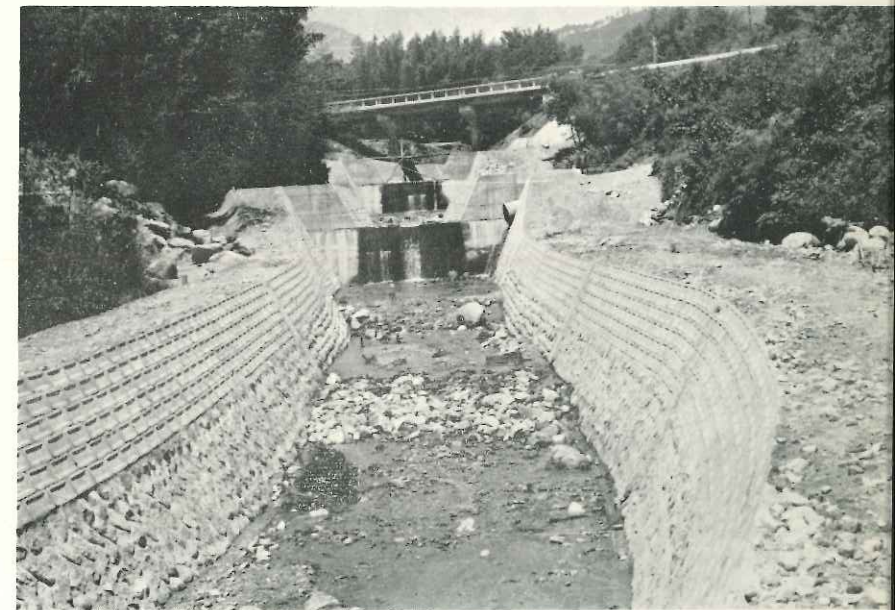
しゅん工

天亀川支土曾川 飯田市宮崎
(河川)

工事費 240,652千円
 流路工 長3,237m
 落差工 28基
 帯工 43基

(橋りよう)

工事費 13,569千円
 災害費 9,108
 関連費 4,461
 鉄筋コンクリート橋
 長 30.0m
 巾 6.0m



南大島川

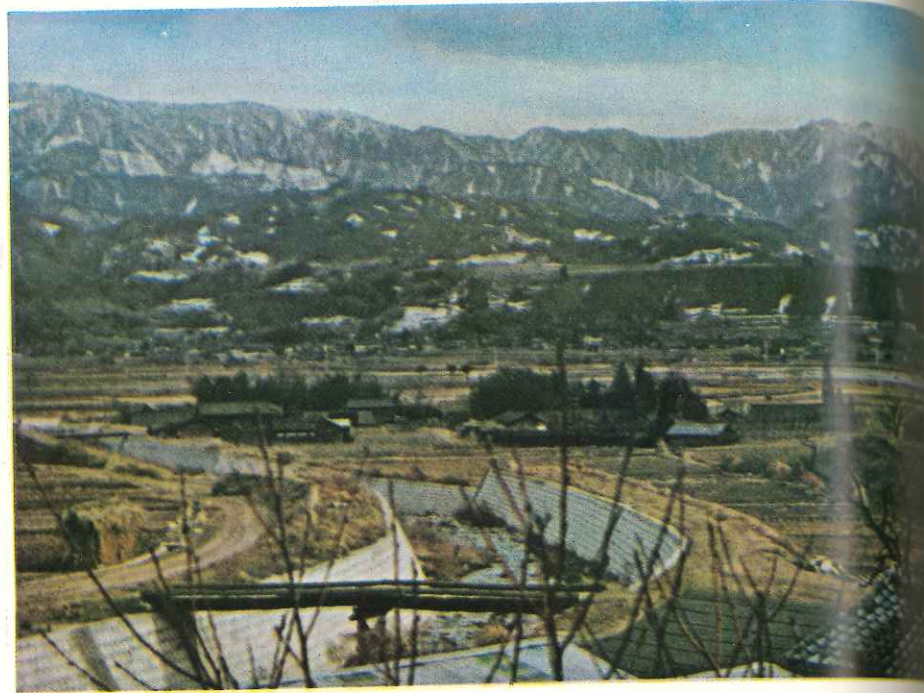
飯田市 南大島

工事費 267,234千円

流路工長 3,884m

落差工 27基

帯工 28基



宮崎橋県道飯島～飯田線
飯田市宮崎

事業費(災害関連工事)

事業費 13,569千円

災害費 9,108千円

関連費 4,461千円

工事概要 R C

桁長 30.0m

幅員 6.0m

被災



大島川

下伊那郡高森町清東第
12区

工事費 289.425千円

流路工 3,180m

床止工 6基

落差工 37基

帯工 89基

水制工 6基

しゅん工

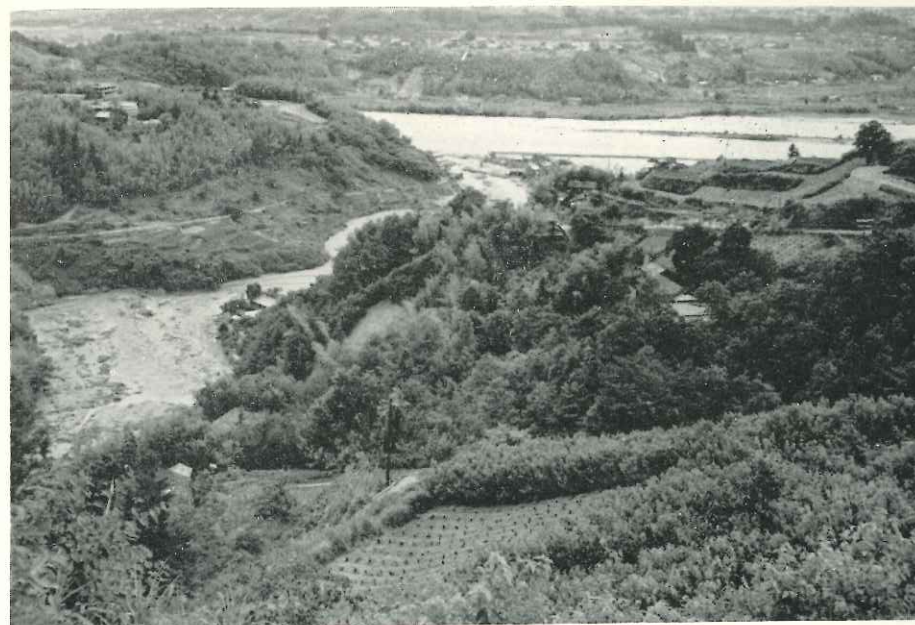




田沢川高森町駒場

工事費	155,197千円
流路工	2,900m
床止工	6基
帯工	47基

しゅん工



天竜川支間沢川

上伊那郡 松川町 福与

工事費	74,206千円
流路工長	940m
落差工	5基
帯工	12基
橋りよう	1ヶ所

しゅん工





福沢川 松川町福沢

工事費	35,468千円
災害費	31,631千円
関連費	3,837千円
流路工	610 m
築堤工	1基
帯工	15基
橋りょう	1基

しゅん工



主要地方道飯田茅野沢

下伊那郡 松川町 福与

工事費 91,241千円

関連費 83,695千円

災害費 12,749

道路築造工

長 3,540

幅員 7.5m

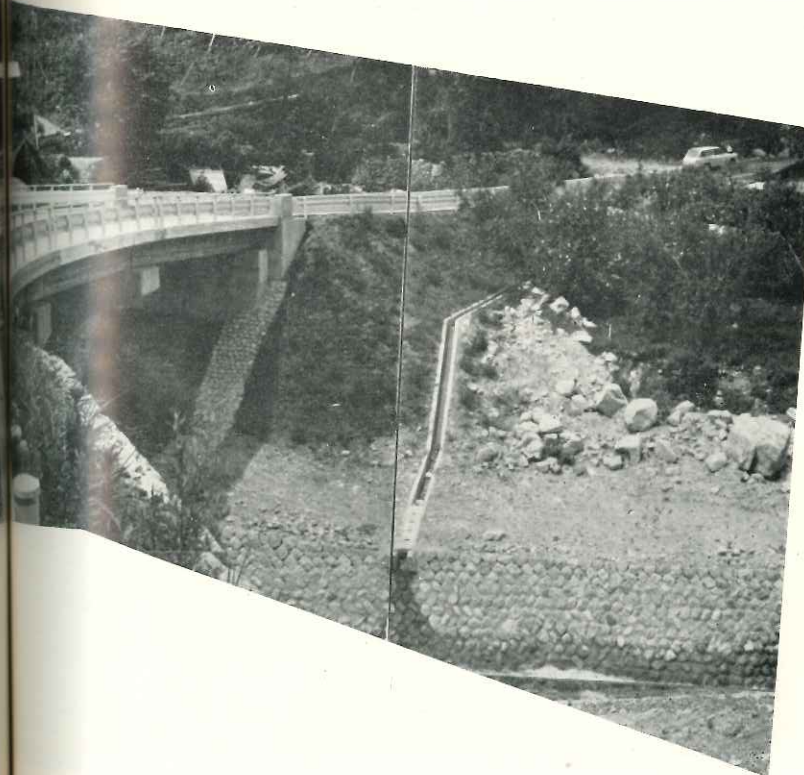
しゅん工



県道 飯島～飯田線 下伊那郡高森町追分橋
 工事費 14,641千円
 橋りょう整備 11,571千円
 災害費 3,070千円
 鉄節コンクリート3連Tけた橋 L=30.35m
 幅員=6.0m
 取付道路 145.52m



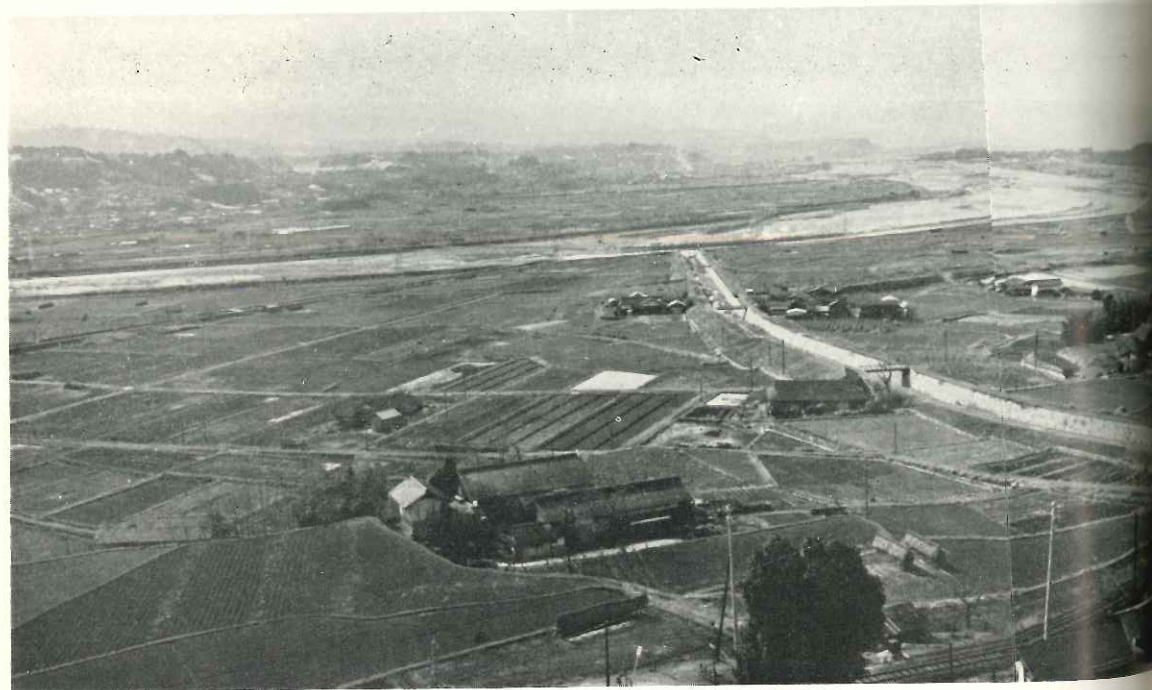
しゆん工



破堤によつて水田を
流に被われた



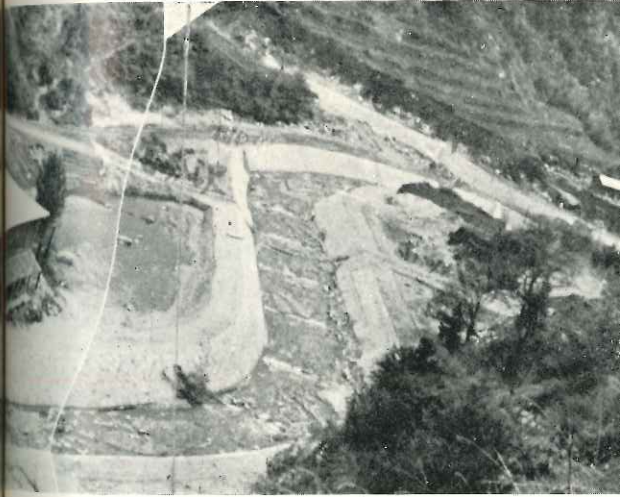
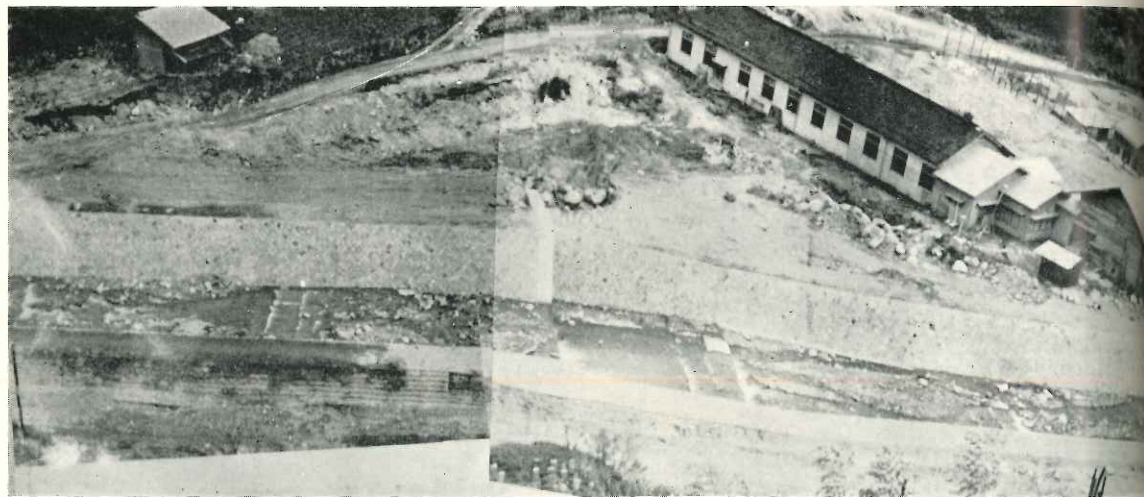
復旧なつた同地



大沢川 高森町山吹
 工事費 77,183千円
 災害費 45,221千円
 助成費 31,962千円
 流路工 延長1,420m 法長5.18~3.46
 床止工 12ヶ所 帯工 30ヶ所

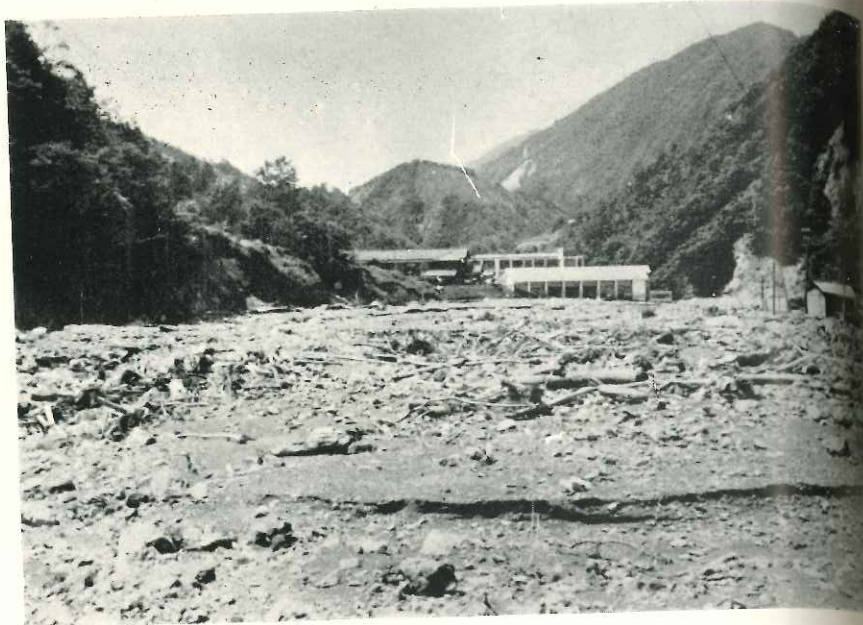


しゅん工



天竜川小渋川支四徳

工事費 397,343千円
 築堤工 長4,472m
 法長5.37~3.17m
 落差工 28基
 帯工 169基
 道路築造工3,973m



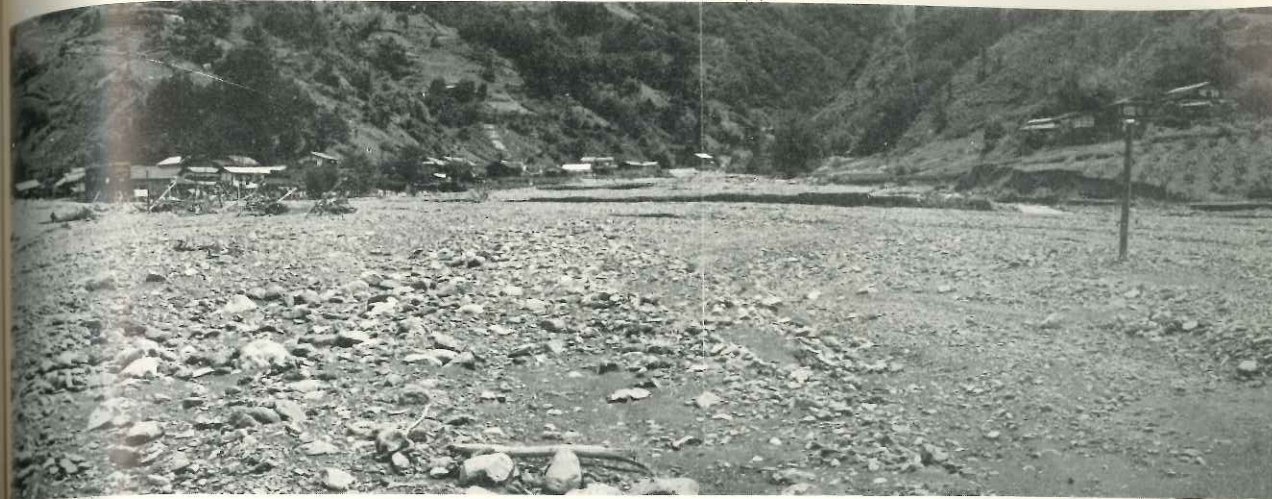
鹿塩川 大鹿村落合～大栗

工事費 67,568千円

築堤工 長4,181.5m 法長5.1m

齒型工 147カ所 落差工 11基 帯工 10基

しゅん工



土石流のため河床上昇し道路、耕地は一面河原と化した大鹿村鹿塩部落の惨状

鹿塩川 下伊那郡大鹿村落合～大栗

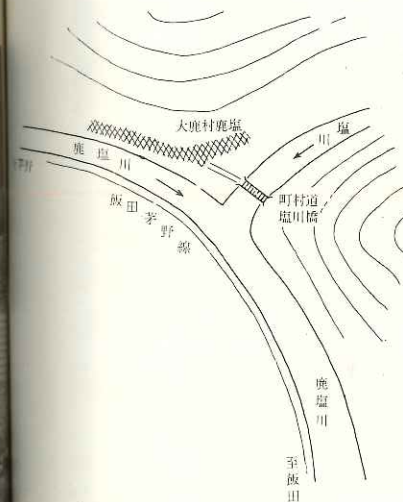
工事費 675.768千円

築堤工 長4,181.5m 法長5.1m

齒型工 139ヶ所

落差工 11基

帯工 10基

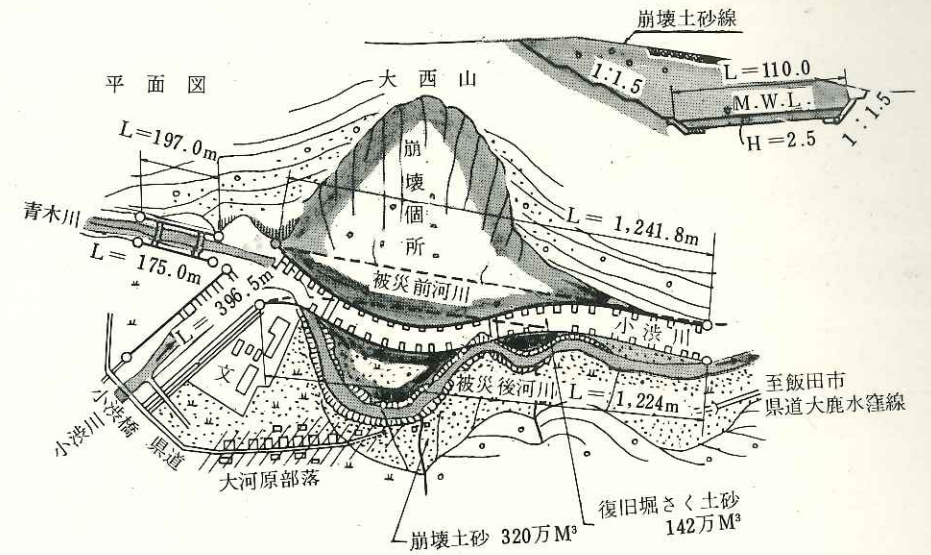


しゅん工



小波川 下伊那郡大鹿村大河原

工事費	933,766千円	
流路工	小波川	L=1,755m
	青木川	L=380m
	堀削工	1,421,740m ³
	蛇籠工	2,465.8m {左 1,241.8m 右 1,224.0}
	法枠工	2 187.1m {左 963.1m 右 1,224.0}
	植生盤	38,160.8m ²
	床止工	2基 (6脚ブロック)
	根固工	971.5m (6脚ブロック)



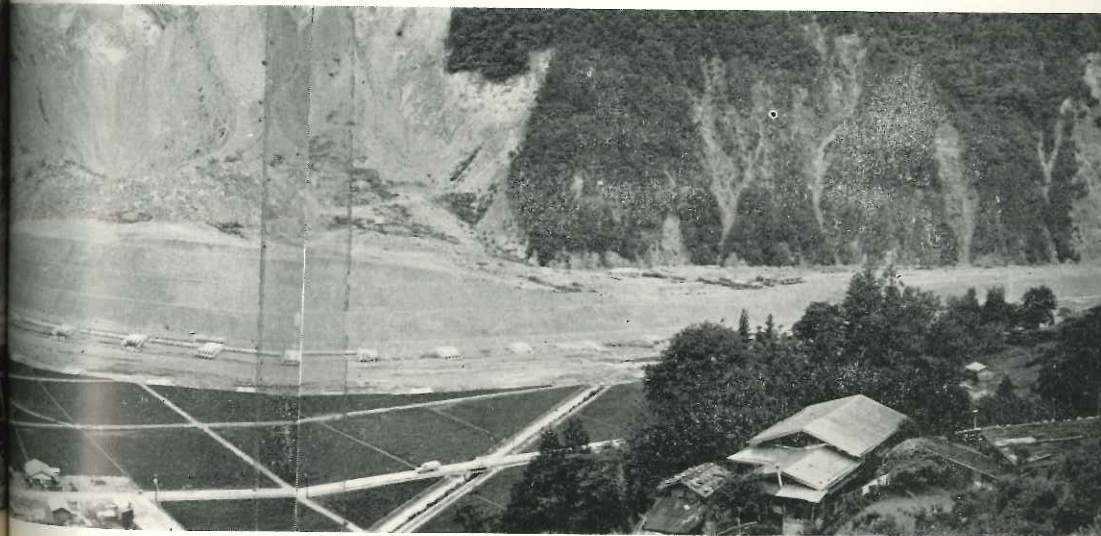
大西山の大崩壊により田畑人家は一しゅんにして流失した



下伊那郡大鹿村大河原被災状況



復旧なった同地区





被災



天竜川支新宮川駒ヶ根市中沢1号

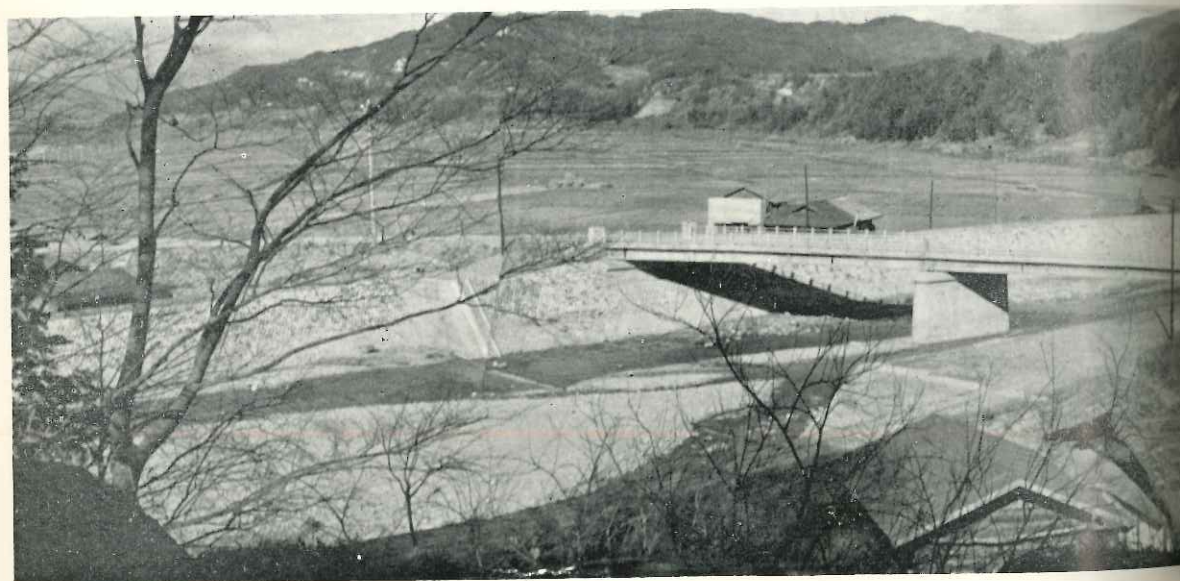
工事費 152,684千円

流路工 長1,690m 法長5.2~8.5m

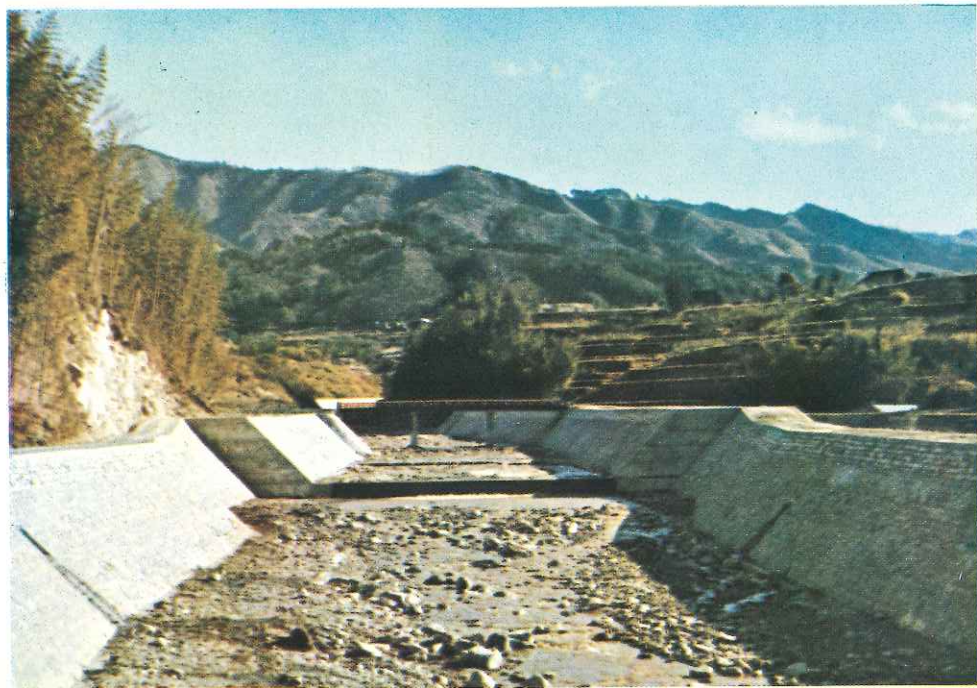
落差工 3基

帯工 13基

橋りょう工 1ヶ所

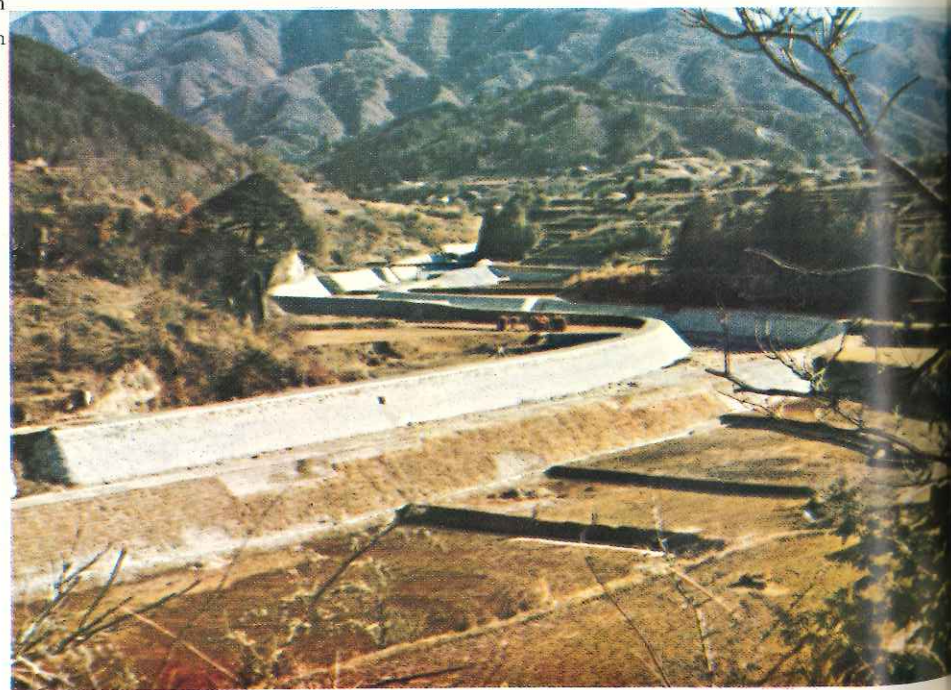


しゅん工



新宮川 駒ヶ根市中潟 4号

工事費 73,612千円
 流路工 長 815m
 法長 6.4m
 落差工 3基
 帯工 10基
 谷止工 1基



被災

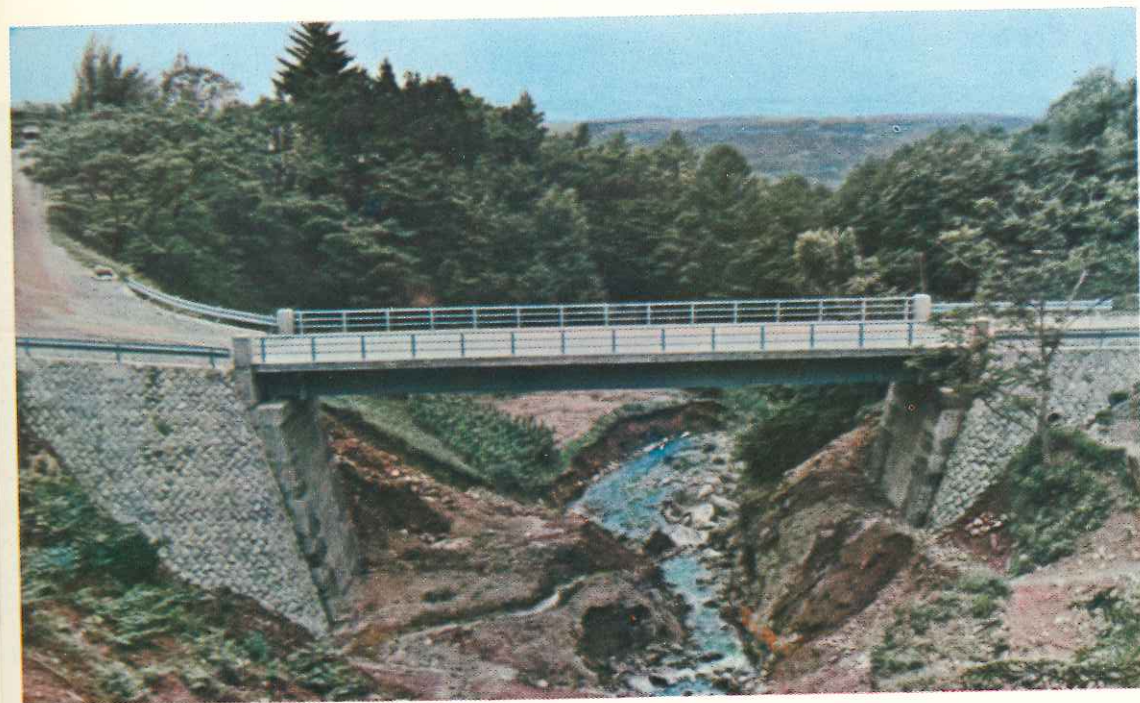
新宮川支百々目木川 駒ヶ根市百々目木 2号

工事費 41,505千円
 流路工 長895m
 床止工 13基
 道路築造工一式



しゅん工

新宮川 上伊那郡駒ヶ根市
 中沢6号
 決定工費 179,646千円
 流路工 長1,615m
 法長1.5~3.9m
 落差工 20基
 帯工 31基
 橋りょう 21ヶ所
 (西伊那沢落合橋)



伊那生田飯田線 上伊那郡中川村赤坂橋

工事費 8,233千円
 橋長 23.0m
 幅員 5.5m



(市町村工事)

唐山沢 駒ヶ根市字唐山
 工事費 63,441千円
 流路工 延長8.0m
 落差工 17基
 谷止工 1基

しゅん工





(市町村工事)

熊堂沢 上伊那郡長谷村熊堂沢

工事費 31,723千円

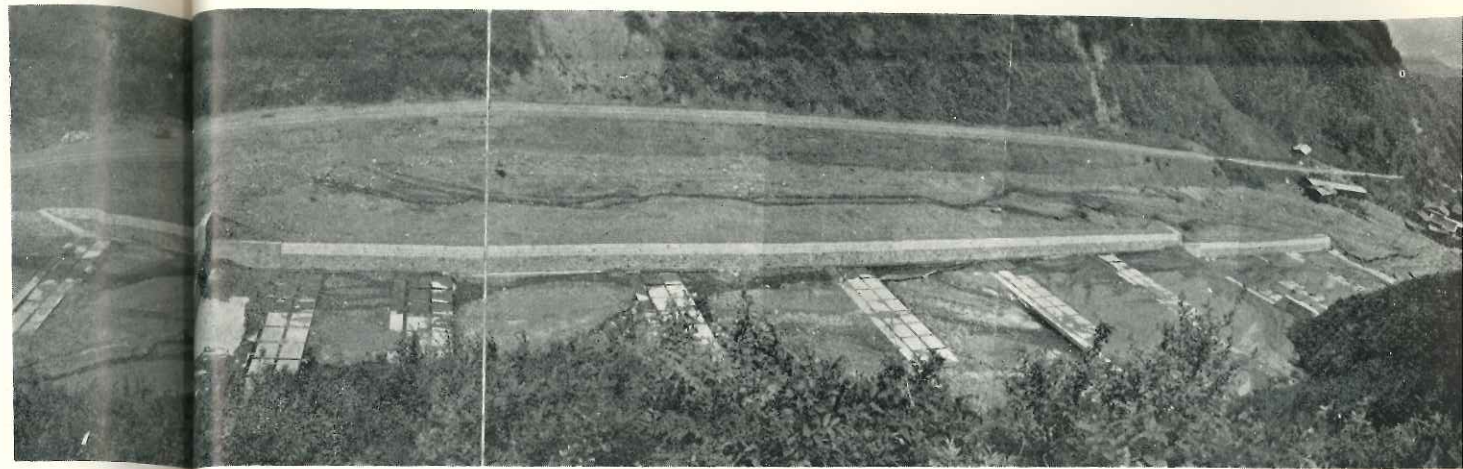
流路工 長337.3m

築堤工 1基

床止工 7基

帯工 10基

しゅん工



主要地方道飯田茅野線

上伊那郡長谷村栗沢

工事費 173,795千円

道路築造工 長2,417m

幅員 5.5m

橋りょう 1ヶ所

床止工 31基

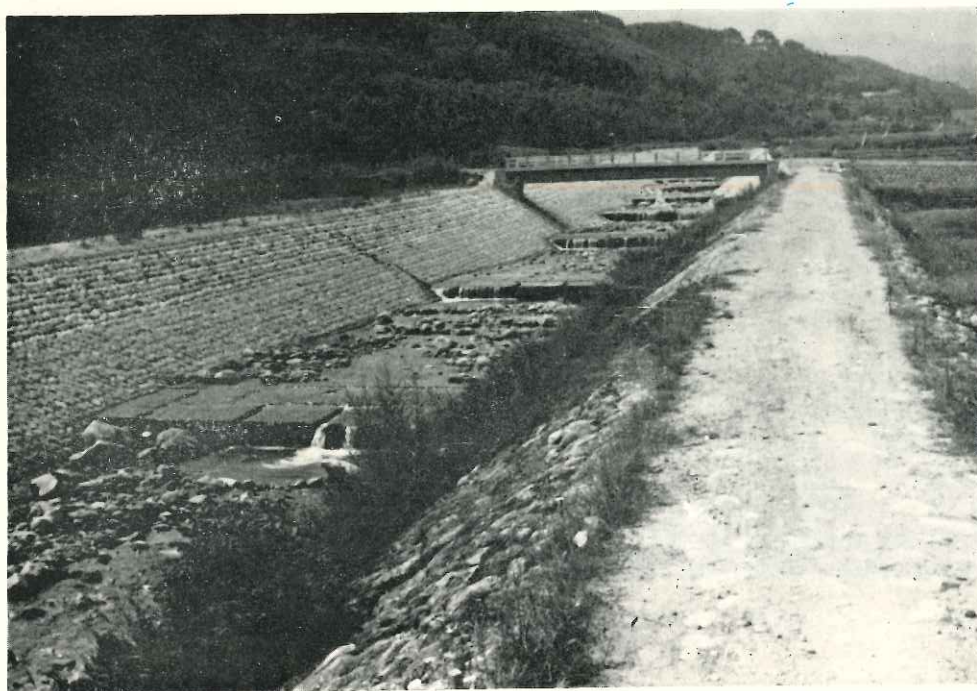
支川谷止 9基

被災



災害助成事業 前沢川 上伊那郡中川村中通～上前沢
 工事費 132,012千円 内災害費 96,191千円
 助成費 28,288 //
 その他 7,593 //
 護岸工 長 2380m
 えん提工 1基
 帯工 69基
 町村橋りょう 5橋

しゅん工



(市町村工事)

大汀沢

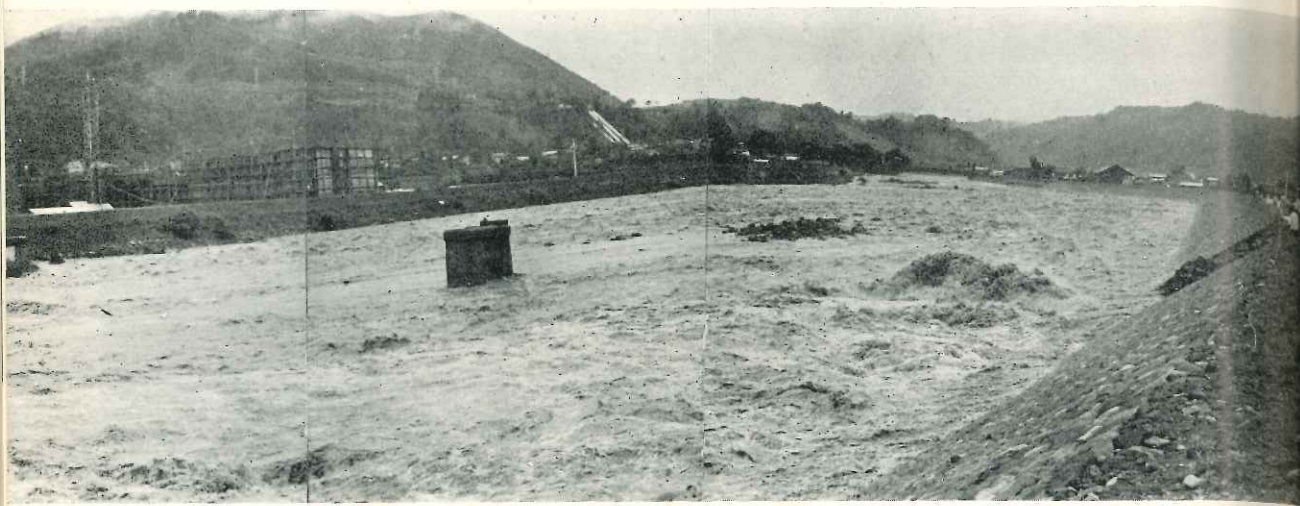
上伊那郡 長谷村 大汀沢
 工事費 21,806千円
 流路工 長 300.8m
 法長 2.23m
 床止工 11基
 帯工 3基



被災



しゅん工



千曲川の濁流に吐まれ流失した宮前橋

上畑佐久穂積(停)線

南佐久郡 八千穂村 宮前橋

工事費 33,034千円

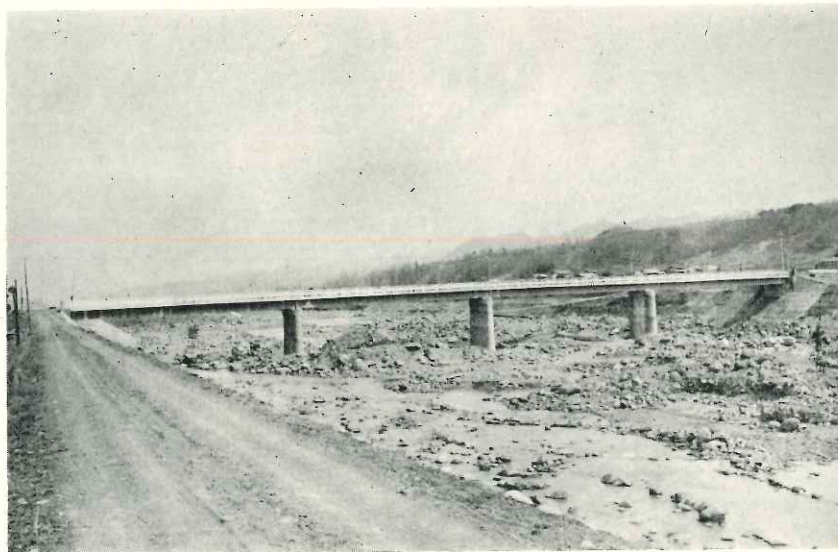
内災害費 24,175千円

関連費 8,859千円

プレストレスコンクリート
橋

橋長 112.2m

幅員 4.5m



しゅん工なった宮前橋



被災

千曲川と板橋川

南佐久郡 川上村 樋沢

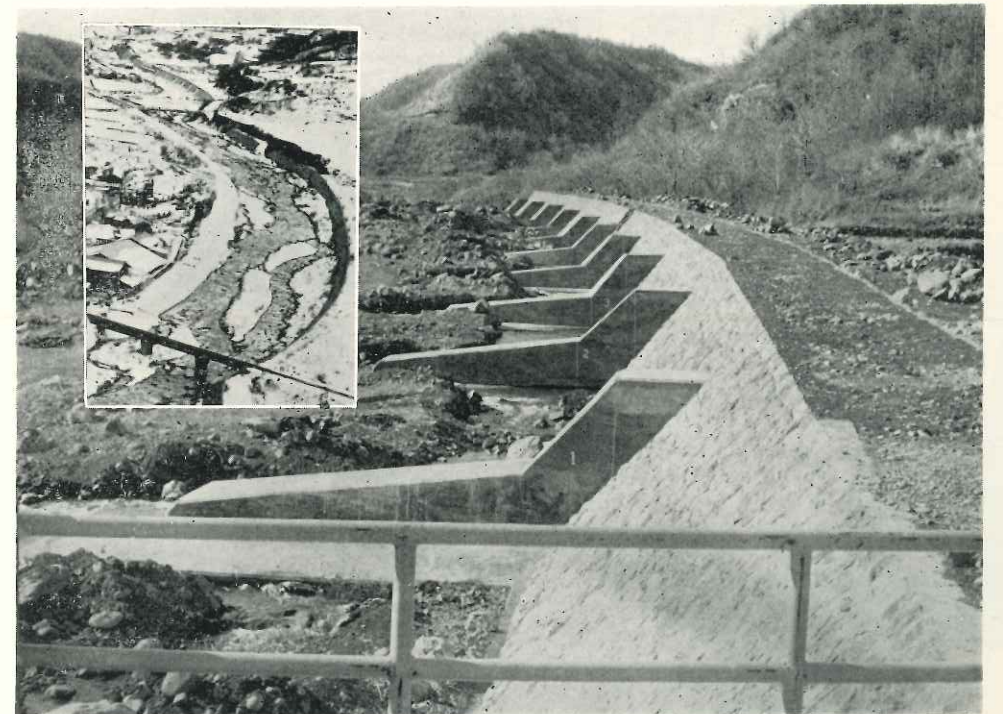
工事費 59,168千円

護岸工 1.270m

長 { 右岸 856m
左岸 414m

法長 4.7~5.2m

水制工(齒型工)25組



しゅん工

4-5 特殊緊急砂防事業の概要

今回の災害の状況をみると、上流から押し出された多量の土石によるはんらん、埋没等による被害がいかに多かったかということである。そして、これらの原因となった上流の山崩れや、中流部の河岸の欠壊による多量の土石は、出水の終わった後も、なお河道に異状ない積をして、次の出水による危険性をはらんでいた。

これらの土砂を下流へ流さないようすみやかに緊急砂防工事の計画が立てられ、昭和39年度までにえん堤97基24億54百万円の砂防工事が行なわれ、上流流域に対して、万全の措置がなされた。

表-39 特殊緊急砂防事業一定計画水系別調書（直轄は含まない）

水系名	えん堤数	事業費	実施額			
			36年	37年	38年	39年
天竜川	63基	1,704,805千円	514,395	431,691	367,729	390,990
屏曲川	18	322,614	69,950	96,567	99,151	56,946
千曲川	7	240,555	18,058	65,976	62,740	93,781
木曾川	3	101,030	12,349	36,149	22,108	30,424
姫川	6	105,852	19,604	23,917	34,472	27,859
計	97	2,474,856	634,356	654,300	586,200	600,000
地すべり	21カ所	177,450	49,650	45,000	52,800	30,000
合計	97基 21カ所	2,652,306	684,006	699,300	639,000	630,000



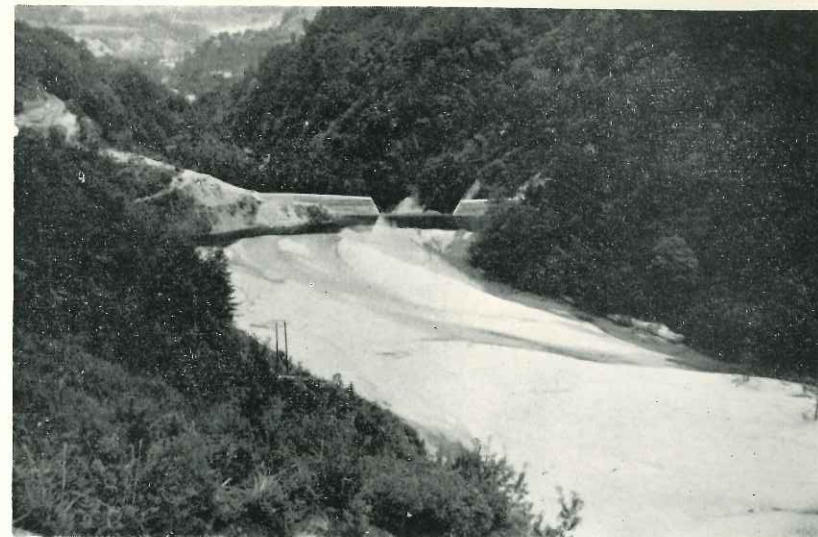
天竜川左岸流域に発生した無数の崩壊群

天竜川と松川

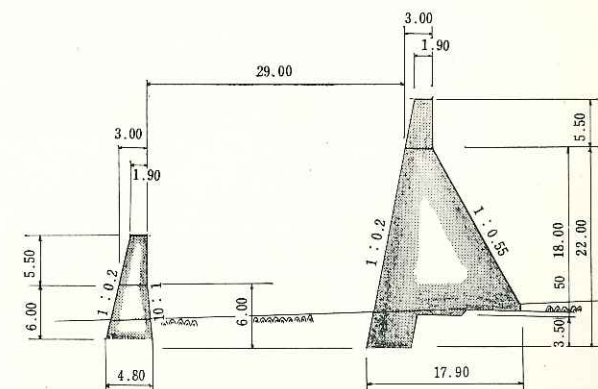
長 117.0m
幅 22.0m
貯砂費 332,000 m³
工事費 81,779千円
工期 昭36年6月～
38年3月

本川は昭和8年より砂防工事が行なわれ上流にえん堤2基、下流7,350m間に床固えん堤36基を含む、流路工が完成していたため、

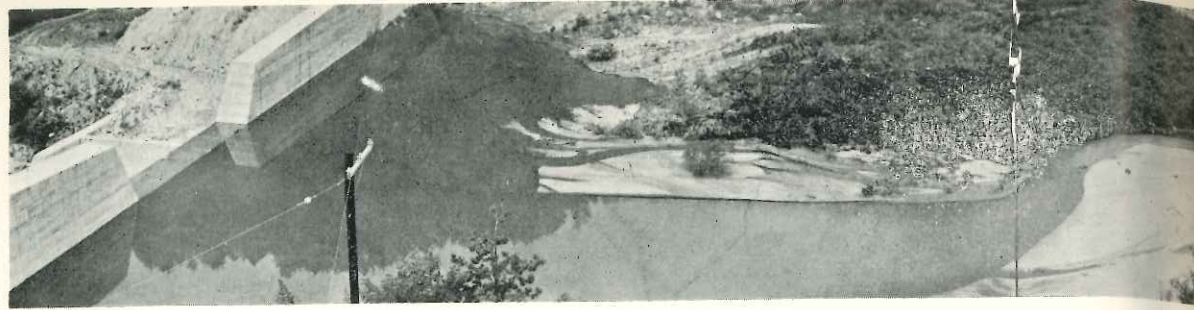
今回の豪雨に際しては、施設の一部に被害があった程度で、沿半の住宅、耕地にはほとんど被害はなかった。構造図1/600



満砂した凡越えん堰

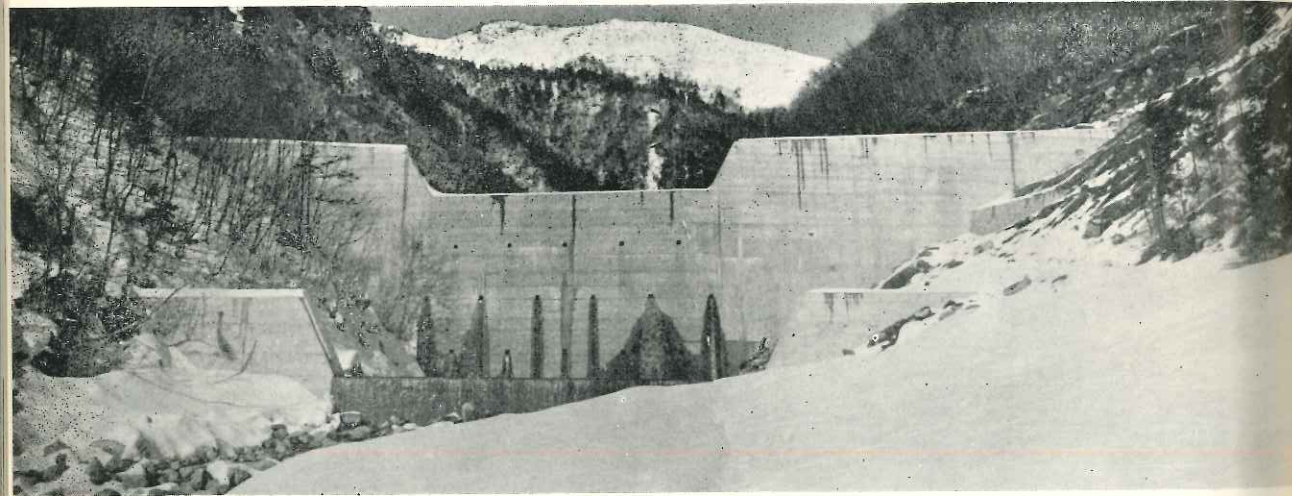


水源附近の崩壊と河道たい積



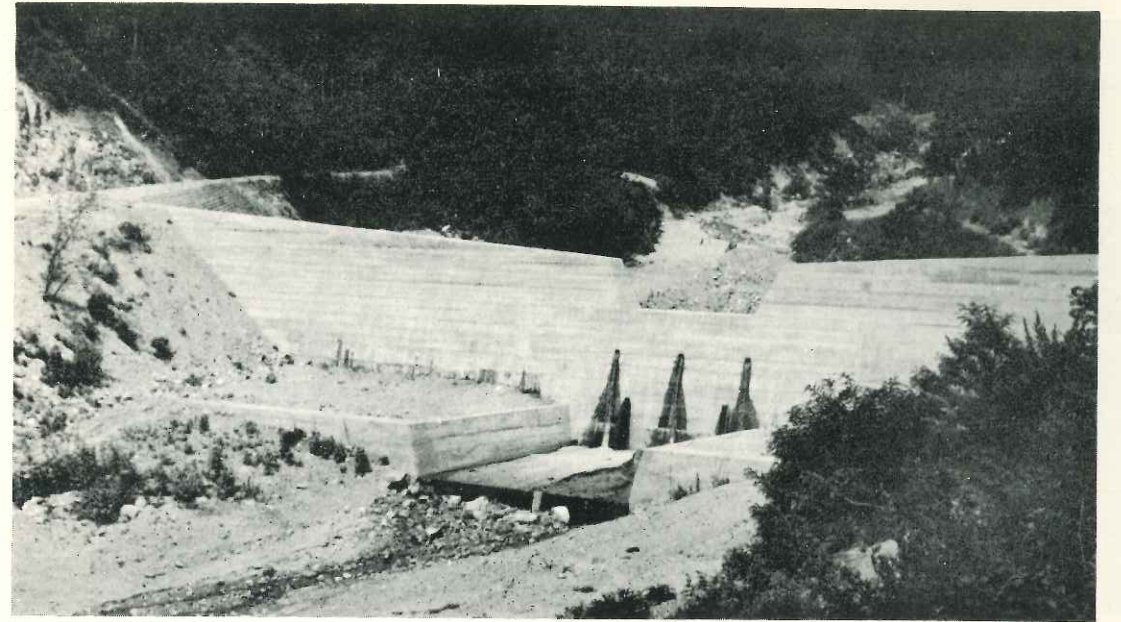
松川支野底川

長 153.0m
 高 16.0m
 貯砂量 336,000m³
 工事費 79,967千円
 工期 昭36年9月~38年11月



天竜川支阿智川支本谷川

長 84.0m
 高 20.0m
 貯砂量 634m³
 工事費 75,149千円
 工期 昭38年7月~39年7月



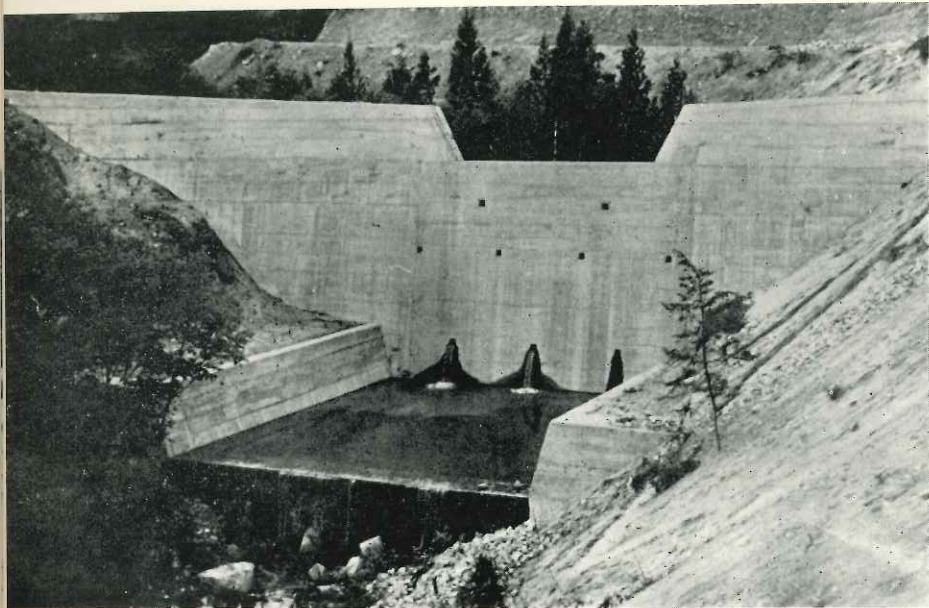
天竜川支松川支源長川支王竜寺川

長 79.0m
 高 10.0m
 貯砂量 104千m³
 工事費 28,416千円
 工期 昭36年9月~37年11月



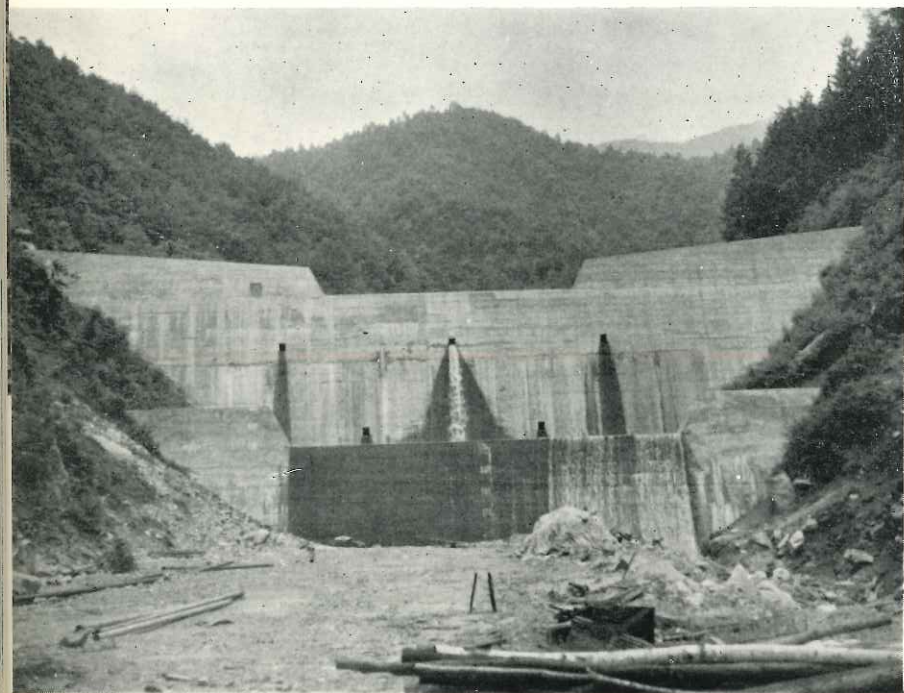
天竜川支大島川

長 71.0m
 高 14.0m
 貯砂量 110千m³
 工事費 43,779千円
 工期 37年1月~38年12月



天竜川支胡麻目川

長 63.0m
 高 12.0m
 貯砂量 1千m³
 工事費 25,483千円
 工期 昭和36年10
 月~37年3
 月



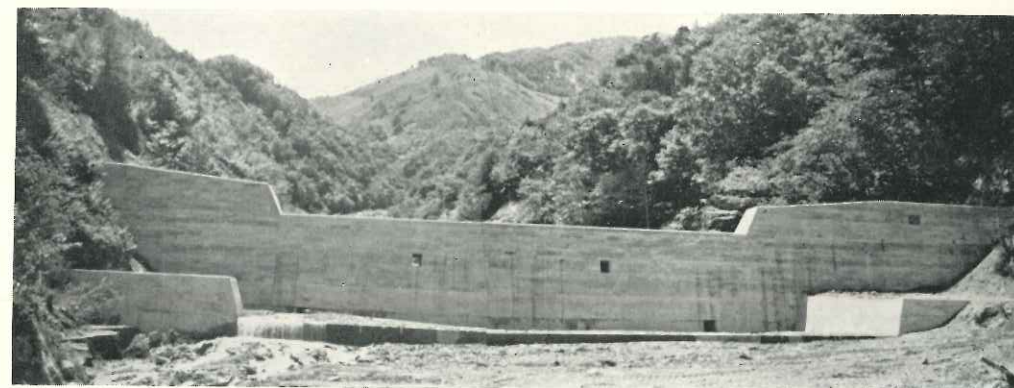
天竜川支新宮川支百々目木川

長 64.0m
 高 17.0m
 貯砂量 108.千m³
 工事費 28,573千円
 工期 昭37年9月~
 38年2月



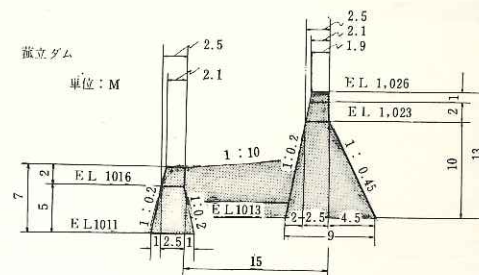
(直轄) 小渋川支鹿塩川

長 134.0m
 高 12.0m
 貯砂量 100千m³
 工事費 954,892千円
 工期 昭38.6~36年12月



(直轄) 三峰川支菰立沢

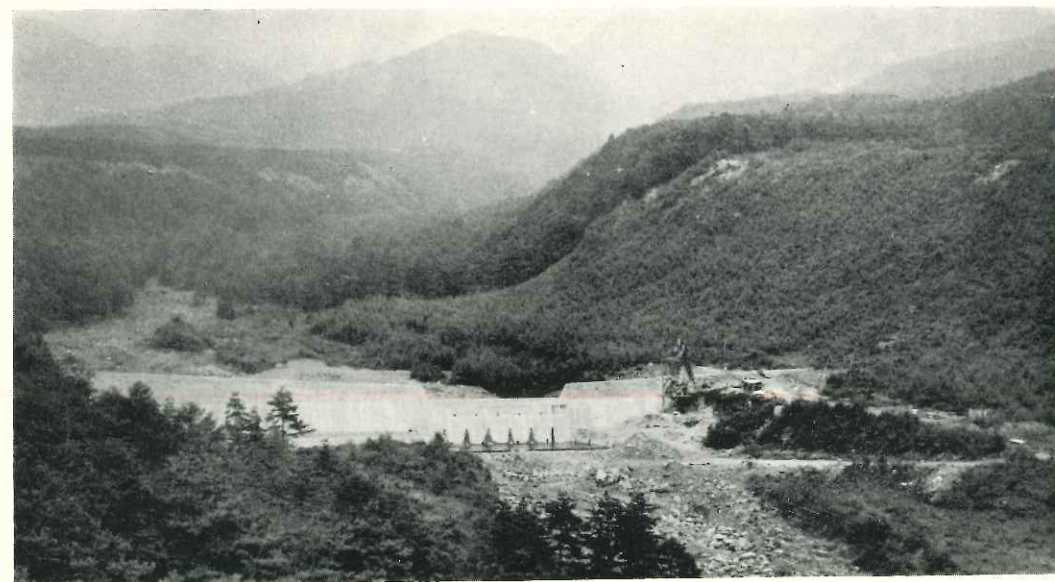
長 73.0m
 高 10.0m
 貯砂量 8千m³
 工事費 44,053千円
 工期 昭36年11月
 ~37年8月





木曾川支蘭川

長 78.0m
 高 10.5m
 貯砂量 186千m³
 工費 38,800千円
 工期 昭36年6月~38年1月



富士川支釜無川支立場川

長 210.0m
 高 12.0m
 貯砂量 204千m³
 工事費 101,126千円
 工期 昭和37年5月~39年10月

4-6 飯田都市計画水害復興城東地区画整理事業の概要

(1) はじめに

昭和36年の梅雨前線豪雨に際し、野底川の多量の土砂を含んだ出水が、松川との合流点付近であふれて二川となり、はんらんによる流速低下のため異常な土砂たい積を起し、そのため市街地は2メートル以上埋没し、あるいは家屋、耕地等の流失をみる等惨状をきわめた。

この野底川は、水源を本高森山に発し、上流は針葉樹林でおおわれ、地質は花崗岩でその風化はなほだしく、梅雨前線豪雨の際に崩壊が相次いで起こり、多量の土砂流となり、河川の本原形をとどめる大災害となり、下流に及ぶに従い、河岸欠損による二次的な流送土砂も加わって、松川との合流点付近の区画整理地区には特にじん大な被害を与えたものである。

この土地区画整理事業は、都市計画街路及び野底川復旧法線を骨子として、区画街路、橋りよう、公園、水路等の公共施設を整備、改善すると共に、土地の交換分合により宅地の利用増進を図り、住みよい町造りを行ない、災いを転じて福となすべく、昭和40年度の完成を目途として、昭和36年度より事業を施行中である。

(2) 事業計画

表-40 (1) 土地の種目別施行前後対称表

用途別	現 況		計 画		
	面積m ²	%	面積m ²	%	
公共用地	道 路	14,009	4.6	57,166	18.8
	河 川	13,009	4.3	15,381	5.0
	公 園	—	—	9,240	3.0
	水 路	3,307	1.1	868	0.3
	計	30,327	10.0	82,655	27.1
宅地(民有地)	234,123	76.8	219,600	72.1	
保 留 地	—	—	2,376	0.8	
合 計	264,450	86.8	304,631	100.0	
測 量 増	40,181	13.2			
総 計	304,631	100.0	304,631	100.0	

表-41 (2) 事業費

種 別	単 位	数 量	金額千円	摘 要
移 転	戸	95	98,000	上下水 内加賀沢橋、睦橋、陰田橋は災害費を合併して施行す都市計画街路3路線を舗装する
移 設	m	2,854	11,288	
街路築造	m	7,740	109,848	
〃 舗装	m ²	9,097	20,948	4か所
水 路	m	1,216	13,042	
公 園	m ²	9,257	5,120	
調査設計	m ²	304,631	9,837	
整 地	m ²	116,038	13,048	
事務雑費			24,058	
合 計			305,189	

(3) 資金計画

表-42 収 入

区 分	金 高	摘 要
国庫補助金	164,190	
県 費	59,905	
市町村分担金	59,905	
計	284,000	
保留地処分金	3,600	
公共施設管理者負担金	3,506	
災害復旧合併施行分	14,083	
計	21,189	
合 計	305,189	

支 出

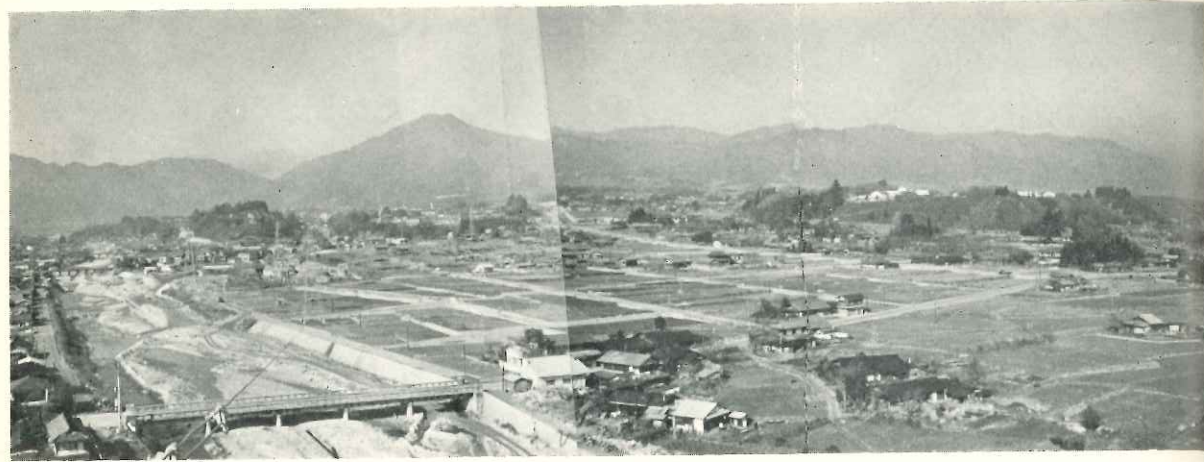
前記事業費一覧表の通り

(4) 事業の執行

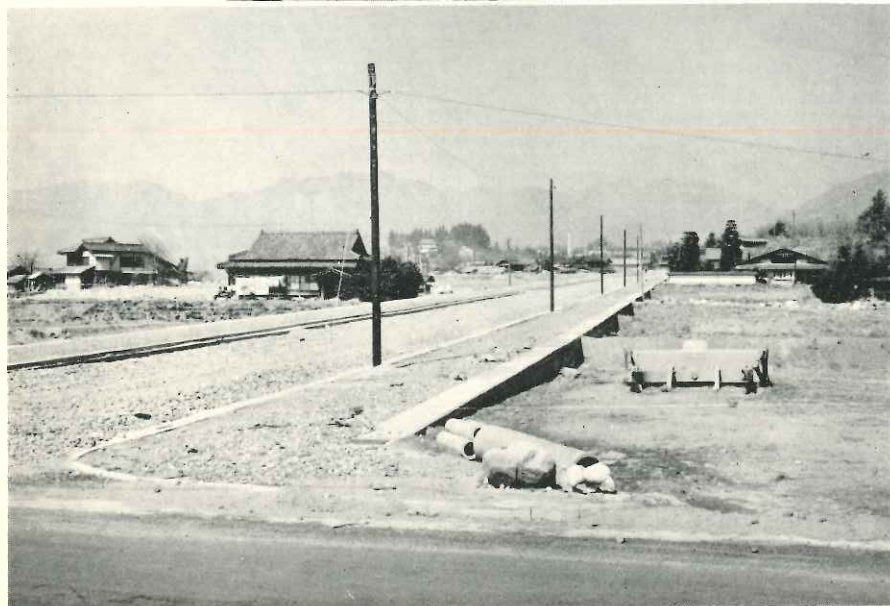
事業は県執行とし、現地に飲田土地区画整理事務所を新設した。昭和36年度から着工して現在の進捗率は77%で昭和40年度には完成存見込みである。

(5) む す び

この事業は災害復旧(野底川、町村橋りよう、耕地復旧、谷川の付替復旧)竜西一貫水路等他の事業との調整事項が多かったが、関係機関の絶大な協力を得て緊急に着工することができ、また関係理事者、土地区画整理審議会委員、災害対策委員、地区住民の方々等全員が丸となって事業の遂行に協力をした輝かしい成果であつて、ながく歴史に残る事業と思うものである。



新装なつた区画整理事業（手前の川は飯田松川）



第五章 集團移住

5-1 集団移住対策事業の概要

このたびの災害では、住む家も田も畑も、すべてを失ってしまった人たちが多く、これが元どおり復旧するには何年もかかるし、また雨の降るたびに、再びあの恐怖をくりかえすよりは……と他の土地へ移住や転業を希望するものが出始めたので、この地域の住民の生命、財産の保全、被害激じんによる再起の困難性から、これら住民を他の安全な場所に移住させることが災害復旧工事を施行するよりも百年の大計として賢明であるとの結論に達し、関係住民の強い要望もあり、国会、県議会等幾多の論議を経て、全国で初めての集団移住事業が上伊那郡中川村ほか4市村の12地区235戸を対象として昭和37.38の2か年で実施されたので、その事業のおもなものは次表のとおりである。



四 徳 移 住 記 念 碑



四徳から駒ヶ根市へ集団移住の集落

5-2 施行状況

表-43 (1) 公共事業

市町村名	地区名	移住資金補助			農地買上				防災事業				
		戸数	人員	補助金 交付額	田	畑	計	金額	山腹編柵工事		植林・簡易編柵 併用工事		
									事業量	事業費	事業量	事業費	
駒ヶ根市	桃沢,新沢, 板橋,落合, 猿沢,大洞	60	295	11,900,000	144.7	65.7	210.4	22,481,999	1,454			69,920	
中川村	四徳村	97	496	19,620,000	238.4	320.3	558.7	52,465,379	1,800			400,060	
長谷村	奥浦	25	142	5,340,000	33.8	77.4	111.2	5,131,200	2,000	2,409,222		214,024	3,221,000
豊丘村	二了	9	55	2,000,000	8.3	11.5	19.8	1,901,500	—			—	
大鹿村	北川・北入	44	235	9,100,000	9.4	130.2	139.6	8,460,700	1,000			89,950	
計	12	235	1,223	47,960,000	434.6	605.1	1,039.7	90,447,778	6,254	2,409,222		773,950	3,221,000

表-44 (2) 県単事業

市町村名	宅地買上		原野買上		地域外移住資 金補助		地域外農地買上		地域外宅地買上		集団受入地建 設費補助等	
	面積	金額	面積	金額	戸数	金額	面積	金額	面積	金額	箇所数	補助金 交付額等
駒ヶ根市	4,006	1,201,603	7.6	22,392	39	1,950,000	—	—	—	—	4	2,957,000
中川村	10,700	3,209,931	—	—	17	850,000	—	—	—	—	—	—
長谷村	1,881	564,258	18.3	54,999	15	750,000	—	—	—	—	—	—
豊丘村	425	127,400	0.2	700	62	3,100,000	—	—	—	—	—	—
大鹿村	3,507	1,052,090	169.7	509,200	74	5,500,000	9.4	282,000	160	24,000	—	—
伊那市	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1,594,000
宮田村	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	18,471,000
計	20,518	6,155,282	195.8	587,291	207	12,150,000	9.4	282,000	160	24,000	6	23,022,000

- (3) 事業費総額 194,983,573円
- (1) 公共事業費 152,763,000円
 - 国庫補助金 148,095,000円
 - 県支出金 3,668,000円
 - (2) 県単事業費 42,220,573円



愛知県猿投へ移住した人の家



松川町上片桐に四徳から移住し集落をつくった

第六章 その他

6-1 災害日誌の抜すい

月	日	時 分	本 部 の 記 録	上伊那地区の記録	下伊那地区の記録	
6	26	12 00	大雨情報発表	各町村に大雨情報を連絡	各町村に大雨情報を連絡	
		13 00	水防本部設置, 警戒態勢にはいる	水防態勢にはいる	水防態勢にはいる	
	17 45	大雨に関する情報第2号発表	大雨情報第2号入電 長野地方気象台主催による気象情報伝達説明会	大雨情報第2号入電 最高時1時間当たり40mm降雨の記録		
	27	9 00		地方事務所建設事務所, 各課長の災害対策会議		
		10 30	大雨洪水注意報発令, 犀川, 天竜川水防警報発令	大雨洪水注意報入電, 各市町村は警戒態勢にはいる		
		13 00			川路小学校避難準備情報入電	
		15 00			所長, 課長会議, 職員全員非常態勢にはいる	
		15 20	各地区の水防活動始まる			
		17 00		夕刻より各地に災害発生, 所内全職員災害態勢にはいり水防活動始める	災害救助対策本部設置, 被害状況報告, 死1.行不2.重傷3.軽傷2.計8.家屋全壊2.流失3.半壊5.その他581戸(註その他は浸水床上床下等の計以下同じ)	
		17 20	大雨洪水警報発令, 土木被害計を始める			
		18 00	(以下情報警報続発) 土木部係員調査に派遣交通止か所続出, 木橋撤去始まる			
		20 00			時間雨量5.5mm減少傾向, 人的被害合計15名家屋被害合計888戸田畑被害411haに達する。(註人的被害は死亡, 行不, 重傷, 軽傷の合計, 家屋被害は全壊, 流失, 半壊, その他の合計田畑は, 流失, 冠水の合計以下同じ。)	
		21 00	緊急部長会議(降雨激しくなる) 災害対策本部設置竜江村より天竜峡量水標18mに達して2階まで浸水中と入電			
	28	23 00	飯田市より自衛隊派遣申請, 関係方面に連絡する		時間雨量12mm増量傾向, 人的被害55名, 家屋被害1,394戸田畑被害558ha	
		0 20	飯田市長より災害救助法適用の申請自衛隊の進入路について連絡			
		1 00	部課長調査に出発。交通止22か所となる			
		1 30	飯田市に災害救助法発動	農地経済部長来郡の連絡を受く	時間雨量4.8mm, 人的被害57名, 家屋被害1,646戸, 田畑被害前日と同様, 社会部長来郡の連絡を受く	
		2 00	自衛隊杉本駐とん部隊50名飯田に出発			
		2 10	竜江村に災害救助法発動			
		5 30	自衛隊先発隊伊那市着			
		6 00			自衛隊200名入飯連絡, 豪雨は南部に局地的に降雨の入電(飯田測候所)	
	6	28	7 10	高森町に災害救助法発動 以下豊丘村, 上郷村, 松川町中川村, 鼎町, 清内路村, 駒ヶ根市に発動……28日中		
			8 00		農地経済部長到着, 地区対策本部を編成。部長中川村, 長谷村等の災害現地に出発	
10 00			自衛隊松本駐とん部隊本隊250名出発			
		11 00		道路分断のため交通困難。県蚕糸課桑園係長, 農業改良課専門技術員調査指導のため到着。地方課長, 松川町に設置された自衛隊連絡本部員として着任のため立寄る	県人事課より県職員の住宅並びに人的被害報告の連絡依頼入電人的被害合計74名, 家屋被害合計1,528戸田畑被害合計4,220ha	

月	日	時	分	本部の記録	上伊那地区の記録	下伊那地区の記録
6	28	12	00	霞ヶ浦天候悪く、ヘリコプターの出動不可能との連絡ある職員の出発の手配長谷村山中にて人夫相当数閉じこめられ食糧要求の依頼あり。		時間雨量12mm、県下の豪雨は下火となり河川は減水始める。洪水警報は洪水注意報に切替える。
		14	00			水道貯水池故障断水となる。鼎町、松川町、豊丘村、高遠町有線放送不通、町村間の連絡途絶となる。自衛隊の急援を要請、町村長来所陳情、自衛隊の先発隊入飯
		17	00			上伊那地方事務所より連絡、自衛隊387名、県議代表14名、事務局6名29日夕刻までに入飯、変電所故障管下停電となる。
		20	00			時間雨量12mmとなる見込、南部地方注意との入電(測候所)
		22	00	飯田以南の被害概要をつかむ大鹿村不明。対策について打合わせ。		人的被害136名、家屋被害4,175戸、田畑被害4,480ha 社会部長到着、
		23	00	大鹿村役場吏員4名連絡のため飯田市にたどり着く、被害激しんと報告される。		
		24	00			松川町より災害対策本部設置の連絡 28日中の降雨量52.5mm 所長より所員に激励訓辞
6	29	0	30	自衛隊第1管区より連絡に来県、進入路について打合わせ被害の激しさを報告される。自衛隊第1建群隊、連隊給水中隊等出発の連絡あり、北信地区の水防資材可能量の調査		
		3	29	諏訪湖流入量激増480m ³ /sに達する。		
		6	00	諏訪湖はんらんを始め浸水区域増大中県下の土木被害574か所39億円に達す。		電報電話局より連絡、電報は発信しても受信時刻は不明、電話については管内山吹局、会地局の一部及び管外は伊那、松本、長野各市並びに東京は可能であるが普通報では全く不可能、町村連絡は伝令又は警察電話による。
		8	00	諏訪市、大鹿村に災害救助法発動。水防資材発送、確保のため手配する。		
		10	00			中島代議士明朝8時10分新宿発で入飯の連絡
		11	00	自衛隊高田部隊338名松本経由現地向かう。		
		12	00			飯田測候所より豪雨再び強くなる、全県下50mm以上の見こみ南部及び山岳地帯は特に注意との連絡。 県議一行20名5時上伊那へ出発連絡あり。
		13	00	土木部長現地指揮に向かう。	県議会各党代表14名の議員が現地視察のため来伊、長谷村、駒ヶ根市、飯島町の災害地を調査	
		13	30	喬木村災害救助法適用	県産連、大沢指導課長、災害調査のため来伊、県庁職員が応援のため28名到着、7月8日まで災害用務につく。	大鹿村より非常電報「医療物資至急救援たのむ返事まつ」 松川町長より非常電報「交通途絶、復旧困難自衛隊の救援たのむ」 知事、副知事、県庁から現地へ出発の連絡
		14	00	テレビにて災害救助状況説明		
		15	00	高遠町災害救助法適用、知事飯田に向け出発		

月	日	時	分	本部の記録	上伊那地区の記録	下伊那地区の記録
		16	25	建設省宮下査定官現地へ。		飯田警察より県庁職員33名応援のため出発したとの連絡を受く
6	29	19	00	係員飯田より帰り第一報、報告	西沢知事、企業局長到着被害事情聴取のうえ直ちに飯田に向かう	
		20	00	土木部長松川町着対策打合わせ 土木被害45億円に達す		職員の疲労に対し所長注意、大鹿村長より「けが人、医療品、衣類、食物至急たのむ」の連絡 自衛隊936名及び県庁応援隊33名到着
		23	00	諏訪湖最高水位に達す		知事一行到着
6	30	0	0	諏訪湖放流量253m ³ /sに達す		
		1	00	千曲川下流危険状態になる。知事飯田到着の連絡あり		
		2	20	中東北信洪水警報解除		
		午前中		ヘリコプターによる空輸始まる。(中川村、大鹿村) 13時南信濃村に災害救助法適用14時30分県西北部に洪水注意報発令、16時国道20号線開通 水防資を続いで送る。 大鹿村材担当職員無事帰る。 22時知事帰庁部長会議 飯田管内の被害73億円と推定される。22時30分知事事情説明及び陳情のため上京。	自民、社会各党代表として赤坂正道、下平正一両代議士及び災害対策特別委員長小酒井参議院議員視察 下伊那地区対策本部長笠原副知事着任途次立寄る。 厚生省田崎生活保護監査官、日赤島津社長、農林省長野食糧事務所長、林野庁渡辺技官、伊那営林署利田課長等、調査指導のため到着、県林務部より係員応援のため来庁	地元西沢松下今井県議来る。西沢知事郡市り災地視察島津日赤本社長、中島代議士および建設省宮下査定官到着。 自衛隊員963名、救援航空隊ヘリコプター2機到着、直ちに物資輸送並びに日赤看護班出動大鹿、生田、上郷村、鼎町等自衛隊派遣要請に来る
7	1			12時山本建設技監諏訪市到着 20時土木被害78億円に達す。	文部省石川地方課長到着、中川村、飯島町の現地視察 県企業局桜井建設部長、駒ヶ根市、飯島町の現地視察後下伊那に向かう。 原山県教育次長伊那市を視察 伊那市美篤伊藤和夫氏外約50名の陳情隊大挙して来庁、美篤地区堤防欠壊原因は、美和ダムの管理操作の誤りが原因として、流災水田の補償問題について訴える。 農林省林野庁計画課長および補佐現地調査のため到着、花村農業会議長、企業局桜井建設部長並びに県住宅課、建築課係員到着丸田県林業課長、林野庁中尾技官現地調査指導のため来庁	赤沢代議士一行到着 救援航空隊ヘリコプターにて大鹿、生田へ物資輸送。 小酒井、下平両代議士一行到着 米軍ヘリコプターあす来るとの連絡 中電加藤副社長一行見舞に訪問 自衛隊348名入飯 宮沢代議士到着 喬木村自衛隊派遣要請に来る 松川町へ直通電話を設置
		7	2	10時部課長係員ヘリコプターにて大鹿村にはいる。 夕方、トラック始めて飯田にはいる。	建設省山本技監、中部地建吉川局長、小川代議士県土木部長建設省浜田、岡崎両技官現地調査のため到着 美和ダム問題を質問した。 原山教育次長、駒ヶ根市、長谷村の現地を視察 村田地方課長、松川白衛隊連絡部より帰庁の途次立寄る。 中島代議士、原市長、溝上県議災害対策の打合わせ。	建設省山本技監一行入飯の連絡あり。日赤義援物資到着 泰阜村、南信濃村両村長自衛隊派遣を要請 自衛隊44名入飯 中島代議士一行打合わせに来庁 米軍ヘリコプター6機、自衛隊ヘリコプター12機到着 ヘリコプター合計20機となり、南信濃村、松川町、阿南町へ本格的に物資輸送を開始。
		7	3	予算処置、応援の手配、資材の発送を続ける。 土木被害86億円に達する。	原代議士災害地調査のため来庁 林野庁橋爪指導部長、中田県林務部長、池田治山課長、飯島町駒ヶ根市を視察 厚生省大卒社会局長、唐沢県社会部長、災害地視察のため来庁 伊那市、駒ヶ根市、飯島町等の視察湯沢県議、災害対策打合わせのため来庁	県救助対策本部より連絡、応援隊員は5日間応援を延期のこと ヘリコプター延22機飛ばす、大鹿生田の一部に主として米、味噌、醤油、医療品を投下する。 建設省山本技監一行来庁り災地を調査視察する。 自衛隊21名入飯
		7	4	8時 中村建設大臣、防災課長ほか東京発現地へ向かう旨の連絡あり。	厚生省環境衛生課佐竹技官来庁 農林省畜系局災害班長来庁、戸谷林業指導所次長、県住宅課、畜産課、耕地課各課係員事務指導のため来庁	中村建設大臣一行来庁、副知事と共に現地視察、厚生省社会局長来庁現地視察。 ヘリコプター12機大鹿、生田方面へ飛ばす。自衛隊169名入飯、

6-2 昭和36~39年における関係者名簿

月	日	時	分	本部の記録	上伊那地区の記録	下伊那地区の記録
7	5			泰阜ダム関係問題起こる。	中村建設大臣一行管内を視察、大臣一行は二級国道所長、住宅建設課長、木内小山参議院議員宮沢代議士であつた。駒ヶ根市中沢地区を視察、各市町村長よりの陳情を受け、奥浦地区の地すべり対策につき強調、伊那市で一泊、翌6日諏訪市に向かう。長野営林局総務部長、NHK三神解説委員視察の途次立寄る。	米軍ヘリコプター6機帰る。自衛隊との調整会議を開く。建設大臣一行現地視察厚生省社会局長現地視察所長、課長会議招集打合わせ。ヘリコプター10機大鹿、生田、阿智、天竜、南信濃村へ飛ぶ、自衛隊55名入飯、自衛隊との調整会議開催清内路村、上郷村から自衛隊派遣要請来る。
7	6			国鉄飯田線飯田まで開通 7月3日より地建および全国各都県の職員に別記のとおり絶大なる応援を受けた。	八田農林省政務次官一行来庁、同伴者、農林省堀参事官、改良局石倉防疫課長、林野庁災害班長、向山県経済研究室長酒井県耕地課長 伊那市長、町村会長より陳情、伊那市美郷、駒ヶ根市中沢、中川村を視察、松川町で下伊那に引継ぐ。関東信越国税局所得税課長外係員見舞に来訪、宮原県町村会長、小林事務局長見舞のため来訪 住宅公庫北関東支所福地課長、県建築課係員、復興住宅関係会議のため来庁 東京農地事務局災害復旧課長、県耕地課係員管内視察のため来庁	八田農林政務次官来庁 県町村会正副会長見舞来訪、自衛隊19名帰隊、ヘリコプター延21機飛ぶ。阿智村、天竜村、大鹿村、南信濃村方面 県職執行委員長見舞来訪 自衛隊との調整会議 (註) 本部記録と上伊那地区および下伊那地区の記録で重複部分はなるべく避けるようにしました。

(註) 本部の記録は土木部企画調査課資料より
上伊那地区の記録は地方事務所編「濁流のあと」より
下伊那地区の記録は地方事務所編「36年6月梅雨前線集中豪雨災害記録」より

	36.1.1現在	37.1.31現在	38.1.31現在	39.11.2現在
知事	西沢 権一郎	西沢 権一郎	西沢 権一郎	西沢 権一郎
副知事	笠原 吉三	笠原 吉三	笠原 吉三	笠原 吉三
出納長	橋詰 英雄	橋詰 英雄	橋詰 英雄	橋詰 英雄
土木部長	小林 武雄	小林 武雄	小林 武雄	小林 武雄
監理課長	田中正 実	田中正 実	佐々木 悦治	小 林 武雄
技幹	田中 敏仁	田中 敏仁	—	—
課長補佐	今井 喜代治	川合 久午	若林 政見	宮沢 茂夫
主任専門指導員	—	36.4.1設置 松木 隆治	後藤 誠	田中 善二郎
都市計画課長	松田 庄次	松田 庄次	松田 庄次	大口 栄一
課長補佐	滝沢 保喜	北村 和夫	中村 恒雄	中村 恒雄
道路課長	吉村 貞次	吉村 貞次	吉村 貞次	—
技幹	木下 和雄	竹花 友司	竹花 友司	—
課長補佐	小野 久藏	小野 久藏	北村 和夫	—
企画調査課長	36.4.1設置 田中 敏仁	田中 敏仁	田中 敏仁	—
専門調査員	唐木 卓雄	唐木 卓雄	唐木 卓雄	—
課長補佐	後藤 誠	後藤 誠	川久保 寛	—
道路維持課長	—	—	38.5.15設置 竹花 友司	竹花 友司
技幹	—	—	—	39.4.1設置 山崎 亨
課長補佐	—	—	清水 六三郎	清水 六三郎
道路建設課長	—	—	38.5.15設置 高橋 光	高橋 光
技幹	—	—	38.8.1設置 川久保 寛	川久保 寛
課長補佐	—	—	市川 正一	市川 正一
河川課長	小幡 敏男	田中 広夫	田中 広夫	田中 広夫
技幹	竹花 友司	室賀 共一	鈴木 佐雄	田中 良一
課長補佐	池田 信彦	井上 作一	仁科 義司	戸根川 正司
砂防課長	木村 三郎	阿座上 新吾	阿座上 新吾	阿座上 新吾
課長補佐	中沢 喜利	宮入 直侶	宮入 直侶	宮坂 幸吉
技幹	—	—	—	増田 幸進
建築課長	市川 信治	市川 信治	加藤 正男	加藤 正男
技幹	宮島 光則	—	—	—
課長補佐	杉沢 邦雄	宮島 定男	宮島 定男	酒井 正
(白田建設事務所)				
所長	駒沢 敏行	平井 重次	平井 重次	高島 茂郷
庶務課長	倉沢 七左衛門	倉沢 七左衛門	轟 芳男	山岸 太郎
工務課長	須田 生夫	—	—	—
設計課長	—	—	37.4.16設置 青沼 武之助	河野 頼尚
工事課長	—	—	井出 智秀	井出 智秀
(岩村田建設事務所)				
所長	田辺 関雄	宮川 益男	宮川 益男	坂口 袈裟幸
庶務課長	佐伯 元治	柏木 織衛	瀬在 光義	瀬在 光義
工務課長	安藤 正三	青沼 武之助	—	—
設計課長	—	—	—	—
工事課長	—	—	輪湖 茂義	輪湖 茂
(上田建設事務所)				
所長	松木 隆治	丸田 勇男	丸田 勇男	宮川 益男
庶務課長	浅井 清英	浅井 清英	浅井 清英	浅井 清英
工務課長	滝沢 一雄	須田 生夫	—	—
設計課長	—	—	須田 生夫	片山 文雄

	36.1.1現在	37.1.31現在	38.1.31現在	39.11.2現在
工事課長	—	—	宮沢武男	玉井運康
(諏訪建設事務所)				
所長	大口栄一	田中善二郎	田中善二郎	駒沢敏行
庶務課長	星野六一郎	小田切庸人	倉沢七左衛門	竹内一夫
工務課長	白鳥義三	白鳥義三	—	—
設計課長	—	—	白鳥義三	坂本愛郎
工事課長	—	—	百瀬喜義	坂本愛郎
(伊那建設事務所)				
所長	渡辺益三	渡辺益三	藤沢功	三原田鶴象
庶務課長	酒井一	酒井一	酒井一	田畑勝博
工務課長	山口誠次郎	唐木誓三郎	—	—
設計課長	—	—	深見外志治	野崎力
工事課長	—	—	唐木誓三郎	落合利男
災害復旧課長	—	36.8.16設置 片桐博	片桐博	片桐博
(飯田建設事務所)				
所長	伊沢陸	山口熙	山口熙	藤沢功
庶務課長	倉科登久	平沢善治	義家敏	一ノ瀬正一
工務課長	塩沢信山人	塩沢信山人	—	—
設計課長	—	—	奥田良平	近藤正昭
工事課長	—	—	伊藤健二	白鳥義三
災害復旧課長	—	36.8.16設置 田中忠	田中忠	田中忠
(松本建設事務所)				
所長	中村雅雄	大口栄一	大口栄一	丸田勇男
庶務課長	酒井正一	酒井正一	市川正一	中原平四郎
工務課長	上条英一	滝沢一雄	—	—
設計課長	—	—	田中良一	永田進一
工事課長	—	—	塩原広栄	塩原広栄
(福島建設事務所)				
所長	鈴木佐雄	鈴木佐雄	有賀林蔵	平井永一
庶務課長	荻原進	荻原進	稲垣忠	大工原安雄
工務課長	宮沢武男	角田俊一	—	—
設計課長	—	—	依田久雄	花岡文雄
工事課長	—	—	小林藤馬	小林藤馬
(大町建設事務所)				
所長	丸田勇男	三原田鶴象	三原田鶴象	鈴木佐雄
庶務課長	高橋貞一郎	高橋貞一郎	小沢武貴	石田芳貢
工務課長	遠藤辰男	塩原広栄	—	—
設計課長	—	—	鶴巻信行	鶴巻信行
工事課長	—	—	小林亮	小林亮
(長野建設事務所)				
所長	小林茂一郎	小林茂一郎	松木隆治	山口熙
庶務課長	小泉善四郎	小泉善四郎	岩間一男	岡沢敏隆
工務課長	青木勇雄	山口誠次郎	—	—
設計課長	—	—	角田俊一	深見外志治
工事課長	—	—	山口誠次郎	唐木誓三郎
(中野建設事務所)				
所長	藤沢功	藤沢功	駒沢敏行	土屋年
庶務課長	山口忠貞	山口忠貞	曾根原輝隆	唐沢正三
工務課長	山崎亨	武居兼文	—	—
設計課長	—	—	武居兼文	奥田良平
工事課長	—	—	塚田一夫	塚田一夫
(豊科建設事務所)				

	36.1.1現在	37.1.31現在	38.1.31現在	39.11.2現在
所長	土屋年	青木守	塩沢信山人	塩沢信山人
庶務課長	栗林憲雄	栗林憲雄	西条能全	高田雄夫
工務課長	石沢正	石沢正	—	—
設計課長	—	—	村山泰美	村山泰美
工事課長	—	—	石沢正	石沢正
(篠ノ井建設事務所)				
所長	宮川益男	高島茂郷	高島茂郷	平井重次
庶務課長	鎌原篤三	鎌原篤三	戸谷清三	戸谷清三
工務課長	古畑隆平	宮沢武男	—	—
設計課長	—	—	藤田佳男	青沼武之助
工事課長	—	—	岡沢義明	岡沢義明
(屋代建設事務所)				
所長	青木守	青木勇男	青木勇男	青木勇男
庶務課長	轟芳男	轟芳男	一由孝男	一由孝男
工務課長	坂本愛郎	坂本愛郎	—	—
設計課長	—	—	高橋住夫	高橋住夫
工事課長	—	—	児島五郎	青木節義
(須坂建設事務所)				
所長	三原田鶴象	土屋年	土屋年	後藤誠
庶務課長	村越忠一郎	村越忠一郎	一由亮三	轟芳男
工務課長	小河原七三男	百瀬喜義	—	—
設計課長	—	—	百瀬喜義	滝沢和夫
工事課長	—	—	北原重治	小河原七三男
(飯山建設事務所)				
所長	坂口袈裟幸	坂口袈裟幸	坂口袈裟幸	遠藤辰男
庶務課長	小林千栄	小林千栄	藤沢尚夫	佐藤唯重
工務課長	川久保寛	佐塚房之助	—	—
設計課長	—	—	野崎力	山下純平
工事課長	—	—	佐塚房之助	松山基春
(奈良井川改良事務所)				
所長	平井重次	遠藤辰男	遠藤辰男	宮沢武男
庶務課長	柳原芳文	竹内一与	竹内一与	和沢利雄
工務課長	下村寿雄	遠藤辰男	小林盛雄	赤羽正武
(犀川砂防事務所)				
所長	有賀林蔵	有賀林蔵	滝沢一雄	滝沢一雄
庶務課長	高田雄夫	高田雄夫	高田雄夫	親松幹雄
工務課長	塩原広栄	山崎七三郎	山崎七三郎	菅原慶一
(土尻川砂防事務所)				
所長	高島茂郷	古畑隆平	佐藤唯重	須田生夫
庶務課長	佐藤唯重	佐藤唯重	佐藤唯重	金箱義美
工務課長	玉井運康	玉井運康	玉井運康	田中善治郎
(姫川砂防事務所)				
所長	平井永一	平井永一	平井永一	山口誠次郎
庶務課長	和沢利雄	和沢利雄	和沢利雄	宮沢牧男
工務課長	田中良一	菱田義寛	松山基春	西内武夫
(飯田土地区画整理事務所)				
所長(兼)	—	36.12.21設置 山口熙	山口熙	藤沢功
次長	—	小河原七三男	小河原七三男	北原重治
(軽井沢土地区画整理事務所)				
所長(兼)	—	—	37.4.1設置 宮川益男	坂口袈裟幸
次長	—	—	田沢光雄	田沢光雄

6-3 図表の索引

表-1	長野県内水系の諸元	1
表-2	流路延長および流域面積	2
表-3	主な地点の降雨量表	5
表-4	日雨量調書	6
表-5	代表地点における過去の降雨量との比較	6
表-6	最高水位と洪水流量	7
表-7	昭和36年災害の府県別状況	9
表-8	新聞寄せ記事	10
表-9	公共土木施設の被害および復旧額の状況	12
表-10	昭和36年公共土木施設国庫負担災害所管別工種別復旧額表	12
表-11	農林被害総計表	12
表-12	人的被害	13
表-13	家屋の被害	13
表-14	昭和36年直轄災害復旧内訳表	14
表-15	飯田線被害総計表	15
表-16	その他の施設被害	15
表-17	水防活動の状況	26
表-18	主要資材の内訳	26
表-19	陸上自衛隊の活動状況	29
表-20	自衛隊の派遣人員	29
表-21-1	自衛隊の派遣状況	29
表-21-2	ヘリコプターによる救援実績	32
表-22	飲料水の供給	34
表-23	炊出し	34
表-24	災害救助法適用市町村一覧	36
表-25	災害救助費内訳	36
表-26	義えん金品の状況	36
表-27	応急仮設住宅及び住宅応急修理	37
表-28	避難所の設置	37
表-29	災害救助法発令市町村の被害状況	38
表-30-1	公共土木施設災害復旧事業査定及び検査官氏名	42
表-30-2	県外応援職員	42
表-30-3	県内 //	43
表-31	昭和36年災害応援職員一覧(建設省関係)	43
表-32	// (他府県関係)	43
表-33	昭和36年公共土木施設災害復旧事業査定別総計表	45
表-34	昭和36年公共土木施設災害復旧事業年度別進捗状況表	46
表-35	昭和36年公共土木施設災害復旧事業別災害費比較表	46
表-36	昭和36年災害林務農地年度別進捗状況表	47
表-37	昭和36年公共土木施設災害復旧事業災害別工種別各年度別進捗状況表	47
表-38	昭和36年災害復旧事業(助成関連を含む)に使用した計画洪水量	48
表-39	特殊緊急砂防事業一定計画水系別調書	94
表-40	飯田都市計画水害復興区画整理事業計画	101
表-41	同上事業費	101
表-42	同上資金計画	101
表-43	集団移住対策事業の施行状況	104
表-44	同上県単事業	104
図-1	長野県の水系概況	1
図-2	天竜川流域概況図	2
図-3	地質図	3
図-4	//	3
図-5	豪雨時の高層天気図	4
図-6	//	4
図-7	//	4
図-8	昭和36年梅雨前線豪雨連続降雨量分布	5
図-9	過去における災害を起した梅雨時の降雨量分布図	5
図-10	天竜川筋被害概況図	11
図-11	災害救助法適用市町村図	37

編集後記

月日のたつのは早いもので、本県の県政史上最大といわれた昭和36年災害もあれから4年、関係の方々の昼夜を分たぬ御努力によって、今日輝かしい成果をあげ、今、伊那谷に新しい光を投げかけようとしている。

あの時のあの恐しさ、のろわしさ、苦しさ、そうしたものをすべて乗越え、復旧のために立ちあがった不屈の魂と、その復興への努力を記念し、記録に残すようにということで、不肖われわれ一同編集委員を命ぜられたのでありますが、仕事の合間に集まっての編集のため、なかなかかはかどらず、その任の重さを痛感した次第で、御覧の皆様には御不満の点多かろうと思いますが、お許しをいただきたいと思ひます。

資料としては、当時、土木部では、水防本部は河川課に、資料の集取、被害報告の取まとめ、広報等は企画調査課に、応急資材、あるいは応援職員の心配等庶務的事項は、監理課にというように分担されており、内部としては資料が比較的整理されていたことと、あの災害にも係らず現地においても比較的冷静にこうした資料を集めておいていただいたお蔭で、これらを集めて積あげたところ龍大なものとなりさて編集ということとなると、ページ数の関係等で、カットするのに心を痛めるほど、このため、編集会議を何度も開いては検討し、どうやらまとめあげることができました。

しかし、当時の記憶からぜひ載せたい写真等が貸出等のためか一部見当らなかつたりして、残念に思えたこともあり、また、生々しい写真を見ていると、あれもこれも書き残しておきたいと思うことが続々と湧いて来たりそれらをおさえるのかかえて苦しい思いをしました。

また、この冊子を編集するに当りいろいろ御力添や御指導をいただいた建設省天竜川上流工事事務所および県文書広報課あるいは部内の部課長各位に改めて感謝を表するとともに、資料の提供をいただいた関係機関各位に厚く御礼を申しあげる次第であります。

終りに、この災害のため犠牲になられた方々の御冥福をお祈りして結びとします。

昭和40年3月

編集委員

編集委員

監理課	萩原文雄
都市計画課	吉沢英治
道路維持課	藤沢美喜男
道路建設課	宮坂博敏
河川課	武居兼文
砂防課	依田久男
建築課	上水明一
伊那建設事務所	松下通男
飯田 //	滝沢武勇
諏訪 //	浜堯貴

編集に当り利用させていただいた資料写真

- 梅雨前線豪雨資料No1～No6 (土木部企画調査課)
- 36年6月梅雨前線集中豪雨災害記録(下伊那地方事務所)
- 濁流のあと (上伊那地方事務所)
- 復興の記録 (伊那谷36災害復興感謝祭事務局)
- 梅雨前線豪雨災害から一年(土木部)
- 梅雨前線豪雨災害を顧みて(社会部)
- 災害防疫活動報告書(伊那保健所)
- 中川村の災害誌(上伊那郡中川村)
- 建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所より借用の資料写真
- 長野県文書広報課提供写真
- 信濃毎日新聞社撮影写真(写真提供と記入のもの)
- 伊那飯田各建設事務所および関係市町村撮影の写真
- 長野県気象月報(長野気象台)
- 長野県地質図(長野県地学会編)

災害復旧の記録(昭和36年梅雨前線豪雨災害)

昭和40年3月25日 印刷

昭和40年3月31日 発行

編集兼発行 長野県土木部

印刷 葛友印刷株式会社
